

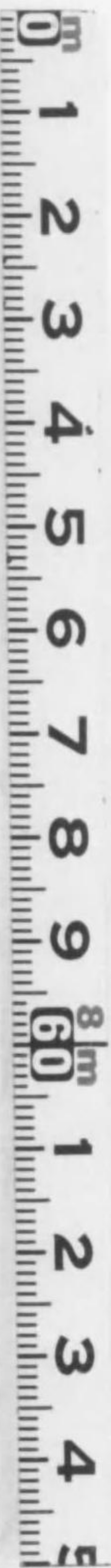
335

335-3504



1200501392422

504



始



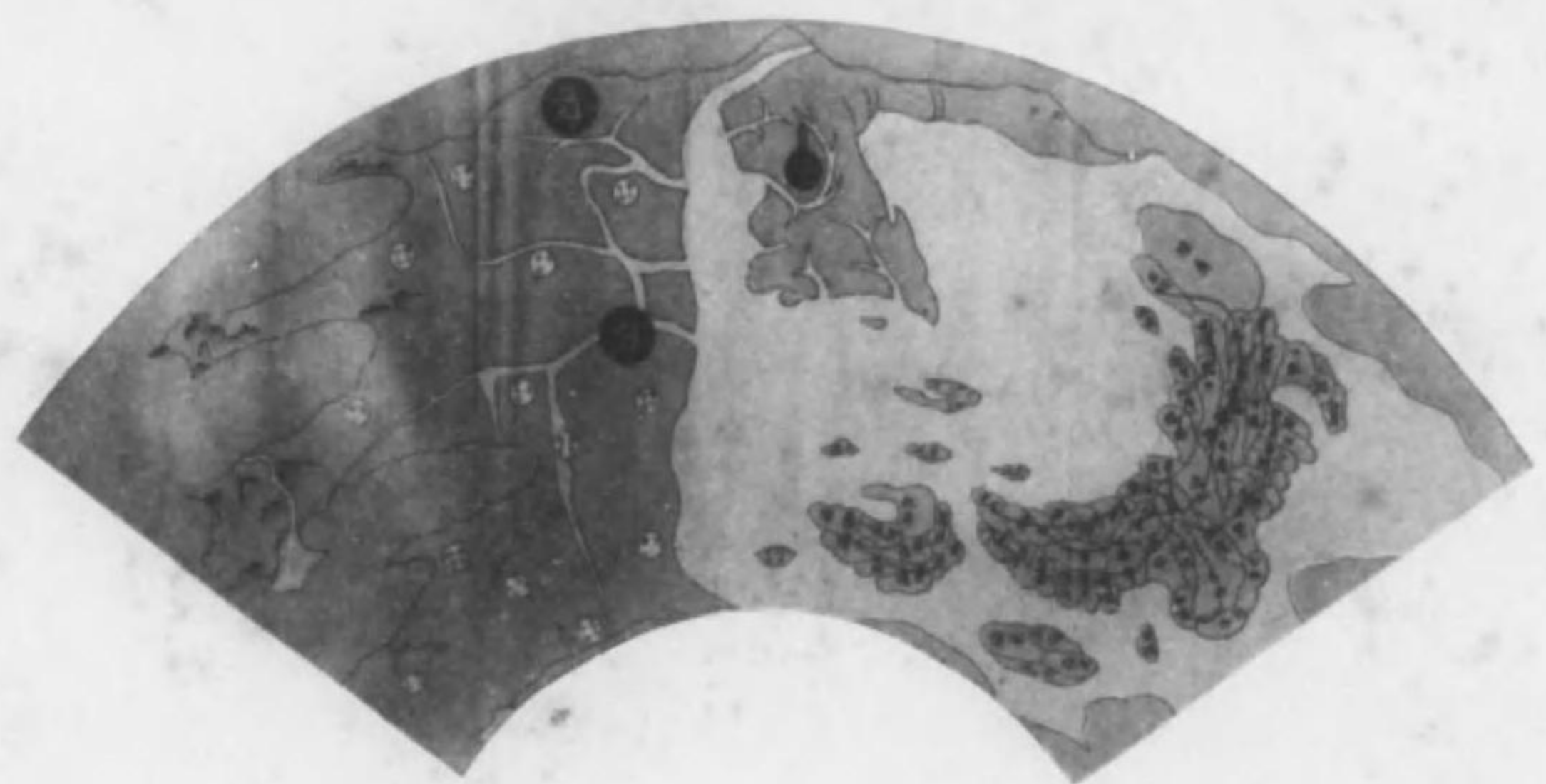
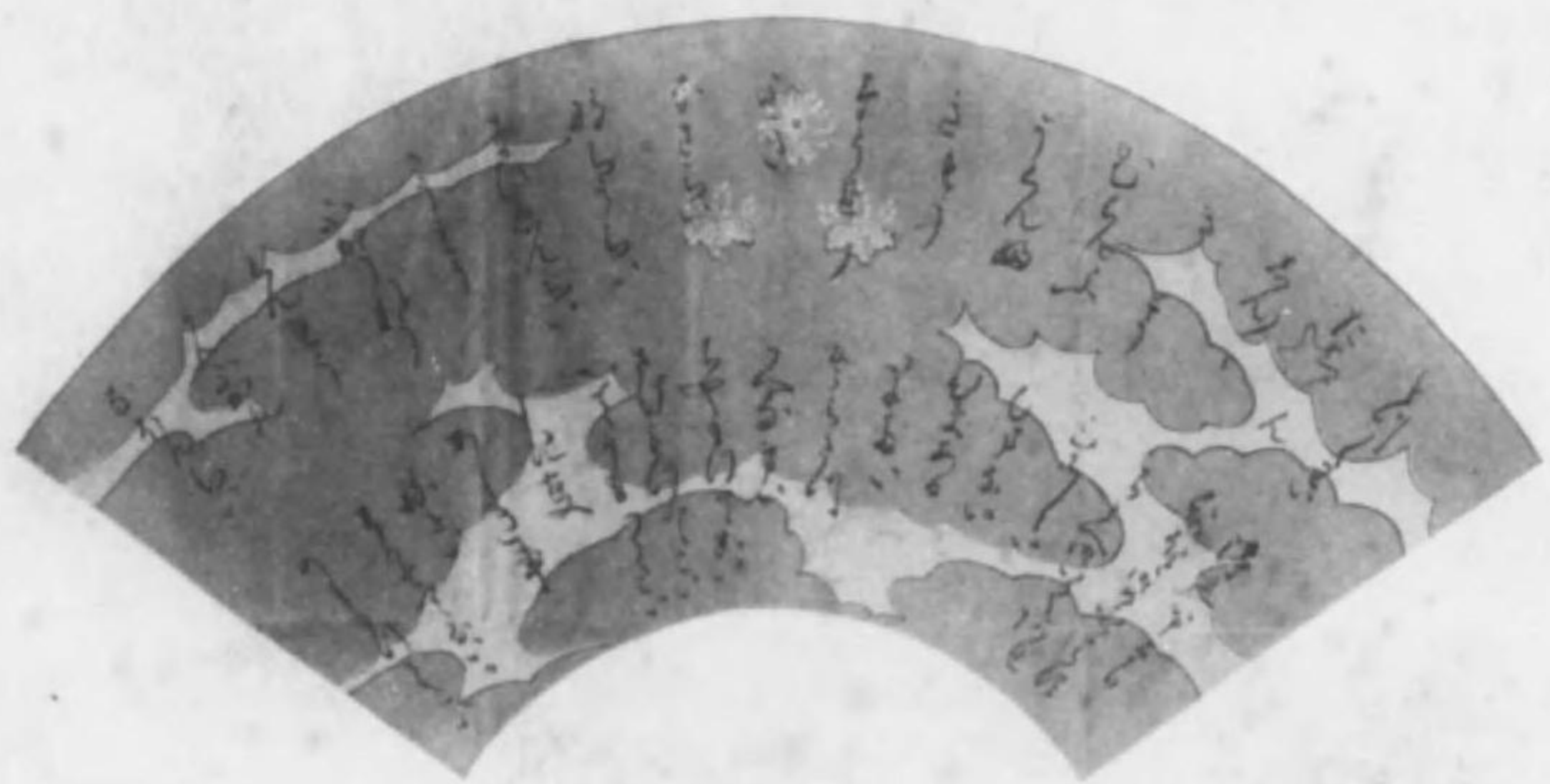
335-3501



英雄論

明治
45 3 23
購求





面扇の閣太豊

(習練の身自閣太てしに語譯其と語那支は圖上)
圖覽一の那支、鮮朝、本日は圖下、所しせ)

自叙

昔は楚人揚言して曰く、楚國は以て寶とすること無し。惟善以て寶と爲すと。善とは何ぞや。拿破崙謂ふ所の公善是なり。而して公善の指導は英雄に待つ。今や海内に英雄なし。緬々として其人を懐へば、應に鬻舍閭巷山林草澤の間に伏すべし。我一歌して之を起さん欲し、茲に

英雄論を作る。

日南學人

英雄論

(目次)

第一 何をか英雄と謂ふ……………一
神人とHeros ……Herosと英雄……………天下の英雄は
 使君と操とのみ……………多祁流と英雄。

第二 神人的英雄(一)……………七
ヘラクレスの十二偉業。

第三 神人的英雄(二)……………三三
希臘神代のHerosと日本神代の神人……………Herosの
 資格と英雄の資格。

の 第四 英雄の籠罩術(二)……………六

英雄と神異……………亞歷山……………漢の高祖……………豐太閤
……………證文の出し後れ。

第五 英雄の籠罩術(三)……………六

北條早雲と三略……………吳起卒の疽を吮ふ……………太閤
大谷吉隆の涙を吸る……………加爾十二世士卒と衣食
を同くす……………乃木將軍。

第六 英雄の風手(一)……………三

魁梧奇偉……………英雄必しも魁梧奇偉ならず……………澹
臺滅明と張良……………埃及々波斯の諸大王……………亞歷
山……………漢の高祖と後漢の光武……………虞舜と楚の項

第七 英雄の風手(二)……………只

羽……………夏の禹王と越王勾踐。
蜀の劉備……………燕領虎頭……………英雄の眼……………亞歷山
大王豐太閤拿破崙一世西洲南洲の眼……………團十郎
及糸屋娘の眼……………今世に英雄の狀貌を絶つ……………
ルーヴヅエルトは如何。

第八 英雄の本領(一)……………五

淵達大度……………唯一誠……………羽柴秀吉越水の會……………
加爾十二世ドレスデンの會。

第九 英雄の本領(二)……………六

曹操の權術……………劉備の性情……………孫策孫權の意氣。

……看來れば唯一誠

第十 英雄の本領(三)……………七

英雄の大志……………雄大崇高の理想……………亞歷山の志業……………秦の始皇の志業

第十一 英雄の本領(四)……………八

拿破崙一世の志業……………世界統一の目的

第十二 英雄の本領(五)……………九

豊太閤の志業……………東洋統一の目的

第十三 英雄の特能(一)……………一〇

超邁の創意と卓越の先見……………漢尼婆とシビオン……………源九郎義經と非黎德大王……………織田信長桶狭

の役……………羽柴秀吉の中國大返し

第十四 英雄の特能(二)……………一一

凡衆と英雄……………非黎德大王と拿破崙大帝……………凡衆は成形宗の信徒なり……………兵眼一撃……………獨逸の新工業

第十五 英雄の特質(一)……………一二

絶倫の精力……………邁往の氣象……………堅忍の意思……………繼續の精神……………加爾大王の千里獨行

第十六 英雄の特質(二)……………一三

漢の高祖と魏の曹操……………諸葛武侯の出師表……………加爾大王と彼得大帝

第十七 英雄の襟度(一)……………一五九

天眞即ち自發の本源……………魯の孔子と埃及の大王
アマジス二世……………放達……………忽必烈汗の放達……………
疎財……………漢の高祖豊太閤加爾大王西郷南洲の疎
財

第十八 英雄の襟度(二)……………一七〇

寛裕……………唐の太宗の寛裕……………自愚……………参や魯……………
太宗の自愚……………石田三成の亞雄たる所以……………
玉と水精……………眼中の英雄に告ぐ

第十九 英雄の性癖(一)……………一八一

二個の反撥性……………明の太祖……………クロンウエル……………

第二十 英雄の性癖(二)……………一八二

善にも強ければ悪にも強し……………英雄好まざる
所なく嗜まざる所なし……………加爾大王の功名心……………
梟雄亂を好む……………埃及のファラオン秦の始皇
及其他諸英雄の好土功……………大禹の治水……………ラム
セス三世の運河……………秦の始皇の長城……………亞歷山
太閤の建府

英雄色を好む……………ヘラクレス素盞雄尊彥舜以下
古今英雄の好色……………女英雄の好色……………加爾大王
水戸光圀克己の大勇猛……………英雄亦酒を好む……………
七分の哲理と三分の詩味

英雄論

福本 日南

第一 何をか英雄と謂ふ

神人と Heroes …… Heroes と英雄 …… 天下の英雄
は使君と操とのみ …… 多那流と英雄。

神代は悠遠なり。得て知る可からず。其遺業垂跡の綿々として吾人の想界に入り来るは、次の神人時代に在り。試に之を吾國に觀よ。大日靈貴尊より、鷦鷯草葺不合尊に至る、謂ふ所の地神五代は、宛たる神人時代に非ずや。又之を支那に察すれば

英雄論目次終

第廿一 英雄の必須 …… 104

附 録

文學的英雄 …… 三二

漢の司馬遷

伏羲神農より、陶唐有虞に至る、彼三皇五帝の際は、亦神人時代を現せずや。更に之を希臘に稽ふれば、曰くヘラクレス、曰くカストル、曰くポリュクス、曰くベルセー、曰くアガメームノン、曰くテゼー、曰くカドミュース、曰くウーデーブ等、炳乎として西方に神人時代を光耀せり。

是等の神人を、吾國人は神即ち嘉美と稱し、毫も天神と甄別せず。畢竟是れ崇の至りなり。敬の至りなり。今に及びても、英雄を欽仰し、併せて天下國家若くは社會公衆の爲に、身を捐て、難に殉し、英雄的事業を遺留せる者を追慕し、之が爲に祠を建て、祭を奉じ、稱して以て神と爲す。謂ふ所の靖國神社の如き、嚴たる其特象なり。是れ一に神人崇敬の遺風に非ざる莫し。

支那に於ては、特に通名なし。然も神人時代の英雄は、概ね當時の首長たれば、之を皇天上帝に配し、或は皇と爲し、或は帝と爲す。加之、其皇帝を皇天の寵子と爲し、之を稱して天子と謂ふ。亦神人崇敬より來れり。

希臘に至りては、殊に顯赫なり。神人時代より、其神人を稱してHerosと謂へり。Heros 如何の意義を有する歟。ビンダルに聽けば、「神と人との中間に在る者」即ち是なりといひ、ヘジオットに従へば、直ちに「半神」といふ。而してホーメルは一層人格として、「絶倫の戦士」と爲す。三者を蒼粹すれば、意は自ら瞭然たり。要「勇武絶倫なる神人」の謂なり。故にHerosは正しく我の神即ち嘉美に當れり。之を英雄と譯せんは、餘りに勿體なし。然りと雖も、國人のHerosを英雄と意識する、既に一日に非ざれば

英雄にても亦可なり。宜く神人若くは嘉美の意を加へ、以て其心に理解すべきのみ。

若し其れ支那に謂ふ所の英雄てふ語は、何れの時代に發生したりしやを知らず。然も其由來する所、亦久しからずとせず。

雄とは元來陽禽の稱なり。是れ猶ほ人に於ては男と謂ひ、獸に於ては牡と謂ふがごとし。移して之を人に擬するや、男中の男を意義し、亦自ら勇武絶倫の稱となれり。左氏に「某は寡人の雄」、人物志に「韓信は是れ雄」と謂へるが如き、以て觀る可し。

英雄の語は之に次ぎ、梟雄、姦雄、豪雄、眞雄、驍雄、文雄、才雄、詞雄等の語は、又亦之に次ぎたるならん。

魏志にいふ、後漢の末造、天下大に亂れ、高材逸足の士皆自ら逞くせんと欲するに當り、曹操と劉備とは最も名あり。曹操

一日食を命じ、劉備と共に食す。操從容として備に謂て曰く

「今天下の英雄は使君と操とのみ」と。英雄てふ語の史に見えたるは、恐らく是を權輿と爲さん。

顧みて之を吾國語に視るに、其語の英雄に匹す可きは、健即ち多祢流に在らん。神人時代には五十猛神あり。神武天皇の代

には、八十健あり。景行天皇の時には、熊襲の川上健及出雲健あり。是れ皆勇武絶倫にして、英雄の稱號を其名に負ひたるなり。

何に由りてか之を言ふ。記に傳ふ、小碓尊女裝して、熊襲が營に入り、一撃先づ兄健を仆し、次に搏ちて弟健を伏し、將

に其首を取らんとしたまふや、健膝下より叫びて曰く、請ふ暫く其手を停めたまへ。吾兄弟の海西に雄視する、一日に非ず。誰か敢て我に敵する者ぞ。而も今斯くの如し。願はくば子の名

を聴かん。尊曰く、我は皇子倭小童、欽命を奉じて、汝兄弟を
征する者なりと。健嘆喟して曰く、嗟其れ然る乎。兄弟の相敵
せざる、亦其處なり。臣請ふ殿下に御名を獻らん。自今以往、
宜く倭健皇子と稱したまふべしと。言訖りて誅に伏せり。請ふ
其言に視よ。「今天下の多祁流は皇子一人のみ」といふに在り。
即ち是れ「天下の英雄は使君と操」以上に在り。多祁流の英雄
に當れる、以て觀る可し。舍人親王日本紀を修め、皇子を日本
武尊と書けるは、太だ善し。八十や、川上や、出雲の多祁流に
梟帥の字を充てたるは、笑ふ可し。是にして受取る可くば、五
十猛神は五十梟帥神となり、日本武尊は日本梟帥尊となりたま
はんのみ。豈是れ英雄尊嚴の胃瀆には非ずや。

第二 神人的英雄 (二)

ヘラクレスの十二偉業。

古希臘の Heros を謂ふ者は、先づ其指をヘラクレスに屈す可し。
何となれば、Heros の神格を有すること、未だヘラクレスの右に
出づる者あらざればなり。ヘラクレス抑如何なる神人ぞ。
傳へいふ、ヘラクレスは天神ジュピターの子なり、母をアルク
メースといふ。ジュピターと交りて、ヘラクレスを産めり。ジュピ
ターの正后女神ジュノン深く之を嫉妬し、併せて其誕兒を憎惡し、
密に之を殺さんと欲し、二長蛇を遣はして其室を窺はしむ。時
にヘラクレス熟睡して搖籃の裏に在り。微に凶惡の氣息に感じ、
目を開けば、兩蛇盤を繞ひ、交將に己を咬まんとす。ヘラクレ

ス直ちに手を伸ばし、左右に兩蛇の首を握み、力を極めて之を
揺げば、兩蛇窒息して、立ちどころに震死せり。是に由りて免
かるゝを得たり。

長ずるに及びて、ジノンンの壓迫益甚し。乃ち家を逃れて、ア
ルゴーに走り、國王の太子ユースターの舍人と爲れり。太子
亦其勇武を忌害し、陰に之を除かんと欲す。是に於て乎相次ぎ
て難中の難事を命じ、其必成を督責せり。

其一は猛獅の獵獲に在り。時にネメーの深壑中に犖犖の獅子
あり。人畜の壑中に入る者、皆其の爲に害せられざる無し。王
子命じて之を獵獲せしむ。ヘラクレス乃ち弓箭を帶して、之に
赴けり。忽ちにして猛獅咆哮して出来る。ヘラクレス弓を挽き
て之を射るに、箭々虚發なし。唯だ獅皮鞞くして洞せず。然も

獅子其勢威に畏れ、軀を反して、棲窟に匿る。ヘラクレス躍り
て窟中に入り、徒手此猛獸を曳出し、鐵拳を加へて、終に之を
搏ち仆せり。由りて其皮を逆剝にし、修めて以て其甲と爲す。
所謂ヘラクレスの獅子甲は即ち是なり。

其二はレルンに棲める九首の虬の斬獲に在り。此虬は一體に
して九首あり。口角より毒霧を吐く。人畜の之に觸るゝ者、醉
ひて死せざる無し。王子復た之が斬獲を命ず。ヘラクレス直ち
に戦車に駕し、イオラオスをして御に當らしめ、進みてレルン
に向ふ。既に到れば、毒虬大澤中に蟠踞せり。ヘラクレス先づ
一箭を加へて、之を誘出す。毒虬果して大に怒り、巴旋して來
り逼る。ヘラクレス劍を揮ひ、左右に之を斷つ。但だ其一首を
斷つの間、他首簇りて、ヘラクレスを咬まんとす。イオラオス

手に松明を焚きて、敢て近づけず。是に由りて九首を斷割したりたり。ヘラクレス乃ち背上の諸箭を抜き、鏃を萃めて、虵身の毒血に湛浸す。是より以往、其毒箭に射らるる者、皆震ひ死せざる無し。

其三はエリマント山の豪猪の狩獵に在り。此豪猪久しくアルカデー地方を徘徊し、住民の患害を爲せり。ヘラクレス赴きて之を狩り、追ひて積雪の竇中に擠し、生きながら之を擒へ、肩上に擔ぎて歸來せり。

其四はスチームファール湖の怪鳥の退治なり。此怪鳥は軍神マルスの眷屬なり。常にアルカデーの山中スチームファール湖邊に在り。兩翼皆鐵より成り、恰も劍戟を連ねたるが如く、人を見れば飛來り、翼を鼓して疾撃し、仆して其肉を啖へり。ヘラク

レス一たび山中に入るや、毒箭を連射し、悉く其眷屬を族滅せり。

其五は女神ヂャーヌの眷屬牝鹿の捕獲に在り。此牝鹿たる、黄金の角、黄銅の脚あり。其の馳すること疾速にして、疲困を知らず。ヘラクレス其踪跡を山野に搜り、追躡すること且つ一年、終に追及して、其金角を拉し、牽來りて太子に致せり。

其六はエリード國王オーシアスが大鹿の洗滌なり。國王畜を蓄ふること數千頭、大鹿の裏、糞糞堆積して、高層を爲し、諸舍人皆手を束ぬ。太子ユーリスター乃ち命するに、一日の間に之を清掃す可きを以てす。ヘラクレス命を承くるや、一大孔を厚壁に穿ち、アルフー川を引きて之に注ぐ。萬斛の水鹿中を洗滌し、頃刻にして其業を畢りたり。

其七は闘牛の奪還なり。初め海神ネプチューヌ一頭の闘牛をクレイト王ミノースに賜ひ、之を牲として己を祭らしむ。王其牛を恠みて捧げず。海神怒る。ユーリステー亦之が奪還をヘラクレスに命ず。ヘラクレス乃ちクレイトに到り、闘牛の前に立てば、闘牛匍匐して、敢て動かさず。ヘラクレス身を躍らして、其背に騎し、得々海を渡りて還れり。

其八はトラス王の剽蕩なり。トラス王デオメード兇暴にして、多く悪馬を蓄へ、凡そ海客の颯風に遭ひ、トラスの濱海に漂著する者あれば、捕へて之を厩中に囚し、一大銅盤の裏に投じ、悪馬に食へて之を食はしむ。ヘラクレス命を受け、數名の勇士を率ゐて、其國に到り、デオメードの從隸を驅りて、厩内に追容れ、王を併せて銅盤に上せ、悉く悪馬の食と爲し、此國を平

定せり。

其九はアマゾン女王の寶帯の搜索なり。ユーリステー其寶帯を獲んと欲し、之が索取をヘラクレスに命ず。アマゾンは黒海の東方に在る女人國なり。國中に男子なく、女人皆騎射を善くす。寶帯は其國の女王ヒッポリートの腰にする所。ヘラクレス乃ち數人を從へ、進みて女戰士と激戦して之に克ち、最後に女王を仆し、其寶帯を收めて凱旋せり。

其十はエリーチーの驛牛の捕獲なり。此島は極西の大洋中に在り。赤色の驛牛其上に蕃息す。一身にして三體の巨漢ゼイロンの之を有し、オルトロースと稱する一軀にして兩首の一獒犬と、他の一怪巨漢ありて、之を護せり。ヘラクレス此驛牛捕獲の命を帯びて、地中海に浮ひ、阿弗利加の沿岸に従ひ、西へ西へと

に航し、而る後ち東海に旋り現はるなりと。故に此傳あり。ヘ
 ラクレス終に太陽の恵に頼り、黄金盤に乗りて、意中のエリー
 チー島に航到せり。兩首の糞犬オルトロス早くも之を望み、牙
 を露はして向ひ来る。神人鐵槌を揮ひ、一撃の下に仆す。一怪
 巨漢次ぎて前む。復た亦之を戮す。最後にゼイロン猛然來り拒
 む。神人一箭に射て、其胸を洞し、辟牛を捕獲して還る。
 其十一は神園の黄金林檎の採收なり。抑此神園は世界の極端
 に在り。明星の星女ヘスベリドの有する所。ヘスベリド姉
 妹三人、端麗他に雙ぶ無し。常に來りて園中に遊べり。園に林
 檎あり。黄金の實を結べり。火龍其下に在りて之を護り、何人
 も近づくを得ず。ユースター太子其果實を獲んことを欲し、
 亦ヘラクレスに採收を命す。ヘラクレス争はず、唯々遠征の

航すれば、圖らず一地峽の處に到れり。只見る歐洲北より突出
 し、阿洲南より偃蹇し、兩陸接續して、大洋に出づ可からず。
 ヘラクレス怒りて、猿臂を伸ばし、左右の地角を攫み、大喝し
 て之を割けば、忽ち開けて海峽となり、且つ其兩手に攫みたる
 地角の跡は、隆然として兩山と爲れり。ヘラクレス山は即ち是
 なり。(今ジブラルタルの左右に在るカルペー及アピラの兩山。)
 神人乃ち大洋に出づれば、日光赫々として、苦熱燬くが如く、
 進まんと欲して、進む可からず。ヘラクレス以爲へらく、是れ
 太陽我を碍ぐるなりと。一箭を抽きて、弦に上せ、瞳を凝らし
 て太陽に擬す。太陽之を顧みて、且つ驚き、且つ壯とし、一大
 黄金盤を取りて、之に假せり。蓋し古の希臘人は謂ふ、太陽の
 西に没して、東に上るは、大地の上に照臨したる後ち、西大洋

レス一喝、撲ちて地に投ず。巨漢屈せず、起ちては復た抗す。
 而して一投せらるゝ毎に、其力一倍し來る。ヘラクレス以爲へ
 らく、是れ大地の子なり。故に其軀、母體に觸れ、強援を得來
 るなりと。乃ちアンテを抱へて、中空に吊し、兩腕の力を極
 めて一緊すれば、巨漢忽ち靈を失ひ、窒息して死せり。最後に
 ヘスペリドの神園に達す。火龍天矯して、敢て靈樹に近づけ
 ず。神人劍を抜きて之を兩斷し、終に黄金の林檎を採收して還
 れり。一説には、神人、星女の國境に近づくや、更に一巨漢ア
 トラスの天を撐げて立てるに逢ひ、神園及靈樹の所在を問ふ。
 アトラス曰く、神人、我ために天を撐げなば、我請ふ代りて其
 業に任せんと。ヘラクレス之を喜び、肩上に天を擔ぎて待つこ
 と多時、アトラス果して多くの黄金林檎を採り來り、之をヘラ

途に就く。然も其所在を知らず。幸にして海中の女神ニムフに
 邂逅し、問ふにエスペリドの通路を以てす。ニムフ告げて曰
 く、之を知る者は、唯だ海伯ネレーあるのみ。然れどもネレー
 夙に勇力を負へり。之に打克つに非ざれば、彼は其所在を救へ
 じと。ヘラクレス之を領し、更に進む。偶にネレーが海濱に午睡
 せるを發見し、直前して其臂を牽く。ネレー固より變幻の術あ
 り。忽ちにして猛獅となり、忽ちにして長蛇となり、又忽ちに
 して火燄となり、百方神人を威嚇するも、神人驚動せず。ネレ
 ー遂に屈し、神園の所在を教ふ。神人喜びて路を阿弗利加に取
 る。一日端なく怪巨漢アンテに遇ふ。アンテ一兇猛、凡そ往
 來の人を見れば、悉く之を殺して、其行李を掠奪し、之を父廟
 に懸く。今ヘラクレスの來るを視るや、其路に要せり。ヘラク

クレスに授けしと云。
 其十二は地獄の門番セルベールの捕獲なり。是れ蓋し難中の難事なり。然もヘラクレス敢て辭せず。身を挺して、大地の底に入り、豫め地獄の神に見えて、生命を致す。獄神いふ、爾の欲する所に委す。但だ徒手彼を捕ふ可し。一切武器を用ゐるを許さずと。ヘラクレス欣謝し、往きてセルベールを捕ふ。此怪物は三首巨軀蛇尾の獒犬なり。其聲黃銅の如く、一たび吼えれば、人獸戰慄せざる無し。ヘラクレス進みて之に邂逅し、直ちに其頸を拉る。怪物抗せず。牽きて地獄の境外に出せり。
 ヘラクレス既に十二偉業を成すや、ユーリスターも亦之を臣とするを得ず。神人の英名天下に聞ゆ。時にカレイドン王の王女デジャーニール端麗雙び無く、舉世其美を稱す。神人之と婚せん

と欲す。時に河伯アケルースも亦此王女に懸想せり。河伯固より變幻の術あり。或は鬪牛となり、或は巨蟒となり、又或は巨人となり、以て對敵を屈せしむ。而して其頭上に兩角を戴き、一たび怒れば、波浪を起して現れ出づ。ヘラクレス之と戦を挑み、亦克ちて、其兩角を拔けり。河伯降伏し、他角を以て其角を償はんことを請ふ。神人之を許す。河伯授くるに無量福角を以てす。一たび此角を揮へば、百花榮々として開き、果實榮々として堆し。神人終にデジャーニールを得たり。神人、王女と相得て、伉儷ただ佳し。一日夫妻相携へて、遠遊の程に上る。途に一大川の前に出づ。河畔に半人半馬のネシユースといふ者あり。背を以て行客を涉せり。今デジャーニールの騎して背上に在るを偷視して、戀々の情禁せず。ヘラクレスを前岸に遣し、王女を拐

帶して遠く逃れんとす。ヘラクレス大に怒り、毒箭を抽きて之を射れば其箭忽ちネシユースが胸鬲を洞す、ネシユース其の生く可からざるを思ひ、王女に謂て曰く、吾身内に靈血あり。王女幸に此血を貯留せよ。異日君王の愛、他に移らんとすることあらば、此血を以て後の御衣に澱ぎ、君王に勸めて之を服せしめよ。愛情後の一身に鍾まらんと。王后之を信じ、陰に其血を收めて去れり。

神人夫妻遠遊の後、行途恙なく、將に本國に還らんとす。神人以爲へらく、幣を天神ジビターに捧げて、以て神恩を感謝せんと。乃ち愛後の御服を求め、侍人リカスをして齎らして先發せしめんと欲す。デジャーニール猜疑すらく、吾好衣を取りて先行せしむ。是れ他の褻幸に贈るなり。ネシユースの遺血を用ゐるは、

是秋に在りと。密に其血を服中に澱ぎ、夫王に告げて曰く、君王先づ之を着し、而る後ち神明に捧げたまへと。何ぞ圖らん、ネシユースの身血は毒液なり。之に觸るゝ者は立ちどころに死す。ネシユース豫め之を留め、其戀の遺恨を死後に報せんと欲せしなり。王后覺らずして之を進め、夫王も知らずして之を服す。忽ちにして全身火の如く、五體燃えんと欲す。ヘラクレス熱狂して、后服を擲たんとす。王后抑えて擲たしめず。大王煩悶狂の如く、自ら起つ可からざるを覺り、足を掲げて、ウタ山の山巔を蹴れば、巔角缺陷して、大竇となる。乃ち手に任して四近の喬松大榎を抜きて、竇中に投じ、自ら其上に登りて、火を點せしむ。左右悲みて、皆命を奉せず。神人意益切なり。手に一樵夫を麾く。樵夫唯々として、火を放つ。大王愕然、其弓箭を把

りて之に賜ふ。既にして炎焰天に沖し、猛火玉體に及ぶ。倏忽にして白雲其上に下り、ヘラクレスを包擁し、碧落に向ひて昇り去り、頃刻にしてオリムプの神宮に達す。ジュピター怡々たり。諸神欣々たり。嘗て此庶子を疾視したるジュノンも、其雄偉に感じ、神女ヘペーを以て之に配し、永く天樂を共にせられしとぞ。

第三 神人的英雄 (三)

希臘神代の Heroes と日本神代の神人…… Heroes の資格と英雄の資格。

希臘の神話は、ヘラクレスをアルクメーヌの所生とし、所謂

十二偉業を擧げて、斯神人の一身に歸すれども、史實に聽けばヘラクレスは管に一人のみならず。ヅァロンは同名四十三人を數へ、デオドルは中に就きて神人三人を認め、シセロンは更に六人を特表せり。且つシセロンの所説は一層詳細なり。其六人中、三人は希臘人にして、一人は埃及人、又一人は克黎得人にして、最後の一人は印度人なりといへり。夫の十二偉業の區域が三大陸に亘れるを視れば、其説或は真に幾し。蓋し悠久なる年代の間に傳説相混じり、合して一人となり、又一人の事業となりたるならん。斯くの如きは、有史以後にも亦往々見ることあり。例へば「ローランド歌謠」中に在るカールマン大帝の十二勇士の如き、歌謠に合して、之を琵琶に上せ、今に於て歐洲社會一般に同時の人とし受取れるも、然も其實は大帝の前後二百

年間にいでたる諸勇士を收め來りて、之を大帝の部曲に入れたるものなりと云。又近くは慶長元和の頃、倭僮不羈の日本人が暹羅に入り、前後に立てたる功業を併せて、之を山田長政の一身に歸したるが如し。然れば希臘の神話にヘラクレスの一人となり、又十二偉業の其一人の手に屬したるに於て、將た何ぞ疑はんや。

顧みて吾神話に視れば、吾神人及其垂跡、何ぞ諸ヘラクレスと其諸事業に相似たるの甚しきや。素蓋雄尊の八頭八尾ある所謂八岐の大蛇を斬りたまひしは、猶ほヘラクレスがレルンに於ける九首の虺を夷げたるがごとし。尊の正名を健速進男尊といふ。健は多祁流にして、強健を意味し、速は疾速矯捷をいひ、進は直前邁往の義、即ち亦英雄の尊と謂ふが如し。手力雄命が

手に天窟戸を劈開せられたるは、亦猶ほヘラクレスが歐阿の海峽を割洞したるがごとからずや。其威武よりしては、八千戈神と稱せられ、其經國よりしては大國主神と呼ばれ、能く幾難に克ちて、英名を揚げられたる、大名貴命は、亦酷だヘラクレスが干戈落々偉業を建てたるに肖たらずや。又千曳の巖を掌上に擧げ、來りて武甕槌と勇力を競はんとせし健御名方神は、大國主命の神子だけに、一層大地の子アンテイに類するを覺え、而して一擧其手を若草の如く搯ぎたる武甕槌命は、宛たるヘラクレスのジューズに非ずや。其武甕槌は即ち猛嚴擊、亦英雄の本色を狀せり。

此に知る可し、彼に謂ふ所のヘアロス、我に謂ふ所の神人即ち嘉美の意なることを。故に古の希臘人はヘアロスに對しては、左の

篤信を抱きたり。

第一 Heros は男神若くは女神の御子ならざる可からず。

第二 Heros は半ば、神、半ば、人として世に見はれ、人間以上に居らざる可からず。

第三 Heros は王若くは大戦士となり、大事業大戦功を建てる者ならざる可からず。

第四 Heros は常に神佑を受け、死後は其身其れすがら、直ちに神となる者ならざる可からず。

是れ即ち Heros なりと。是れ吾神人時代の神人を神とし崇敬するの意と、其跡全然吻合せずや。

今其れ是等内外の神人即ち Heros を英雄の稱下に受取る可くば、
第一 英雄は其天稟超邁ならざる可からず。

第二 英雄は其勇武絶倫ならざる可からず。

第三 英雄は其思想純正ならざる可からず。

第四 英雄は以上の資質を有し、世の爲に暴を禁じ、人の爲に害を除く者ならざる可からず。

従ひて雄偉及正義の感念は萃めて英雄の身上に在り。此間には毫末も後の所謂梟雄若くは姦雄等の悪念を容れず。彼や梟雄若

くは姦雄の類は、世を咒ひ、人を害する、巨漢怪物の眷族にして、ヘラクレスが長箭の鏃に塗り、素盞雄尊の十束劔の下に伏

す可き者なるのみ。

第四 英雄の籠罩術 (一)

英雄と神異……亞歷山……漢の高祖……豊太閤……証文の出し後れ。

眞の英雄を以て、神の權化と爲すの信念は、有史以後に至りても、依然たり。是を以て英雄の世に出づる毎に、靈異を傳ふるもの、史上歴々其記を絶たず。

亞歷山大王誕生の日、エフネーズに在る月神チャースの神殿より猛火發し、忽然として炎上せり。闔府驚き且つ怖る。哲人へゼジャス靜に諭して曰く、人々驚怖すること勿れ。惟ふに天神英雄を此世界に降さんとし、諸神をオリムピヤの幽宮に會したまふ可し。月神も亦入りて之に列せられん。且つ夫のチャース

は女神なり。最も其事に鞅掌せらる可し。是を以て神殿一時空虛となり、恐らく此災は發せしならん。同日生れたるマセドニ王の子は即ち是れ神子神孫ならざること莫らんやと。又此日亞歷山の父王布立夫は戰闘に競技に、會二大捷報を獲たり。父王狂喜して曰く、是れ誕兒が未來運命の神瑞なりと。

漢の高祖も亦一身に神異を繋ぐ。史に稱す、高祖の母劉媪嘗て大澤の陂に息ひ、夢に神と遇へり。是時雷電晦冥せり。其夫太公往きて視れば、蛟龍を其上に見たり。既にして身ごもるあり。遂に高祖を産めり。高祖長じて泗水の亭長となり、常に王媪武負に従りて酒を貰ひ、陶然として酔臥せり。武負王媪其上を見れば、亦龍あり。高祖亭長として縣の爲に囚徒を鄆山に護送す。囚徒多くは道より逃亡す。高祖自ら度りけらく、達する

比ほひまでには、皆な之を亡はん。寧ろ之を散遣するには如かずと。一夜豊の西澤に到りて止まり、徒と俱に酒を飲み、悉く解縦して曰く、公等皆去れ。吾も亦此より逝かんと。徒中の壯士其意氣に感じ、従を願ふ者十餘人。時方に深夜なり。高祖酒を被り、澤中を徑行す。一人の前行者還り報じて曰く、前に大蛇ありて、吾徑に當れり。願くば此より還らん。高祖聽かずして曰く、壯士行くに、何をか畏れんと。前みて劍を抜き、撃ちて其蛇を兩斷し過ぐ。一壯夫あり、後れて蛇の横れる所に至る老嫗の其傍に哭するあり。何をか哭するやと問へば、人、吾子を殺す。故に哭すといふ。更に嫗の子何にか殺されたりやと問へば、嫗曰く、吾子は白帝の子なり。化して蛇となりて道に當る。今赤帝の子に斬らる。故に哭すと。壯夫以爲らく、嫗妖言

すと。將に之を答たんとす。嫗忽ち見えす。來りて之を高祖に告ぐ。高祖心に喜びて、私に自負したり。秦の始皇帝常に曰く東南に天子の氣ありと。乃ち東巡して之を厭す。高祖畏れて、芒碭山澤の間に隠る。呂后、人と俱に求め、毎に其所在に至る。高祖怪みて之を問へば、呂后曰く、季の居ます所の上には、常に雲氣あり。故に従ひ至るなりと。高祖心に又喜べりと。願ふに亞歴山は紀元前四世紀に現はれ、漢の高祖も亦紀元前三世紀に出でたれば、神人時代を距ること未だ遠からず。其人の神異に圍繞せらるゝもの、未だ以て奇とするに足らず。而も英雄を以て神子神孫とし、之を人間以上視するは、數千載を通じて、渝ることあらず。近くは吾豊太開は天文六年に生れ、今より三百七十八年前に過ぎず。然も國史は傳へいふ、其母、太

陽の懐に入るを夢みて、身ごもるあり。此英雄を産みたり。故に字して日吉といへりきと。是れ曾だ傳説的記録を然りとすのみならず、太閤海内を統一したる後、兵を明韓に用ゐるの際、當時西班牙の藩屬たるフィリッピンの太守に移牒し、其入貢を促せる文中、亦之を徴す可きものあり。其書に曰く、

「夫れ我國は、百有餘年、群國雄を争ひ、車書、軌文を同くせず。予や誕生の時に際し、天下を治む可きの奇瑞ありしを以て、壯歳より國家を領し、十年を歴すして、彈丸黒子の地を遺さず、域中悉く統一せり。之に縁りて、三韓琉球遠邦異域、塞を款きて來享せり。今や大明國を征せんと欲す。蓋し吾の爲す所に非ず。天の授くる所なり。其國の如きは、未だ聘禮を通せず。故に先づ群卒をして其地を討たしめんと欲す。

原田孫七郎、商船の便を以て、時に此に來往す。故に近臣に紹介して曰く、某早々其國に到り、備に本朝發船の趣を説く可し。然らば則ち獻篋を解辨す可し云々と。帷幄を出でずして、勝を千里に決するは、古人の至言なり。故に謁夫の言を聽きて、暫く將士に命せず。來春は九州の肥前に營す可し。時日に移さず、降幡を偃せて來服す可し。若し匍匐膝行、遅延するに於ては、速に征伐を加ふ可きや必たり。悔ゆること勿れ。不宣。原書は漢文。

天正十八年秋季十五日

即ち太閤自身も亦其誕生の奇瑞を認めたるや、斯くの如し。阿々、是れ風氣未發の時代に於ける英雄が籠罩術の存する所なり。蓋し英雄に取りて幸なるは、英雄を以て神の權化なりと

する一般の信念なり。是れ此信念は、神代以來深く人心に印象し、世を歴、時を易へても、尙ほ斯生民の腦裏より去らず。故に天下に爲すことあらんと欲すれば、先づ人をして、彼は神人なり、人間以上なり、到底人力の企て及ぶ所に非ずと信仰せしむるより便なるは無し。一たび此信仰を惹かば、統馭に、征服に、力を用ゐること一半にして、功を收むること倍獲す可し。英雄豈神異を假らざるを得んや。願ふに漢高の如き、固より壯士、芒碭山中夜行の際、青大将の一匹やそこら斬りて棄てたる事實はあらん。後れて到れる一人が聽得たる老嫗の赤帝白帝談は、恐らく漢高方寸の自作。否らざれば、後れて到りし彼參佐亦此際より畫心ありて、當時未顯の英雄に、豫め箝を着けたるならん。其他の雲龍五彩の譚、亦又之に類せんのみ。太閤の時

代近しと雖も、此故智尙ほ時代に用ふ可し。母氏の夢みし所のもの、果して日輪なりけん歟、若くは懷裏に入りたるは、其形圓々日輪の如く、其光赫々太陽の如き、筑阿彌が禿願なりけん歟、今日よりして知る可からざるも、此夢一世の承認を経て、山澤の英雄、士民の子、將門の將種より貴きを見る。太閤の薨後、百年を出でざるに、吾國の風氣は大に發す。國民は既に講學に嚮ひて、懷疑は既に想裏に動く。何等の愚物ぞ由井正雪、身此際に生れながら、英雄過去の籠罩術を假りて、信を一世に博せんと欲し、豫め菊水の章旗を造りて、之を淺間の山嶺に藏し、一日夢想に託して、之を發掘し、自ら楠子の裔なりと號稱す。信從する者十百人にして、懷疑する者千萬人、彼の成らざりしもの、是に由りて知ることを得べし。是れこれ

を證文の出し遅れと謂ふ。彼は嘗て太閤傳を讀みて、其志を立てたりと云。太閤をして生きて彼が陳套の套襲を視せしめなば、馬鹿が……と一喝す可きのみ。

第五 英雄の籠罩術 (二)

北條早雲と三略……吳起卒の疽を吮ふ……太閤、大谷吉隆の漢を吸る……加爾十二世、士卒と衣食を同くす……乃木將軍。

北條早雲は吾戰國時代の一雄なり。一日儒生を召して、黃石公が三略を講せしむ。儒生乃ち開卷第一「主將の法は務めて英

雄の心を攪る」と誦するや、早雲聲に應じて曰く、我既に焉を得たり。復た説くこと勿れと。命じて其講を停めしと云。頼襄之を嘆稱して曰く、足利氏其綱維を墮して、權臣内に閱ぎ、海内争亂す。然る所以のものは、天下の英雄各其心を以て心と爲し、主將之を收攪する能はざればなり。早雲早く此に見るあり。以爲へらく、天下の事知る可きのみと。故に一劔の任に仗りて、天下を周流し、武を用ゐるの地を求め、一たび其地を得て、雲蒸龍變せり。夫の兩上杉氏は百年の故家、財賦の富、兵馬の雄を以てして、早雲赤手之を圖る。奚ぞ雖もて山を鑿つに異ならんや。乃ち能く戦へば勝ち、攻むれば取り、其死命を制せしは、果して何の恃む所ありて然りしか。英雄を結納し、其驩心を得るを以てなり。兵寡くして、志一、地狭くして、力合す。同舟

江を濟り、期せずして救ふが如し。此を以て敵に臨む、天下を横行すと雖も、難きこと無し。而るを況や兩上杉氏に於てをやと。

三略の首章に謂ふ所の主將は、自ら英雄の英雄を意義し、次に謂ふ所の英雄とは、蓋し英物の義なり。我をして言はしむれば「英雄は務めて將士の心を攪る」といふの一層適切なるを覺ゆるのみ。古今英雄の籠罩術たる、時に應じ、世に處して、其形體は百變すと雖も、要は唯だ此一語に盡さん。其の平素よりして衆心を收攬し、事あるに及びて、操縱驅使するは、固より論なし。大事に當り、衆の疑懼を釋き、人々をして勇躍して吾用を爲さしむるが如き、亦自ら箇中に在り。風氣未發の時代に當り、東西の英雄が屢々神明の靈驗を稱し、三軍の士氣を強くし

て、寇を取り、敵に克ちたる史實、歴々として簡冊に絶えざるは、即ち斯術の一端に屬せり。

史記にいふ、吳起の魏將となるや、士卒の最下なる者と衣食を同くし、臥するに席を設けず、行くに騎乗せず。親ら糧を裹贏し、士卒と勞苦を分てり。卒に疽を病む者あり。起爲に之を吮へり。卒の母聞きて之を哭す。或謂ひて曰く、爾の子は卒なり。將軍自ら其疽を吮ふに、何ぞ哭することを爲すや。母が曰く、然らず。往年吳公、其父を吮ふ。其父戰ひて踵を旋らさず。終に敵に死せり。吳公今又其子を吮ふ。妾其死所を知らず。是を以て之を哭すと。

起や紀元前五世紀の人、故に史記の傳ふる所のもの、或は誇張其實に過ぐるあらんかを疑はしむ。然も後世英雄の爲す所に

uniform

英 雄 論

のは、大端實に此際に發せり。視て一たび此に至れば、覺えず
 膚上に粟を生ず。
 若し夫の吳起が士卒の最下なる者と衣食を同くし、臥するに
 席を設けずといふものと、其揆を一にする、古今東西其人に乏
 しからず。近くは二百餘年前、歐洲の天地を震動せし瑞典の英
 主加爾十二世は、軍中に在りて、常に兵卒と同一の食を食し、
 其御服の如きも、亦兵卒と同一のユニフォームを着けられたり。
 故に列國使臣の始めて軍營に來調する者は、概ね盛裝せる宰相
 ビー伯を大王なるかと誤りしと云。大王常に中歐に在りて、
 天下を力征すること十年處、而も三軍遠征の苦を思はず、大王
 を視ること慈父の如くなりしものは、則ち是にこれ由れり。今
 や列國上下の制法あり。上將と下士卒と服飾相混す可からずと

英 雄 論

視て、其の信然を知るものあり。豊臣氏の世に、一日太閤若
 を開き、手に芳茗を點して諸將を饗す。大谷形部少輔吉隆も亦
 其中に在り。若法一椀の點茗を坐客に轉々し、衆口之を分啜味
 賞するを以て、其儀と爲す。椀は傳へて吉隆の手に到る。吉隆
 承けて將に之を服せんとす。斯人平生惡疾あり。鼻涙垂れて椀
 底に落つ。飲み盡して、其痕を置さん乎、若法に背く。其まゝ
 直ちに他客に移さん乎、汗穢を奈何せん。吉隆窘窮、其色に見
 はる。太閤瞥見、徵還して曰く、刑部、其椀の點茗甚だ妙なら
 す。我改め點して以て衆賓に供す可しと。命じて俄に椀を取り、
 一氣に嚙下し、更に清茗を點して、席上に遞致せしむ。其間咄
 嗟、衆悟らず。實に太閤の意を加へて客を盛饗するものと爲せ
 り。吉隆感激、肺肝に銘せり。他年彼が豊家の社稷に殉せしも

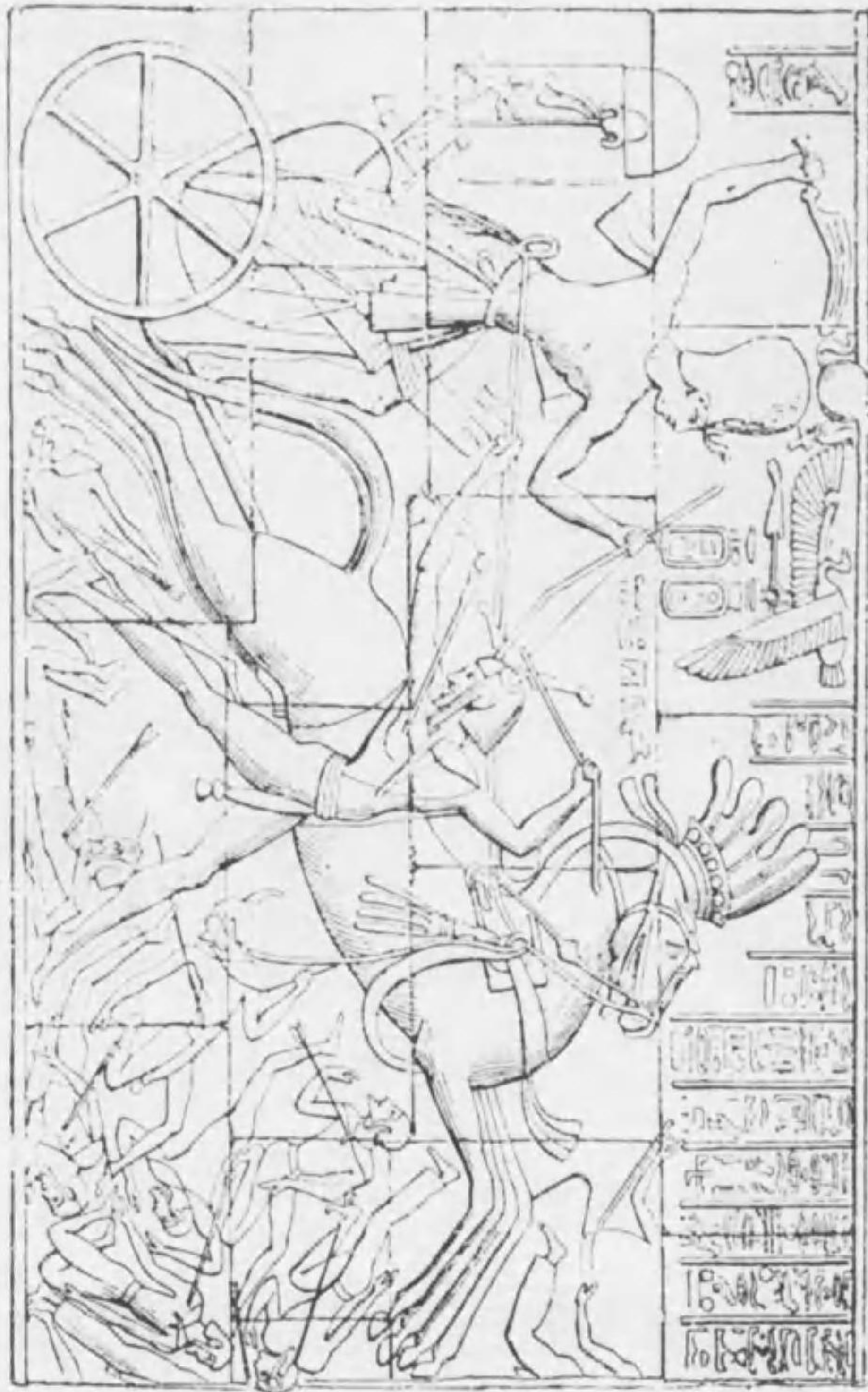
雖も、吾乃木大將の軍に在る、卒と兵食を同くし、臥する、亦其席を設けず。故に大將の臨む所、沙上偶語を絶つと聞く。「英雄務めて將士の心を攪る」自ら是れ英雄の襟度、術を弄するに非ずと雖も、術亦托して其中に在り。

第六 英雄の風丰(二)

魁梧奇偉……英雄必しも魁梧奇偉ならず……
漚蓋滅明と張良……埃及及波斯の諸大王……
亞歷山……漢の高祖と後漢の光武……虞舜と
楚の項羽……夏の禹王と越王勾踐。

李白が下邳圯上の懷古に曰く「子房未虎嘯。破産不爲家。滄

海得壯士。惟秦博浪沙。報韓雖不成。天地皆震動」と。詩人の語なりといふと雖も、禹域未曾有の大帝國たる強秦の世に在りて、威靈赫灼たる始皇の車駕に鐵椎を投じたる張良が膽肝、天地も爲に震動するの感あり。其後ち高祖を扶けて、暴秦を亡ぼし、驕楚を仆し、終に漢の天下を定む。高祖は英雄、容易に人に許假せざるの主なり。然も張良を評すれば「籌策を帷帳の中に運らし、勝を千里の外に決するは、吾、子房に如かず」といへり。故に司馬遷が史記を修めて、留侯世家を叙するや、論贊に於て、自家平昔の誤想を白狀して曰く「余以爲へらく、其人計るに魁梧奇偉ならんと。其圖を見るに至り、狀貌、婦人好女の如し。貌を以て人を取れば、予之を子羽に失ふと、孔子はいへり。留侯に於ても亦云ふ」と。



論 雄 英

然れども司馬遷の失と、兼ねて孔子の失とは、是れ當然の失なるなり。夫れ賢者には自ら賢相あり。愚者には自ら愚相あり。他の勇怯、善悪、忠姦、邪正等、概ね亦又其の相に見はる。是れ生物の天則なり。且つ此天則は生民ありてより以來、何處の社會に於ても、夙に公認せらるゝ所。今此に人の罪惡を犯す者あり。衆從ひて評して曰く、彼人は蟲も殺さぬ顔をしてゐながら、如何なれば、斯かる惡事を敢てしたる歟と。是れ蟲をも殺さぬ面相を具ふる者の、一般に暴戾ならず。蟲を殺す可き顔色せる者の、通例殘忍なるを公認せるの證ならずや。彼の端人子羽の端相ならず、英雄子房の雄相ならざりしが如きは、偶除外例に屬するのみ。

故に英雄には自ら英雄の風采あり。彼の神人の世及之を距る

遠からざる時代に於ては、勇武絶倫なるが即ち英雄なれば、其人は概ね魁梧奇偉ならざる無し。魁とは何ぞや。北斗の第一星。梧とは何ぞや。喬木なり。奇とは何ぞや。尋常ならず。偉とは何ぞや。巨大なり。合して壯大非凡を謂ふ。英雄の風采を狀し得て、甚だ妙なるを覺ゆ。之を古の埃及、波斯等の諸大王が宮殿若くは寢陵の壁畫に看よ。大王と稱せられし神人的英雄の如何に瓌偉にして、凡衆に殊絶せるかを圖出せることを。是れ此思想は近世に至るも、尙ほ減せず。吾錦畫中の英雄豪傑、又吾劇中の矢の根五郎若くは勸進帳の辨慶等、以て證す可きには非すや。

馬塞頓の亞歷山大王に關し、古史の傳ふるもの、其身體に及ばず。寔に惜む可し。然れども、其色白皙にして、臉上に微紅

を帯び、其眼は明快にして、同時に慈愛を含みたりきとは、同時の人アリストキセーヌが遺記せし所。願ふに其臉上の紅潮は王が大有爲の人となり符し、其明眼は大勢を洞察し、又其慈眼は衆生を悲視せしならん。彼歳僅に十六にして、布立統下の諸豪傑が駕御する能はざる悍馬ビュセファールを乗鎮め、馴らして以て其乗用としたりしより想へば、曾に彼の御術に妙なるのみならず、身材も亦偉大にして、衆に超越するものありたるならん。

漢高の世を距る遠しと雖も、司馬遷事へて漢家の太史令となり、其の史記を修むるや、祖龍の逝去百年を出でず。而して遷は其人を傳へて曰く「高祖人となり、隆準にして、龍顔なり。鬚髯美なり。左の股に七十二の黒子ありき」と。是れ必らず確

據あらん。范蔚宗が後漢の光武を傳するや、其人「隆準にして、日角あり」といふ。一は隆準にして、龍顔なり。他は隆準にして、日角あり。其異相望みて畏る可く、就きて敬す可きを想像せしめずや。

遷亦楚の項羽を傳し、其の人と爲りに言及して曰く「吾之を周生に聞く、舜の目蓋し重瞳子なりきと。又聞く、項羽も亦重瞳子と。羽豈其苗裔邪。何ぞ興るの暴なるや」と。重瞳子は、即ち兩眸子の謂なり。我嘗て此種眼瞳の有無を疑ひ、之を井上眼博士に問ふ。博士曰く、是れ蓋し瞳孔遺殘膜に由りて生ずる所。故に其人は生れながらにして重瞳子たらん。吾國に於ては、一條天皇の朝に、大江時棟あり。亦重瞳子。匡衡奇として之を養ひて、嗣と爲す。而して其人穎悟、亦衆に超えたりと云。

明の何孟春論じて曰く「虞舜重瞳子。項羽も亦重瞳子。而も重瞳子必しも皆仁ならず。越王勾踐長頸鳥喙。大禹も亦長頸鳥喙。而も長頸鳥喙。必しも皆不仁ならず。彼や皮相者、其れ與に士を論ずるに足らんや」と。肩を聳して識者ぶりたれど、大禹の英雄なりしが如く、勾踐も亦戦國の一雄たるを失はず。二人の相肖たる、亦偶々異相の人の自ら凡に非ざるの反證たらんのみ。儒生寧ろ與に士を論ずるに足らず。

第七 英雄の風采(三)

蜀の劉備……燕領虎頭……英雄の眼……
亞歷山大王・豐太閤・拿破崙一世・西郷南洲の眼……

後漢の劉備大志あり。言語少なく、喜怒形れず。身長七尺五寸、手を垂るれば膝より下り、顧みて自ら其耳を見ると云。其の大耳、猿臂、長身の人たりしや想ふ可し。我少時疑ひて謂へらく、普通に人左右の手を伸ぶれば、其尺方に身長と相如けり。何の時、何の處に、手を垂れて膝より下る者あらんやと。乃ち學友六七を會し、各手を展開して之を量る。中に一人雙手の内度、身長に過ぐる寸餘なる者あり。我是に於て知ることを得たり、劉備の猿臂必らず妄傳に非ざる可きことを。備の未だ志を得ずして、江南を徇ふるや、吳の周瑜其主孫權に上疏して、備や「梟雄の姿」ありといひ、以て權を警めり。既に「梟

國十郎及糸屋姫の眼……今世に英雄の狀貌を絶つ……ルーズヴェルトは如何。

雄の姿」ありといふ、其風丰を指稱するや、想ふ可し。故に英雄には自ら英雄の風丰あり。彼の「燕領虎頭飛びて肉を食ふ」といふが如き、亦亂世の英雄を状し得て、太だ眞に逼るを覺ゆ。但だ上世英雄の風丰は、口説之を傳ふるのみ。記載之を傳ふるのみ。冥想して其神を勞弊するに過ぎず。請ふ更に之を近世の英雄に徴せん乎。百年以降、佛國には曠世の英雄拿破崙一世の出づるあり。其人軀幹然く長大ならざりしと雖も、一たび其照相を見よ。誰か大帝眞の英雄たるを細想せざる者あらんや。又五十年以降には、普國に時を同くして、維廉一世及稗斯麥の出づるあり。身材の魁梧にして、相貌の雄偉なる、當時の歐洲に俱に之に匹する者あらず。宜なり二人相助けて、覇を一世に立て、威を列強に振ひしことや。而して吾大日本

帝國には西郷隆盛を出したり。彼の未だ大に世に顯れざるに當り、豊後の小河一敏始めて之と會見し、其日記に録して言へるあり。曰く「初めて三右衛門に面會するに、勇威逞しく、膽略世に勝れたるさま、斯る人の今の世に在るべしとは思はざりき」と。今我多言を費さるも、是等數子の照相に對する者は、英雄の Heroes に發し、Heroes の神人に接するを、直ちに首肯し來るものあらん。但だ取除けは、何の時にもあり。古今の英雄未だ悉く魁梧奇偉ならざるは、子房の狀貌婦人の如く、モルトケの面相老嫗に肖たりしにても察す可し。然れども天稟に英雄の眞質を具ふる者は、何れにか人に超絶せる處あり。就中眼は其特標なり。虞舜及項羽の重瞳子は取除けの又取除けなれば、重ねて言はじ。

亞歷山の明眼慈眼兼ね備へたりしといふもの、豈此大英雄の特標ならざること莫らんや。太閤の真相は我知らず。然も彼韓人の遺記を看よ。曰く「明、使者を遣はして、太閤の相貌を窺はしむ。矮にして、黒く、他の異なし。唯其目光、炯々として人を射り、仰ぎ見る可からざるものありし」と。太閤の英雄たる、其れ亦此に在らん。若し其れ拿破崙一世の眼、西郷隆盛の眼に至りては、爛々たること巖下の電の如く、一たび其照相に對するも、神吾前に在ますが如し。英雄の英雄たる所以なり。

龍を畫きて、其睛を點せざれば、龍其龍を成さずと云。何となれば眼は其精神なればなり。近時十代目團十郎の世に在るや、其目千兩と稱せらる。而して彼永く俳優的英雄たるを失は

す。嘗て幕府時代に於ける京洛雜俎を看る。中に當時の里諺あり。其詞に曰く「諸國諸大名は弓箭で殺す。糸屋娘は目で殺す」と。葩經の遺意、比體の妙辭、一誦し來れば、恍惚を禁せず。亦是れ戀變的英雄の一巾幗なりけん歟。惜むらくは其名を佚せり。

アルカムポ一なる者あり。巴黎の人なり。今の西園寺宰相、原尙書以下、本邦著名の士、多く佛語を彼に受けたり。十年の昔、我も亦一時從遊せしことあり。彼人夙に英雄崇拜の癖あり。嘗て嘆じて曰く、今の列國を通覽するに、聰慧なる者はあり。智巧なる者はあり。然も一人の英雄の相貌を具へたる者を觀ず。英雄暫く蹤を世界に絶ちたる歟と。當時ルーゾヴェルト未だ世に顯れず。故に此嘆ありしなり。今日再會して、ルや如何と問は



拿破崙一世



維廉一世



西郷隆盛



市川團十郎



阿利瑪

い、彼人一笑、之に幾しと答ふるならん。

第八 英雄の本領(二)

瀧達大度……唯一談……羽柴秀吉越水の會……加爾十二世ドレスデンの會。

眞の英雄なる者は、瀧達にして、大度ならざる可からず。何をか瀧達と謂ふ。聰明の質、透徹の見ありて、善く世態人情を通観し、物に拘泥せず、事に凝滞せず。取捨意に任じ、裁斷心に應ずるもの、即ち是なり。何をか大度と謂ふ。心に江海の量ありて、人を愛し、衆を容れ、多々益辨するもの、即ち是なり。

昔は司馬遷の漢高を傳するや、其の人となりを叙して「仁にして人を愛し、施を喜み、常に大度ありて、音節如なり」といへり。高祖の一々之に當らんや否やは疑問なるも、其れをして理想の英雄化せしめて、亦遺憾なしと謂ひつ可し。

彼や英雄、其天質に於て、既に濶達大度なり。故に誠意を人の心腹に敷きて、疑はず。是を以て人も亦其至誠に感じ、之に負くに忍びざるの心あり。古來眞の英雄が天下大亂の時に際し、善く群雄を駕馭し、善く衆心を匡合し、亂を撥き、正に反し、再たび天下を太平の裏に收めしものは、根本に於て、此至誠を存せしに由りてなり。

天正十三年四月、羽柴秀吉越中に佐々成政を撃ちて、遂に之を下し、五月、僅に左右三十八人を隨へて、越後の國境越水に

作落るの城下に抵り、使を遣はして主將須田修理に告げしめて曰く、上杉公に見えんが爲に、木村秀俊此に到りたり。請ふ先づ之を通せよと。秀俊は前年秀吉の使節として越後に來往せし者なり。修理即ち客館を城下に設け、赴きて之を見れば、一行の主人、修理を延きて曰く、我は實に秀吉なり。前年貴國と好を修む。今や卿の主を見んと欲し、微行して親ら來りしなり。卿其れ我を導きて春日山に抵る可しと。修理愕然、直ちに秀吉を城中に邀へ、人を馳せて狀を報じたり。是より先き景勝は新海城を攻めんと欲し、軍を發して之に向ふ。途にして秀吉大軍を率ゐて越中に入りたりと聞き、意に謂へらく、彼や前年信を通じたるも、其心測る可からず。豫め之に備へんには如かじと。兵八千六百を督して、絲魚川城に入り、以て緩急に備へたり。

修理の使乃ち到り、秀吉の來情を報じ、且つ旨を請ひて曰く、今や秀吉を誘ひて城中に在れば、殺活一に吾手に在り。主公設し彼を殺さんと欲せば、臣就きて之を圖る可しと。景勝慨然として曰く、方今海内擾亂して、人心測られざるに、身は數道を經略して、霸を畿甸に稱しながら、前盟を頼みて來り見るは、吾信義を思へばなり。而るを今盟に背きて、刃を推さば、我の信義何くにか在らん。一旦相見て、言好に歸せざれば、他日堂々の陣を整へ、雌雄を一舉に決せんのみと。乃ち軍を城中に遣し、左右數十騎と越水に赴き、賓主の禮を設けて相會し、茲に再び前盟を重ねたり。秀吉の此至危を冒して、敢て疑懼するあること無きものは、其智夙に景勝の肺腑を透見するに由るとはいへ、彼の洪量大度なる、亦其誠意を他の心腹に敷けるの結

Poland August
 Charles August
 18 break wind

英 雄 論

果ならずばあらず。
 而して斯くの如きは他の英雄に視て、其類例一にして足らず。
 近くは瑞典の英主加爾十二世が露西亞の老猾彼得帝の反覆を懲
 さんが爲に、千七百七年、軍を移して北征するや、途にして索
 運の首府ドレスデンの下を過ぐ。當時索運の國王奧頓斯得は人
 の鼻雄として目せし所。久しく波蘭の選王を兼ね、彼得帝と同
 盟して、加爾大王に抗せし者なり。加爾連戦して其軍を連破し
 奧頓斯得の波蘭王位を擡ぎて、單に舊來の索運王位に追還した
 るは、人々の記憶に新たなる所なり。今や加爾其舊敵の城下を
 過ぐ。大王の部下戒心なき能はず。忽にして前頭に騎行せし王
 の形影を失へり。全軍驚動し、諸將色を變ず。何ぞ知らん王は
 ドレスデンを横ざるに由りて、舊敵たりし新友奧頓斯得に告別

英 雄 論

し去らんと欲し、僅に左右三四將を従へて、其王城を訪ひたる
 なり。馬を驅りて城門に抵り、王に見えんことを求む。守門の
 兵其名を請問す。大王微笑して曰く、加爾來りて別を告ぐと。
 奥の親臣フラムミング伯之を側聞して目を瞪り、走りて其王に
 聞し、此機に乗じて、加爾を強要し、由來の失權を回復せんと
 議す。其言未だ終らざるに、大王は早く宮中に入來れり。時に
 奥は微恙ありて、便服せり。大王既に宮に入ると聞き、倉皇服
 を更めて、出で迎ふ。大王怡々として、久瀾を叙べ、起居を
 問ひ、其間毫も城府を置かず。既にして主王晝餐を供す。大王
 欣然食卓を俱にし、身の戰陣に在り、隠たる敵國に在るを忘れ
 たるものゝ如し。既に了れば、城堡を觀んことを求む。主王導
 きて出で觀る。時に主王の部下に一リツォニヤ人某なる者あり。

嘗て加爾の嚴諭を受け、索遜王の下に歸し、其親信を得たり。今此機を用ゐ、前諭を釋かれんことを欲し、情を奥に告ぐ。奥私に謂へらく、加爾嘗て吾波蘭王の王冠を奪へり。我の之を憤懣するは、彼の素より知る所。而して今や來りて我の手中に在り。咫尺の間彼の覇權を頼むを得ず。吾新部下の一小願の如き、之を達するは易々たるのみ。直ちに之を領し、今や加爾との距離數十歩なるを時として、大王の一將ホルドに低語し、其意を問ふ。ホルド之に答へて曰く、吾王行營に在る時、陛下來りて請ひたまはば、或は之を得ん。今や來りて陛下の廷に在り。吾王必らず許されじ。陛下若し之を請はんと欲したまはば、強要の辭氣を發したまふこと勿れと。奥乃ち加爾に就き、婉言之を求む。大王果して頭を振ひ、拒絕の意を示し、復た其語を繼

がしめず。既にして城堡を一巡するや、大王嫣然索遜王の手を握り、得々別を告げて去れり。既にして大王軍中に還る。至軍歡悦して、萬歳を山呼す。諸將入りて奏して曰く、陛下何ぞ至危を冒したまふの甚しきや。索遜王若し陛下を抑留せば、臣等全軍を督し、一府を攻圍せんと決議し、以て待ちたりと。加爾微笑して曰く「天運我に在り。奥頼斯得其れ我を奈何せんや」と。英雄の膽天の如し。其勇は實に至誠より來れり。

第九 英雄の本領 (三)

曹操の權術……劉備の性情……孫策孫權の
意氣……看來れば唯一誠。

漢末の天下亂るゝや、豪傑所在に崛起し、各々自ら逞くせん
と欲す。中に就きて、曹操劉備孫策兄弟と最も雄。終に三國の
形勢を現出せり。張翼三主の特長を叙べ、極めて善く英雄の本
領を發揮せり、請ふ試に其一篇を譯出せん。

「人才は三國より盛なる莫し。惟だ三國の主のみ各々能く人
を用ゐたり。故に衆力相扶け、以て鼎足の勢を成すを得たり。
而も其の人を用ゐるや、亦各々同じからざる者あり。曹操は
權術を以て相取し、劉備は性情を以て相契し、孫氏兄弟は意

氣を以て相投せり。立論の其心述たる、今に於て尙ほ推見す
可きなり。

荀彧程昱が操の爲に畫策したるは、時人の概ね知らざる所
なるに、操は一々之を表明し、絶えて其智を讓みて、以て己
が有と爲さず。是れ已に人心をして悦服し、操の爲に死せし
むるに足れり。劉備、呂布の爲に襲はれて、操に奔るや、
程昱、備が雄才あるを以て、操に勸めて、備を圖る。操之を
斥けて曰く、今や英雄を收攬するの時。一人を殺して、天下
の心を失ふは、不可なりと。然も此れは操と怨ある者に非
ざれば、操の聽かざる、故なしとせず。威覇、先には陶謙
に従ひ、後には呂布を助く。布が操の爲に擒せらるゝや、覇
潜匿せり。操募りて之を得れば、即ち覇を以て琅邪の相と爲

英雄の本領を論ずるものなり

兗州の叛くや、操謂へらく、魏種のみは必らず我を棄てじと。種も亦走ると聞くに及び、怒りて曰く、彼、南のかた越に走り、北のかた胡に走らずば、其のまゝにして置かざるなりと。既にして種擒に就けば、操重ねて曰く、其才惜む可しと。釋して之を用ゐたり。是等は先臣後叛の人なり。既に已に生擒すれば、誰か復た其命を貸すことを肯せんや。而も一々嫌を棄て、録用せり。蓋し操當初起る時、方に衆力に藉りて以て事を成さんと欲したり。故に是を用ゐて天下に馳驅したり。楊阜が謂ふ所の曹公能く度外の人を用ゐるもの、是なり。其の群雄を削平し、勢位已に定まるに及びては、則ち孔融許攸婁圭等、皆嫌忌を以て之を殺せり。殊に荀彧は素より操の謀主たり。亦其の九錫を阻したるを愠みて、之を脅死せ

し、青徐二州を擧げて、悉く之に委せり。是より先き、操兗州に在り。徐翕毛暉を以て將と爲す。既にして兗州亂れ、翕暉皆叛く。既にして操其亂を定むれば、翕暉奔りて臧覇に投す。操乃ち覇をして二人を出さしむ。覇之を辭して曰く、覇が能く自立する所以の者は、此れを爲さざるを以てなりと。操其賢を嘆じ、並に翕暉を以て郡守と爲せり。又操は畢諶を以て兗州の別駕と爲す。張邈の叛するや、諶が母妻を切し去れり。操、諶に諭して放遣す。諶頓首して、二なきを盟へり。既にして出亡し、呂布に歸せり。布の破るゝや、操、諶を生得せり。衆爲に之を懼る。操曰く、人能く親に孝なれば、豈君に忠ならざらんや。是れ吾が求むる所なりと。再び用ゐて魯の相と爲せり。又操初め魏種を擧げて孝廉と爲せり。

り。甚しきは楊攸の如き、素操が賞拔せし所の者。而も陳思王に厚しといふを以て之を殺したり。又崔琰は素操が倚信したる所。亦疑似の言に由りて之を殺せり。茲に知る可し、其雄猜の性、久して自ら露れ、従前の度外に人を用ゐたるは、特に矯偽して以て一時の用を濟ふに出でたることを。是れ權術を以て相取するものには非ずや」と。

曹操の終に姦雄たるを免かれざるものは、畢竟此權術に在り。然れども彼をして史上不死の人たるを得しむるものは、其前半に度量を恢弘せしを以てに非ずや。次に大耳兒は則ち如何。

「劉備に至りては、一たび事を起すや、即ち人心の嚮ふ所となれり。其の少時結交の豪傑、已に多く之に附けり。中山の大商張世平、蘇雙等、早く資するに財を以てして、徒衆を糾合

するの用と爲せり。其の平原の相を領するや、劉平、刺客を遣はして之を刺さしむれば、刺客反て情を以て備に告げたり。陶謙を救へば、謙即ち表して豫州の刺史と爲す。謙病篤きに及び、命じて徐州を以て備に與ふ。備敢て當らず。陳登、孔融俱に敦く勸むるに及びて之を受く。後ち呂布の爲に襲はれ、奔りて操に投ずれば、操亦表して左將軍と爲し、之に禮すること甚だ重し。嗣ぎて徐州の敗を以て、袁譚に奔れば、譚歩騎を將ゐて之を迎ふ。袁紹亦備の至るを聞き、鄴を出づること二百里、來り迎へたり。紹敗るゝに及び、備は劉表に奔る。表又郊迎し、待つに上賓の禮を以てせり。荆州の豪傑多く之に歸せり。曹兵來り討つ。備、江陵に奔れば、荆州の人士之に隨ふ者十餘萬。是時身に尺寸の柄なし。

而も至る所、人をして傾倒せしむること此くの如し。程昱謂ふ、備甚だ人心を得たりと。諸葛亮も亦孫權に對して謂へり、劉豫州、衆士の爲に慕仰せらるゝこと、水の海に歸するが若しと。此れ當時の事實なり。乃ち其の人心を得たる所以の故に至りては、史策の上に槩見せず。第だ其の諸葛を三顧し、咨ふに大計を以てするを觀るに、傳巖爰立の風あり。關張趙雲少より結契し、終身奉じて以て周旋せり。即ち羈旅、即ち奔逃、即ち人の離下に寄るに當り、寸士の業を立つ可き無きに、彼數人者は患難相隨ひ、毫も貳志あらず。此れ固より數人者の忠義なるも、而も備も亦必らず深く其隱微に結びて解く可からざる者ありたるならん。其の吳を征するや、黃權先づ身を以て寇を嘗みんことを請ふ。備許さず。江北に

駐して以て魏師を防がしむ。猱亭の敗退道路の隔絶するに及び、權、路の歸る可き無し。乃ち魏に降れり。有司權の妻子を收めんと請ふ。備曰く、我、權に負けり。權、我に負かずと。權既に魏に在り。魏人傳へ言ふ、蜀、權の孥を收めたりと。而も權も亦之を信せず。君臣の相與にすること此くの如し。孤を亮に托するに至れば、則ち曰く、嗣子輔く可くば之を輔けよ。輔く可からずば、君自ら之を取れと。千載の下猶ほ其肝膈本懐を見る。豈眞性情の流露に非ずや。設ひ操をして亮を得せしむとも、肯て此くの如く心を委ねて相任せんや。而して亮も亦豈操の用を爲すを肯せんや。惜むらく是時人才已に魏吳二國の爲に收盡せらる。故に人を得ること較すれば少なかりき。然れども亮は第一流の人、二國俱に得る能

はすして、備獨り能く之を得たり。亦以て至誠人を待つ効を見るに足らん」と。

嗟乎魏吳俱に得る能はずして、蜀獨り能く之を得たり。而して備亮の際會や流芳千古。設ひ天下を一統せざるも、其人永く神位に攝入せり。甚しい哉至誠の人に缺く可からざるや。但だ其れ時機、亦關鍵の存する處。張翼論じ得て、肯綮に中る。備亮の際會を以てして、王業の偏安に終りしものは、究竟是れ時なるのみ。時や、時や、失ふ可からず。次に孫家の二英兒は如何。「孫氏兄弟の人を用ゐるも、亦自ら及ぶ可からざる者あり。孫策の太史慈を生擒するや、即ち其縛を解きて曰く、子義は青州の名士なり。但だ托するところ人に非ざるのみ。孤は是れ卿の知己、意の如くならざるを憂ふる勿れと。其の張昭

を用ゐて長史と爲すや、北方士大夫の書來るもの、概ね美を昭に歸す。策之を聞きて曰く、管仲齊に相たれば、一にも仲父、二にも仲父といふ。而して桓公覇者の宗となれり。今や子布賢なり。我能く之を用ゐれば、其功名は我に在らずやと。此れ策の士を得しなり。

周瑜、魯肅を孫權に薦む。權即ち肅を用ゐて、瑜に繼げり。權、甘寧の粗暴を怒る。呂蒙、關將の得難きを謂へば、權即ち寧を厚待せり。劉備の吳を伐つや、或ひと諸葛瑾蜀に通ずと謂ふ。權之を斥けて曰く、孤と子瑜とは死生不易の操あり。子瑜の孤に負かざるは、猶ほ孤の子瑜に負かざるがごときなりと。吳蜀の媾和するや、陸遜西陵を鎮す。權印を刻して遜が所に置き、劉禪諸葛亮に書を與ふる毎に、常に過ぎて遜

に示し、安んぜざるものあれば、便ち改定せしめ、印封を以て之を行はしむ。委任此くの如し。臣下其知遇に感じて、心力を竭盡せり。權又自ら其非を固執せず。一日、張彌許晏を遼東に差遣し、公孫淵を封せんと欲す。張昭諫むれども、聽かず。彌晏至れば、果して淵の爲に殺されたり。權漸ちて、昭に謝すれども、起たず。權宮を出で、其門を過ぎ、昭を呼ぶ。昭猶ほ疾と稱して出でず。權其門を燒きて之を誘へば、昭更に戸を閉ちたり。權急に火を滅し、門前に駐まること良久して、昭を載せて宮に還り、深く自ら剗責せり。又權は呂壹を用ゐて事敗れたる時、亦咎めを引きて自責し、人をしめて諸大將に告謝せしめて曰く、孤、諸君と事に従ひ、少より長に至り、髮に二色あり。以て謂ふ表裏俱に明露するに足れ

りと。孤の諸君に望む所は、盡言直諫に在り。諸君豈從容して已むを得んや。凡百の事要の當に損益すべきものは、幸に速ばざる所を匡せと。陸遜の晩年、楊竺等の爲に讒せられ、憤鬱して死せり。權後に其子抗を見、泣きて曰く、吾前には讒言に聽き、汝が父と義篤からず。此れを以て汝に負けりと。其身人主を以てして、自ら過を悔み、誠を開きて告語する此くの如し。其れ誰か之に感泣せざらんや。操をして此れに當らしめなば、寧ろ我れ人に負くとも、人をして我れに負く莫らしめんのみの見を挾まんのみ。此れ孫氏兄弟の人を用ゐる、意氣を以て相感するものには非ずや」と。翼や策權の意氣を稱するも、亦是れ誠を以て人を待ちたるに外ならず。英雄の本領や濶達大度、看來れば、終に一誠に歸す。

第十 英雄の本領 (三)

英雄の大志……雄大崇高の理想……亞歷山の志業……秦の始皇の志業。

之を七千年間の垂跡に鑑みよ。載籍の英雄を傳するもの、未だ嘗て其人の大志を稱せざるはあらず。唯其大志にも亦自ら高卑の別あり。多く身に権力を萃め、多く人の邦國を併せ、願自ら壯ならんと欲するが如き、是れ所謂梟雄、姦雄、輩の欲望のみ。未だ以て言ふに足らず。我崇尚する所の眞の英雄には、雄大の理想ありて、夢寐にも之を實現せんことを欲す。既に是れ雄大の理想なり。従ひて其理想たる、一面より之を視れば、則ち崇高の理想ならずばあらず。是れこれを英雄の大志とは謂ふなり。

亞歷山大王の馬塞頓より起りて、四方を拓伐戡定したる、今日卒然之を視れば、拓伐の爲に拓伐し、戡定の爲に戡定したるが如くなるも、仔細に大王の事業を察すれば、當時に至るまで各邦に分立し、互に反目讎視せし幾多の生民を統一し、陸には陸路を開き、海には海路を通じ、車馬の便、航海の業を進めたる、擧げて言ふ可からざるものあり。且つ彼諸邦各種の生民の大統一に由りて、一方には希臘の理想及風習を東方に傳播し、他方には亞細亞の教義及技藝を西方に導入し、東西の風氣を一新し、世界の文明を増進せしめたる、其功績如何ぞや。是れ皆大王が雄大の理想即ち言換ふれば崇高の理想の實現垂跡にあらざる無し。願みるに王の在世中、創始建立したる都府七十に及び、今に於て尙ほ現存するものには、埃及のアレキサンドリヤ及阿弗

業斯丹のアリオリウム 謂へ今所の如き、即ち是なり。古來の史家が大王の事業を評して「傾廢よりも多く扶持に在り、破壊よりも多く建設に在りき」といふものゝ、偶然ならざるを知るに足らん。

看て葱嶺以東に雄大崇高の理想を實現せし英雄に至れば、先づ指を秦の始皇に屈せざるを得ざるなり。彼嬴政や、其年僅に十四歳にして、七國の一たる秦の國王となり、天下を力征すること二十六年。而る後ち六王國を滅して、茲に禹域を統一し、古來未曾有なる秦の大帝國を創建せり。秦音 Chin 其名の始めて西方に轟き、永く禹域の特稱となりたるものは、實に此帝國の興隆に由りてなり。今日西方の列強間に此國を稱して或は *China* 或は *China* 即ち支那と呼ぶものは、畢竟秦の *China* を訛り

たるのみ。顧ふに此大版圖たる、唐虞以降、夏殷周の三代を合せ、秦より以前に二千有餘年間立君制に入來りしとはいへ、其の帝たり王たりし者は、聯邦の共主たりしに過ぎざりしのみ。事實に聯邦を廢絶し、始めて意義ある統一の大事業を成就し得たる者は、即ち此始皇帝に在り。是れだけにても既に偉とす可し。而も始皇の偉にして大なるは、更に其の以後に在り。彼の僅に統一を了るや、如何の施設を加へたる。司馬遷は明々に叙して曰く「天下を分ちて、以て三十六郡と爲し、其郡には守府監を置く。更めて民を名けて黔首と曰ひ、大酺せり。天下の兵を收めて、之を咸陽に聚め、銷して以て鍾鐻金人十二を爲れり。重各千石なり。」廷を宮中に置き、法度衡石丈尺を一にし、車は軌を同くし、書は文字を同くせり。」其地、東は海に至り、朝鮮

に暨ぶ。西は臨洮光中に至る。南は北嚮戸に至る。北は河に據りて塞を爲り、陰山に竝びて、遼東に至る。天下の豪富を咸陽に徙すもの十二萬戸」と。是れ始皇の理想實現の大略なり。今其蹟に就きて之を言はん乎。天下を分ちて三十六郡と爲したるは、始めて郡縣の制を布き、統一の業を建てたるなり。蓋し惟ふに、何の時に在りても、財賦の權と兵馬の權とを統一するに非ざれば、謂ふ所の大國家を成さず。始皇の所見は蓋し此に在り。故に彼は群議を排して、之を斷行したるなり。其達見萬古に振ふと謂ひつ可し。其の天下の兵を收めて、之を咸陽に聚め、銷して鍾鐻金人十二を作りしに至りては、實に此五世界に於ける解兵實行の鼻祖たるなり。是に至りて知ることを得べし、彼が前の二十六年間、戰鬪攻伐日も亦足らず、多く生靈

を殺し、多く紅血を流さしめたるものは、一日眞の太平を開き斯民をして阜々熙々として永く天樂を享けしめんと欲せしが爲なりしことを。鍾鐻の形や今知り難きも、鍾は鐘に通じ、鐻も元樂器の名なれば、其れ洪鐘の類なりし歟。金人は即鑄像なり。各重千石なりといへば、鍾鐻金人合して二萬四千石。之を三輔舊事に徴すれば、各重二十四萬斤なりと、即ち總計五百七十六萬斤に上れり。惟ふに當時の兵器たる、主として刀劍戈戟に過ぎざる可く、各重平均二斤を出でじ。即ち六國遺傳の兵器二百八九十萬把を沒收し、之を銷盡したりしや知りぬ可し。始皇の英斷亦欽仰す可からずや。因みに云ふ、是れ此金人を、後漢書三輔舊事魏志關中記英雄記等に皆銅人といひ、魏志には董卓之を鑄て銅錢を造りし事實をすら傳へたり。即ち秦漢の間に及ぶ

まで、支那の兵仗が銅器なりしを徴するに足らん。次に廷を宮中に置くは、中央政府を設くるの謂なり。其の法度、衡石、丈尺を一にすとは、凡百の法律及度量度制の畫一なり。車は軌を同くしたるは、一定道路の開發に非ずや。書は文字を同くせしは、思想相通の指導に非ずや。其の生民の幸福と文明の進歩とに貢獻ある、擧げて而して言ふ可からず。次は大秦帝國の版圖なり。東は海に至るといふは、渤海、東海に臨むの謂。而して朝鮮に暨ぶ。朝鮮の一分まで、亦其境に收めしなり。西は臨洮、光中に至るといふは、所謂西戎まで兼併したるなり。南は北嚮戸に至るといふに及び、我の愉情禁す可からず。北嚮戸、抑、何れの地方ぞ。吳都の賦之を詠じて曰く「北戸を開きて以て日に向ふ」と。劉達解し得て甚だ善し「日南の北戸は、猶ほ日北の南戸の

ごとき也」と。是れ北回歸線の圈内に列する熱帯地方に及ぶの謂。即ち古の百越始皇當時の南海象郡桂林にして、今の廣東廣西に亘れり。是に至りて端なく想ひ起したり。我壯歲呂宋に客たり。一日晏起し、窓を推して東南を望めども、極目茫々、赤日を睹す。乃ち首を回らして北天を仰げば、太陽高く其上に懸れり。心に驚きて輿地圖を按ずれば、此地黃道を南に越えること八度なりき。當時の吾感懐に曰く、昨日まで南に見つる天つ日を北の御空に今日仰ぐ哉。日の横の關路を越えて天つ日の南の人となりける哉。神の置く熱さ寒さの關越えて南の人となりける哉。即ち我は身親ら「北戸を開きて日に向ふ」の實驗を経來れり。日南の號を負へるも、此に在り。而して二千一百餘年前の始皇

は既に熱帯の一分までを版籍せり。其事の徒らに浮誇ならざるは、其地方一帯を指して北嚮戸と謂へるにても、知られつ可し。次に北は河に據りて塞を爲り、陰山に並びて、遼東に至るといふ。北とは朔方一帯の謂、其の河に據りて塞を爲ると謂ふものは、黄河の一たび西境の臨洮に接近し來れる地點に據りて塞を起し、なり。而る後、陰山に並び、綿々迢々、遼東に至るまで、所謂萬里の長城を築き、以て北狄の南下を杜絶せり。今其區域を按ずれば、西は嘉峪關より起り、東は山海關まで及び、延長五千餘里に亘れり。而して其間幾多の山川を横斷し、高きは五十丈の山頂に上り、卑きは百尺の深壑に下れり。城壁至堅の磚石を用ゐる高二丈五尺、厚一丈五尺、城上には凹凸の胸壁を設け、壁中には彎形の穹道を通じ、毎長六十間には堡塞を築き、最も

險要の處に遇へば、其塞壁を二三疊にし、豫め之が必扼に備へたり。用意の周到、以て加ふる莫し。凡そ此寰宇の内、斯くの如き壯大の事業、誰か之に匹する者ぞ。始皇の後、三百有餘年にして、羅馬の諸豪相次ぎて今の英國地方を遠征し、北部の力取し易からざるに遇ひ、謂ふ所の羅馬城を築きて、南北を横斷し、以て北人の南下に備へたる、其舉や頗る相似たるも、今日其跡を察すれば、ソルウェイ灣のタインより、ウエルサンドに至る、連亘百里の長城に過ぎず。之を始皇の壯圖に比すれば、僅に千萬分の一たるのみ。最後に天下の豪富を咸陽に徙すもの十二萬戸といふ。咸陽由來強秦世々の都せし所。其戸數最初より關中に冠たるものありたるならん。而して新に天下の富豪十二萬戸を此地に徙す。人口百萬以上の富實盛榮なる首府は此

に世界に現せしなり。況や宮室殿閣の壯大、後の小杜が阿房宮賦を誦する者の駭心動魂する所なるに於てをや。

以上看來れば、帝國の統一、郡縣の創制、解兵の斷行、法治の新政、道路の四通、境域の擴大、長城の築造、皇京の建設等、皆是れ始皇方寸の理想より出でたり。英雄の襟懷其れ欽せざるを得んや。唯彼餘りに事功に急なり。是を以て萬難を排するの膽勇は、往々公議を斥するの執拗となり、終に書を焚き、儒を坑にするの一罪惡を留めて、後世永く暴主の代表視せられ、其帝國の二世にして滅びしを以て、之が應報の如くに言做さる。然れども是れ畢竟固陋偏見なる此國儒生の愚論のみ。始皇の崩後、新造帝國の一朝にして分割せしは、一には二世其人を得ざりしと、二には保守的氣習の反動なり。斯くの如きは我より古

を爲したる英雄の新制に、往々にして免かれざる所の數なり。看よ吾大日本帝國に於て、天智帝封建の積勢を打破し、新に郡縣の制を肇めたまへば、山陵の土未だ乾かざるに、早く南山の事變あり。海内の人心、弘文帝に向はずして、天武帝に歸したるも、大端は實に此に在り。但だ幸にして天武の明達、兄弟の偉業を繼承したまひしに由りて、新制の還元を免れしのみ。後醍醐帝の中興朝露の如くなりしも、亦積勢の致す所。必しも帝の稅政には因せず。之に反し、明治の維新に封建廢れ、海内再び郡縣に復したるは、聖上雨露の德澤なるも、一には人文既に開け、氣運丕變の結果なり。人を論じなば、其時を視よ。始皇の新制多く反感を買ひたるは、只其時に先だちたるが爲のみ。若し其帝業の忽焉たりしを以て、始皇英雄に非すと謂はば、亞

歴山大王の王業も亦一代にして泯滅せり。大王亦眞の英雄に非ずと謂ふ歟。

始皇自ら朕と稱して、後世の君王皆朕と稱し、始皇自ら皇帝と號して、後世の君王亦皆皇帝と號す。儒生極口法治を責讓するも、帝國萬世法治を釋かず。時ありて後王封建を試むるも、終りには必らず郡縣に歸せり。詩人酸鼻して邊功を諷刺するも、萬里の長城胡漢を兩分し、始皇の身後二千餘年、支那帝國の存立を保障したる、半は長城の賜には非ずや。若し夫れ始皇解兵の初心が果して全然吾人と同一なりしや否やは、今に於て疑なきに非ざるも、儒者にも非ず、佛徒にも非ず、將た黃老の流にも非ず、身を甲兵の裏より起し、手に天下の大權を有しながら獨創の見を專にして、一たび之を二千有餘年の上に斷行したる

我再び之を壯とし偉とせざるを得んや。祖龍の寒灰は川泉の壤と化し、咸陽の宮殿は楚人の一炬に燼きたりと雖も、十七世紀の初葉には、佛王顯理四世出で、十九世紀の中葉には、佛帝拿破崙三世あり。又其末葉より今世紀に亘りては、露帝尼古ラ二世を出し、萬國解兵の希望を公表せり。吾生は短く、氣運は未だし。生きて此舉の實現を目睹する能はずと雖も、坤輿の生靈兵賦に困み、叫喊の聲は四海に充ち滿ち、歳々解兵を促して已ます。氣運の熟して、人道の即位する、其れ今世紀の末期に在らん乎。未來一日此期に到着せば、祖龍の神靈碧落に見はれ、朕の志始めて酬ゆと言はまくいみ。

第十一 英雄の本領(四)

拿破崙一世の志業……世界統一の目的。

拿破崙一世が年齒始めて十五歳にして、其生郷コルスより巴黎の陸軍學校に送らるゝや、路次より其母に書を寄せて曰く「長劍を横だへ、ホルメルを懐にし、是より世界の征途に上る」と。彼の少小より大志を抱きたる、是に由りて見ることを得べし。唯其大志や、一身の功名に止まりし歟。將た其志望は年と與に優進し、雄大崇高の理想と化したる歟。千七百九十八年、彼が一軍を抽きて、埃及に飛渡り、其首府カイローを占領して、

此に占據するに當りてや、前には土國の大軍の精銳を盡して來り薄るあり。後には英將ネルソンの海軍を列ねて連絡を遮斷すあり。是れ所謂前門に虎を防げば、後門に狼を進むるの秋なり。而も彼は毫も驚動せず。此際早く博識を聚めて、カイロー府にエンスチチエーを創設せり。爾後埃及の古史學及考古學世に闡明せられ、ナイル河畔の古文明燦然として光輝を地底より發せしものは、實に此エンスチチエーの賜なり。即ち拿破崙一世の賜なり。千七百九十九年、本國方に危急なりと聞き、土國遠征の軍を去り、身を挺して巴黎に歸りしより、千八百十四年、最初の退位に至る、十六年間は、彼の大飛躍を極めし時。忽にして十年執政官となり、忽にして終身執政官となり、又忽にして無前

の大皇帝となり、南征北伐日も亦足らず。他人をして之に代らしめなば、何の遑ありてか、其内政治術の事に及ばんや。而も彼は此間に在りて、大に税法を齊へ、財政を裕にし、教育を布き、大學を興し、度量衡貨に創見を加へ、道路を四通し、運河を開鑿し、大革命の變亂以來衰退したる商工業を復興しては、其盛榮昔時に倍蓰し、又凡百の法律を整頓しては、所謂拿破崙法典の編成となり、百年後の今日に至るまで、歐亞の諸邦多く其恵に浴するを見る。且つ大帝の大を好むや、大土功は前後に絶えず。其中往々帝の崩後數十年にまで亘りしものあり。斯くの如くして彼人自身は王の王にして、帝の帝と稱せられ、又其の壯麗にせし所の巴黎は、萬國朝宗の京となれり。今夫れ斯かる英雄を古史上に溯求すれば、單だ馬塞頓の亞歷山大王と秦の

始皇帝とこれあるのみ。然れども歴山大王と始皇とは、家世承傳の王業に藉り、之に加ふるに、世界の風氣尙ほ初發の際に在り。大業を成就する、未だ甚だ難しとせず。之に反して、一世大帝の代に及びては、内外の關係なり、列強の狀勢なり、其複雑紛糾、上世の世界に百倍し來れるものあり。而して一世身を匹夫より起し、其の能く成さんと欲する所を成就したるや、彼の如し。蓋し彼は一身にして、歴山の太略と始皇の雄才とを兼ねたる者歟。

今世の史家シーレー、一世大帝の本紀を修め、帝の志業を評して曰く、彼の畢生腐心したる所は、一日英國に討克ちて、佛國及彼自身の憤怨を霽らすに在り。彼の埃及を取りたるも之が爲め。彼の印度を征せんと欲せしも、亦又之が爲めなる

のみ。之を統ぶるに、初には佛國を擧げて英に敵せしめ、後には列強までを驅りて英に當らしめ、倒行逆施、終に自家の帝業を覆敗し、併せて戦前に佛國の拓取せし新版圖まで失墜せしめたりと。然り、彼が埃及を取り、印度に志し、佛國を疲らし、列強を惱ましたる、概ね海王の國を粉塵せんと欲するが爲めなりしなり。然も帝の志業單だ此に止まると謂ふは、是れ淺乎として帝を見る者のみ。帝の末路、聖ヘレナの月に嘯くや、人あり帝に問うて曰く、陛下の半生中、最も幸福を感じたまひしは、闔國の推戴に由りて、帝冠を身にせられたる時に在る歟。埃露の列強を屈下して、大地封鎖を令せられたる時に在る歟。抑、萬國を巴黎に朝せしめ、埃國公主と大婚の盛典を舉行せられたる時に在る歟と。帝頭を振ひて曰く、此に在らず。我年

二十五歳にして伊太利征討軍の司令官となり、亞爾布の山南に軍す。戦へば克ち、攻むれば取り、未だ數月を出でずして、半島悉く吾經略に歸せり。是時に當りて、世界は擧げて脚下に在るを覚え、身は一室に坐するも、飛舞勇躍して、室中に翔翺するを感じたり。即ち吾畢生の幸福は是れ此刹那、世界征服の大功業、吾雙眸に閃き映じたる際に在りたるならんと。嗟乎此世界征服の大功業、無理想なること古のアチラが如く、單だ馬蹄蹂躪の卑々たる功名心なりけん歟。我嘗て之を佛國の古老に聞けり。拿破崙少壯の時、居常世界の狀勢を看て、到る處の邦國皆度量衡貨の制を異にし、一國を去りて、他邦に入れば、一線を距て、貨幣其用を失ひ、乃ち量衡、乃ち尺度、亦又其稱呼と標準を殊にし、彼是互に相通するを得ず。拿破崙之を憾

みて曰く、是れ生民の交通接觸親和抱合を碍するものなり。他日我幸に志を得なば、世界を一統し、是等の制を一にせんのみと。故に彼の帝位に登るや、主としてメートルシステムを制せしめ、而して之が根基を此坤圓地球の周尺に取り、此に據りて最小はミリ、最大はキロまで定めしめたりと云。又他の量衡貨に亘り、併せて一切を十進法にしたたりしも、亦其計算を簡便ならしめんと欲せしが爲めなり。即ち彼が腦裏の根底に雄大崇高の理想を蓄えたるや、想ふ可し。これありて大帝眞の英雄たるを觀るに足らん。

彼の理想や其れ斯くの如く、人類幸福の増進に在り。彼が世界の征服に志したる、即ち是を以ての故なり。而して其志業を阻碍する者は、主として海王の英國に在り。之にして挫かさ

れば、彼の志業は伸ぶ可からず。英國豈敵とせざるを得んや。シーレー僅に其近者を暗て、終に其遠者を看す。是を以て大帝を罪す。斷じて篤論に非ざるなり。請ふ大帝の常言に徴せよ。一國約に背き、一強命に抗する毎に、帝は憤然として叱咤して曰く「此老ぼれ歐羅巴、我を懊惱せしむ」と。即ち帝の志、區々として歐の一洲に在らざりしは、是に由りて昭然たらん。知らずして歐の一洲に對し、何とか之を解せんとするや。唯帝も亦事功に急なり。是を以て目的の爲には手段を擇ばず。内は言論を抑壓して、國民の怨嗟を招き、外は列強を力征して、全歐の恐怖を惹き、之を終るに、覇圖永く休焉を致せり。然りと雖も華的路の敗は、大帝が戦ひの罪には非ず。將軍グーシー路を誤り、勝機を逸失したりしのみ。是に由りて勝敗の分れたる、

英雄は俗人向う支配者

是れ固より帝の不運、而してウエルリントンの僥倖なり。英雄の能力と毫も相關するものには非ず。

第十二 英雄の本領(五)

豊太閤の志業……東洋統一の目的

日本の英雄にして、夙に雄大の理想を懐抱し、之を當世に實行せんと試みたる者を求むれば、前には豊臣太閤あり。後には西郷南洲あり。就中太閤の志業を尤も偉大甚著と爲す。史に稱す、天正五年十月、織田信長、羽柴秀吉を以て征西總

督と爲し、播磨を取りて自ら封せしむ。十月、秀吉入りて辭す。信長授くるに徴職を以てして曰く、功成らば、則ち中國を擧げて汝に與へん。汝遂に進みて九州を取れ。援軍の如きは、當に請ふ所に依りて遣はすべしと。秀吉拜謝して曰く、公、臣が側陋を捨てず、勳舊の諸將を舍き、臣に委するに大任を以てせらる。臣敢て努力せざらんや。今や臣に徴職の賜を辱くす。是れ公、臣をして專制事に従ふを得せしめたまふなり。中國を征定せんことは、臣が方寸の裏に在り。願ふに公の近臣森矢部福富等、久しく功を積み、勞を累ねながら、未だ重賞を得ず。中國一たび定まらば、請ふ其地を分ちて、此輩を封せられよ。臣は則ち勢に乗じて、益進み、一擧して九州を平定せんのみ。九州既に平らがば、願はくば一歳の收入を賜へ。糧仗を蓄へ、船艦

を修め、海を渡りて、朝鮮に入らん。公幸に臣が功を録せんと欲したまは、請ふ臣を八道に封じたまへ。臣乃ち八道の兵を率ゐ、直ちに擣きて明國に入らん。庶幾くば公の威靈に頼り、四百餘州を席卷し、三國を合せて一と爲さん。是れ臣が宿志なりと。信長大に笑ひて曰く、秀吉又大言する歟と。遂に便宜事に従ふを許したりと。是れ一は信長及其左右の猜忌を避けんと欲するに出でたらんも。其希圖の順序ある、彼の夙に此大志を蓄へたるを觀るに足らん。而も信長察せず、一笑以て大言と爲す。誰か圖らん是れ此一刹那、秀吉も又亦肚裏に微笑を催し、此公、英雄の志を知らずと思惟せしならん。

秀吉の關白に任じたるは、天正十三年に在り。此歳四曆千五百西教師ガスパルグロが始めて關白に謁するや、關白之に告げて

曰く、我、海内を平定せば、直ちに兵を大陸支那に用ゐ、收めて以て帝國に入れん。卿等我爲に葡國製造の大艦二隻を購ふことに盡力せよ。其代價の如きは、請ふ所に委せんのみと。是れ當時の宣教師等が遺記する所なり。越えて二年、天正十五年、彼の九州を征するや、六月、肥後八代の行營より書を北政所に寄せて曰く、頃者特船を高麗に遣はし、其來服を促せり。彼にして若し來服せずば、來年之を征討し、進みて明國に入り、我の生中明韓を併せて、永く帝國の版圖と爲さん。是れ我素願なりと。而して六月、宗義智父子に訓令し、其れをして韓國の君臣に來服を諭さしめ、彼若し命に應せずば、大兵立ちどころに到る可きを通告せしめたり。且つ秀吉は九州を平定したる後、博多の豪商にして茶博士たる島井宗室に命するに、雞林八

道の探検を以てし、小早川隆景の家士十餘名をして之に従はしめ、各行賈に扮装し、八道を周遊して、仔細に險要扼塞の所在を踏査し、而る後之を復命せしめたり。天正十八年、秀吉、關東を平定して歸京するや、會宗義智、朝鮮國使黃允吉等を導きて到り、闕下に待てるあり。秀吉延見して、厚く賜ひ、更に國書を與へて、遣還せり。其書に曰く、
「日本國關白秀吉、書を朝鮮國王閣下に奉す。雁書薰讀、卷舒再三。抑本朝、六十餘州たりと雖も、比年諸國分離亂争して、綱廢紀紊、朝政を聽かず。故に予は感激に勝へず。三四年の間に、叛臣を伐し、賊徒を討し、異域遠島に及ぶまで、悉く掌握に歸せり。密に事跡を探るに、予や素鄙隨の小臣也。然りと雖も、予が在胎の時に當りて、慈母、日輪の懷中に入

れりと夢みたり。相士曰く、日光の及ぶ所は、照臨せざる無し。壯年の日、八表、仁風を聞き、四海、威名を蒙る者、其れ何ぞ疑はんやと。此奇異あるに依りて、敵を作す者は自然に摧破し、戦へば則ち勝たざる無く、攻むれば則ち取らざる無し。既に天下大に治まり、百姓を撫育し、孤獨を憐愍す。故に民富み、財足り、土の入るもの古に萬倍せり。本朝開闢以來、朝廷の盛事、洛陽の丘觀、此日の如きは莫き也。夫れ人の世に生るゝや、長生を歴ると雖も、古來百年に滿たず。鬱々として久しく此に居らんや。國家の隔て、山海の遠きを屑とせず、一超直ちに大明國に入り、吾朝の風俗を四百餘州に易へ、帝都の政化を億萬莽年に施かんこと、方寸の中に在り。貴國先驅して明に入るは、遠慮あるに依りて、近憂なき

もの乎。遠邦小島の海中に在る者、後れて進む者は、許容を
 作す可からざる也。予、大明に入るの日、將士軍營に臨まば、
 則ち彌、隣盟を修む可き也。予の願ひ他なし。只佳名を三國に
 顯はさんのみ。方物目錄の如く領納す。珍重保蓄。原書は

天正十八年仲冬日

日本國關白秀吉

是に至りて秀吉の志業や彰明較著、亦一點の疑問を存せず。何
 者の愚史家ぞ、從來の秀吉を傳する者、動もすれば白其愛兒
 鶴松を喪ひ、憂悶遣る所なく、遂に此無前の遠征を企てたりと
 いふ。咄、鶴松の天亡したるを何の日とか爲す。即ち正に天正
 十九年八月に在り。夫れ彼英雄が始めて征韓討明の志を信長
 に披き示したるは、十有五年の前に在り。一たび九州を平定し、
 漸く遠征の素地を作り來りしより、亦早く五年を経たり。豈彼

は十餘年來、未生の鶴松が天亡を豫見し、憂悶遣散の準備を爲
 したりと謂ふ歟。蓋し徳川時代の俗史筆等、能ふだけ太閤に傷
 つけて、英雄一代の壯舉を無意義にし、以て幕府に倣せんと欲
 し、斯かる誣罔を加へしのみ。英雄是が爲に毫末も傷つかずし
 て、偶俗史輩の卑陋を表白す。天に向ひて唾する者は、古より
 皆斯くの如し。笑ふ可きなり。

太閤當時の西教師等は云へり、太閤の志は世界征服に在りと。
 然り、寔に世界征服に在りたるならん。唯其の當時、國人を籠
 めて、太閤の腦裏に明白に現映せる世界は、葱嶺以東の大陸と、
 南洋に散布せる諸島國とに在り。印度及印度以西に歐洲の在る
 ことを知らざりしに非ざるも、未だ多く其思想を衝動せず。是
 れ猶ほ亞歷山の世界が希臘を中心とし、歐洲東部亞洲西部北阿

一部と及地中海とに限られたるがごとし。功名及利益の感念、専ら其範圍内に存すればなり。斯くの如きは時代の氛圍氣の然らしむる所。風氣丕變の後世より之を指議す可きには非ず。唯彼太閤の遠征事業たる、全然自家一個の功名心を充たさんと欲するのみに出でたる歟。固より自家の功名心も之に随伴したるには相違なし。然も彼の理想には、尙ほ是より高きものあり。彼が諸侯伯を會して、遠征を議するの言に聞け。其言に曰く、比年外虜吾命を阻し、敢て來廷せず。是れ實に吾國の恥辱なり。且つ西戎の來寇は、屢載せて前史に在りて、本朝には獨り神功皇后の征韓ありしのみ。我未だ兵を赤縣に耀かせし者あるを聞かず。是れ我の居常帝國の爲に遺憾としたる所なりと。又此以前、朝鮮に書を與ふれば、則ち曰く、一超直ちに大明國

に入り、吾朝の風俗を四百餘州に易へ、帝都の政化を億萬年施かんこと、方寸の中に在りと。即ち是れ極東一帯の分野を掩ひて、之を大日本帝國の版圖に收め、帝國の名譽と利益とを永く後世に保留せんと欲せしなり。其志業たる、拿破崙一世の理想にこそ一步を譲れ。由來東海の帝國以外には、尺心寸思も馳するを得ざりし日本人中より、斯かる大志を發したる、豈眞の英雄には非ずや。而して拿破崙の所謂本國の公善の爲ならば、爲さざる所なかりしもの、正しく一世大帝と彼是其揆を一にするを見る。且つ夫れ吾人が太閤に深厚の同情を捧ぐる所以のものは、彼が恬澹寡慾なると、衷心よりして皇室に誠忠なりし美點に在り。由來英雄の爲す所を見よ。曹操、九錫の崇封を辭したりと雖も、

意は漢家の攘奪に在り。家康、太閤の讓國を受けざりしも、阿彌陀峯頭の坏土未だ乾かざるに、早くも其遺業の草竊を企てたり。斯くの如きは概ね姦雄輩の常態とする所。願ふに他人をして其時に生れ、代りて太閤の事業に當らしめなば、設ひ本國に於て不軌を圖らざるまでも、恐らく明韓に於ては、自家の帝國若くは王國の創立を企てたるならん。而も太閤に在りては則ち然らず。彼は本國に於て忠貞の誠を皇室に捧げたるのみならず、其遠征の事業に於ても、彼の企望は、一日大陸を天皇の版圖に收め、由りて以て皇猷を東方の天地に普及せんと欲するに在りしのみ。請ふ天正十五年の夏、彼が鐵釘一流の文字を以て、北政所に寄せたる手束を看よ。其文に曰く、

「ゆきつしまのくにまで馬の國まで。人じちをいだし、しゆし

ん申身申。事にこうらいのほうまで麗の方まで。にほんの大いりゑの内裏へ。じゆし隨身。申すべきよし、はやふね早船。をし
 たて、申つかわせ候。じゆし申さず候は、らいねん來年。せ
 しばい成敗。申すべきよし、申つかわせ候。からこく唐國。即
 で、てにいれ掌握。我等一ご一期。のうちに申つくべく候。さげ
 すみ決心。をいたし候へば、一だんほねをれ申候」と。
 即ち先づ朝鮮をして皇朝に歸服せしめ、次ぎて明國に及ぶ可し
 といふ。又其の次ぎには朝鮮王に與へたる國書中、「吾朝の風俗
 を四百餘州に易へ、帝都の政化を億萬年に施かん」といへり。
 帝都の政化は即ち帝猷、即ち皇化、彼が志の在る所も亦昭々た
 るには非ずや。殊に彼が素志の在りたる所を、最も證見す可
 きものは、天正二十年即ち文五月、彼が肥前名護屋の行營より

關白秀次に與へたる教書に在り。今其全文を此に擧示す可し。

一 殿下陣用意、由斷ある可からず候。來年正二月比、進發たる可き事。

一 高麗の都、去二日落去候。然る間、彌急度御渡海なされ、此度大明國迄も殘らず仰付けられ、大唐の關白職御渡し成さる可く候事。

一 人數三萬召連る可く候。兵庫より船にて相越さる可く候。馬計り陸地差越さる可き事。

一 三國中御敵對申す可き者これ無しと雖も、外聞にも候間、武器の嗜專一に候。下々迄も其通り申聞かざる可き事。

一 召具し候者共、人持内へ三萬石、馬廻内へ二萬石、下賜遣

はす可く候。人數も似合く、下賜遣はす可く候事。

一 京都御城來として積置き候八木は八木の調。手付けある可からず候。其外三十萬石を最前すゝめられ候。八木陣用意迄に召遣はされ、不足候へば、醍醐御倉米、入次第申遣はさる可く候事。

一 鉾付の刀脇差千腰、用意ある可く候。餘り大に候へば、差候者、運送迷惑せしめ候間、刀七輛脇差三輛餘にて申付く可き事。

一 鉾付の薙刀三十枝、鉾付の槍二十本、此外は無用の事。

一 長柄の槍は、柄を銀に仕る可く、毛の投鞘は無用に候。大坂に檉枝の枯らし候て置候が是れある可く候間、用ひ處候は、申寄す可く候事。

一 銀數手前にこれある分拂底候て、ことかぎ候へば、聚樂にこれある銀數一萬枚、大坂に遣はし、大坂の金數千枚、召寄す可く、但し五百枚用ひ處候へば、銀數千枚替に遣はす可く候。如何程にても、十分の一たる可き事。

一 般子錦欄唐織物類、用ひ處候へば、注文を以て申さる可く候。如何程高價買ひあげらる可く候。

一 黒毛の蔽五六挺、之を持つ可く候。餘地は無用候事。

一 御馬ともに只今拵へ半分牽かせ候。名護屋に鞍解き共に殘置かせ候。其方より幾多牽き候義、無用に候。廣島にも十匹置かせ候條、彼處より牽返さす可く候。皆々飼置可きの旨、申聞可き由、西尾教光仰遣はされ候事。

一 名護屋高麗所々、御兵糧澤山にこれあることに候間、用意に及ばず候。路次中の覺悟計り覺悟仕らす可き事。

一 小者若黨以下下々迄も申置可く候。此方へ小者共履はせ候間、俄にこれある可からず候條、前廉御用意肝要の事。

一 丹波中納言此方へ申寄す可く候。用意せしめ、一聲相待つ可く候。八月以前たる可く候。借米等のこと山口方へ仰遣はされ候。八月以前に召寄せられ、高麗か名護屋を、御留守仰付けらる可く候。

一 高麗御留守居として、三宅中務法印召寄せらる可く候。用意せしめ、相待つ可き旨、仰付けられ候事。

一 大唐の都へ叙慮うつし申す可く候。其御用意ある可く候。明後年行幸たる可く候。然れば都廻の國々十ヶ國、之を進上す可く候。其内にて諸公家衆何れも知行仰付けらる可く候。

一 銀數手前にこれある分拂底候て、ことかぎ候へば、聚樂にこれある銀數一萬枚、大坂に遣はし、大坂の金數千枚、召寄す可く、但し五百枚用ひ處候へば、銀數千枚替に遣はす可く候。如何程にても、十分の一たる可き事。

一 般子錦欄唐織物類、用ひ處候へば、注文を以て申さる可く候。如何程高價買ひあげらる可く候。

一 黒毛の蔽五六挺、之を持つ可く候。餘地は無用候事。

一 御馬ともに只今拵へ半分牽かせ候。名護屋に鞍解き共に殘置かせ候。其方より幾多牽き候義、無用に候。廣島にも十匹置かせ候條、彼處より牽返さす可く候。皆々飼置可きの旨、申聞可き由、西尾教光仰遣はされ候事。

一 名護屋高麗所々、御兵糧澤山にこれあることに候間、用意

候。下の衆其十倍倍たる可く候。其上の衆は仁體に依る可き事。

一 大唐關白、右仰せられ候如く、秀次え譲らせらる可く候。

然れば都の回り百ヶ國御渡し成さる可く候。日本關白は大

和中納言備前宰相兩人の内、覺悟次第、仰出さる可き事。

一 日本帝位の義、若宮八條殿、何れにても相究めらる可き事。

一 高麗の義は、岐阜宰相、然らざれば、備前宰相置かる可

く候。然れば丹波中納言は、九州に置かる可く候事。

一 震旦國え叡慮ならせられ候路次、例式行幸の儀式たる可

候。御泊の儀、今度御出陣道筋御座所、然る可く候。人足

傳馬は、國限りに申付く可き事。

一 高麗國大明までも、御手間要らず仰付けられ候。上下迷惑

の儀、少しもこれ無く候間、下々逃走る者ある間敷候條、

諸國へ遣はされ候奉行共召返し、陣用意申付く可き事。

一 平安城並聚樂に御留守の儀、追て仰出さる可き事。

一 民部卿法印小松播磨守政秀石川伊賀守政定以下用意せしめ、御

採用次第、參陣致す可き旨、申聞かす可き事。

右條々、西尾備後守に仰含められ候。其意を得らる可く候

也。

天正二十年五月十八日

秀吉朱印

是に於て乎英雄胸中の壯圖雄略、當に大に觀ることを得べし。

即ち彼の方按たる、日明韓を合せて一と爲し、車駕を奉じて、

燕京に徒し、其地を以て八隅知吾大君の大宮所とし、遠く皇祖

の垂範に則り、六合を兼ねて、都を開き、八紘を掩ひて、宇と

爲すに在り。而して燕京畿甸の十州を以て、之を直隸省と爲し、皇室の供御、公卿の食封、皆之に資り、更に之に接する百州を以て、秀次を封じ、大朝廷の上に坐して、大政を關白せしむるに在り。之と同時に日本の本國には、皇子若宮若くは八條宮の孰れかを奉せんと欲するなり。是れ燕京に在りまして、宇内に君臨したまふ天皇統治の下に、日本國王として一皇族を分封し、殊に本國を重んじたまふ所以の聖旨を明かにし、之が輔弼としては、太閤の甥大和中納言秀俊か若くは宇喜多宰相秀家を擧げて、國政を關白せしめ、朝鮮は即ち屬邦たれば、必しも皇族を待たじ。故に岐阜宰相秀信か、若くは宇喜多宰相秀家をを用ゐて、之を總督と爲し、斯くの如くして、以て新大帝國の新政を提擧せんと欲し、なり。且つ彼太閤の概算や太だ簡明なり。禹

域の幅員、略吾國に十倍せり。是を以て移封の公卿以下を待つに、皆其領邑の十倍倍を約し、殊勳茂功を建つらん者は、亦之に准す可きを宣す。亦是れ英雄心計の在る所を察するに足らん。是に至りて、偶憶ひ起すものあり。嘗て甫菴が太閤記を讀む中に云ふ、遠征の擧發したる後ち、前左府近衛信輔朝鮮に渡航せんことを朝に請ふ。天皇聽したまはず。請ふこと再三なるに及び、天皇宸翰を太閤に降し、之を慰止せしめらる。太閤旨を奉じ、名護屋の行營より、書を信輔に寄せ、且つ前田玄以をして其意を致さしめて曰く、公、身臺輔に在り。今左右を辭し、遠く異域に入る。是れ無益の業、用ゐること勿れと。事終に止みたりと云。甫菴も亦信輔深意の在る所を解せず、咄々怪事の一と爲せり。殊に知らず、信輔、天皇の發軔近きに在る可きを

曰く、事端既に明韓と啓く。移牒傳檄、多く漢文の必要あらん。蓋ぞ漢文を善くする者を選びて之を従へたまはざると。太閤一笑、斥けて曰く、我の此行、彼をして吾伊呂波四十七字を用ゐしめんのみ。將た何ぞ漢文を事とせんやと。吁是れ四世紀後の今日、列強が競ひて、其兼併の地方に對して、實現せんと力むる所に非ずや。曰くパン・スラヴィスム。曰くパン・セルマニスム。曰くパン・アメリカニスム。曰くパン・ラチニスム。要此意に外ならず。輓近に至りて、吾邦始めて多少の起色を呈し、僅に大陸の一部に向ひ、日本的施設を加へんとすれば、列強の視る者早く目して、或はパン・ジャパニスムといひ、或はジャポニホーゼと稱するもの、亦又是をこれ謂ふのみ。誰か思はん、今より三百有餘年の上、無文の英雄獨創の見を奮ひ、夙に之を東方の大陸に

思ひ、豫め路次の由る所、駐驛の安き所を視察せんとすに
出でたる可きことを。而して太閤の之を止めたるは、事端一たび發して、其業當初豫期の如く容易ならず。故に明韓の征定を待ちて、而る後視察踏査せらるゝも、未だ遅しと爲さざるを以てなり。今之を前の太閤が北政所に與へたる手東、關白秀次に下し、教書に參稽し、其の一旦志を得なば、車駕を大陸の上に奉じ、天皇を仰ぎて世界の大神主とし奉らんとしたる跡、歴々として微證す可きに非ずや。太閤眞の英雄たる、是に於て乎益見はる。

太閤の大志と、忠誠や、其れ斯くの如し。而して彼が大陸の經綸上、懷抱する所の理想如何と顧みれば、亦又之に副するものあり。彼の將に京都を發せんとするや、人あり、彼に勸めて

實行せんと企てたることを。彼や既に此曠世の宏達あり。或ものは視て以て單に豪放の人と爲さん歟。是れ未だ此英雄を知る者ならず。我嘗て太閤遺愛の扇面を觀る。表の一面は東洋一帶の地圖を書き、日明韓の山川都邑、收めて尺寸の裏に在り。把玩の間に、一瞥して、三國の形勢を審にするを得べし。又裏の一面に平假名を用ひ、上段には明語を記し、下段には之が譯語を書す。原語に曰く「なさらい」。譯語に曰く「ちやもつてこい」の類の如し。是れ開闔の裏に、知らず識らず明語に通曉せんと欲しゝなり。又嘗て遠征の當初諸將に頒與したる大陸地圖を看る。五色を以て道別を示し、更に平假名を用ひて、其地名を傍記せり。故に當時の諸將は其各地方を指して、或は青國、或は黃國、或は赤國、或は黒國、或は白國等の稱を附せり。而して釜山の

埠頭より半島を一貫し、遼東を経て、北京に達するまで、各驛の距離を、本邦里程を以て一々注記せり。凡そ從來在る所の大陸地圖にして、里程の正確なる、近き日清戰役前、之に勝れるもの無かりしと云。即ち其の實地踏査の餘に成りたるや、知られつ可し。彼や既に彼宏達あり、豪放ありて、又此細心あり、用意あり。柔も茹はず、剛も吐かず、酒の肴に餅も結構とは、其れ斯の如きの人を謂ふ歟。唯此遠征や、戰略當を得ず。將帥人を得ず。外交亦又機宜を愆り、可惜曠世の壯圖をして結局失敗に終らしむ。是を以て後人、太閤を責むるに、其驕と無學とを以てす。然り、如何にも此舉に限り、驕と無學の譏は免かれず。一半の敗因は此に在らん。然れども抑、其業の成らざりし大源は、太閤と諸將との心理

的懸隔餘りに甚しかりし處に在り。初め太閤遠征の策を決し、之を諸將の前に公表するや、諸將愕眙として、敢て答ふる者なかりしと云。其の呆氣に執られたる狀、今尙ほ目に睹るが如し。宇喜多秀家進みて之を賛するに及び、已むを得ずして、衆皆之に和したりと雖も、氣の乘らざるは、是にて昭然たり。其後、太閤親ら將として彼岸に渡航せんと欲すれば、朴訥の淺野長政直言を憚らず、老狐、殿下に憑りたる歎といへり。其他此一役に關し、外交に、戰略に、史に諸將の獻策を傳へ、稱して名將の見智將の言と爲す所のもの、概乎として退嬰保守の愚論に非ざる莫し。中に就きて、徳川家康の如き、世の目して一代の英雄と爲す所の者。太閤親征を思ふの日、慨然として代りて海に航せんと言ひしは、良似たり。然も當時最上出羽守義光が伊良

子信濃に與へたる書を見れば、中に云ふ、
「一いへやすさまへ即ち家康様へ。からぢんのやくを加羅陣の役、即ち出征の役を命ぜられたるなり。當時家康出征の列に入らざる故に此命あり。殺光も亦然り。此言ある所以。うへさまよりおふせつけ候よし上様即ち太閤より承候間、はしにてもけづり申すべしと申候て、即ち此暇を賜ひたれば、聞暇の消遣に、つかいをだし申候へば、そのときわれらかたへ、御ことはりに、は、ふしぎに出羽も我等も、此度の命をみつけれ候。やがて、國へくだり、たかをつかい候はん事、即ち使を遣はさん事。ゆめかうつゝかかと、よろこび候よし、承候。あわれ、さやう候へかし」と。
即ち家康が出征を免かれて、夢か現つかと狂喜したる心情、賑々として掩ふ無し。是に於て乎知ることを得べし。曩に太閤の

眼前に在りて、彼家康が慷慨して代征を望みたるが如き、全く一場の狂言喜劇、當座のお坐なりを演せしのみ。彼が太閤乾坤を吞吐するの理想を體するを得ざりしも、亦由りて明らむるに足らん。之を要するに、家康以下、當時の諸將、何れも百戰の豪の者なるも、公等碌々、取上りたる老卒に過ぎず。従ひて其精神氣魄、以て太閤の雄大なる理想の十一にも副する無し。太閤志業の終に成らざりし所以なり。昔は亞歷山大王、世界の混一を志し、歐洲を服し、阿洲を定め、大軍を東して、小亞細亞を略し、懸軍長驅して、印度に入り、進みてヒープスズの河畔に及ぶ。諸將豪なりと雖も、大王の雄圖を解する無く、徒らに兵を窮め、武を贖し、一個の功名に徇ふるものと爲し、私に相約して、前往を拒む。大王已むを得ずして、師を回し、永

く史家の嘆惜を留む。太閤の壯志終に酬みざりしもの、亦全く其跡を一にせり。嗟乎、歷山の雄略永く成らず。太閤の壯志終に酬みず。而も百世の下、尙ほ其英風を抑ぎ、欽慕して已む能はざらしむる所以のものは、其雄大崇高の理想ありしに由れり。後の英雄を以て自ら居る者は、須らく此本領如何と省みるべきのみ。

太閤の薨後、三世紀を経て、吾國に西郷南洲あり。其身亦匹夫より起りて、能く一世の豪俊を驅使し、數百年來積成の封建を打破して、茲に維新の大業を翼賛し、天皇親政、未だ幾年を出でざるに、明治六年、征韓の議を廟堂に唱へたり。是れ今に於て國人の深く偉とする所。然れども彼が征韓の志を蓄へたる

や、一朝一夕の故に非ず。我嘗て之を故福羽美静翁に聴けり。維新の初、翁は南洲と俱に朝に在り。一日、南洲従容として翁に語りて曰く「此頃聞けば、人皆王政復古と言ふ。復古乎。復古乎。王政の昔、三韓は吾版圖に在りき。而して今や亡し。之を天皇の統治に納れざれば、未だ復古と稱するに足らず」と。翁爲に愕然たりしと云。願ふに維新中興の初、百度尙ほ草創に屬し、人心内に動き、國勢外に壓せられ、大政の統一をすら危疑したる時に當り、既に已に此雄圖を抱き、之を事實に施して、以て復古の大業を完成せんことを期す。是れ尙ほ秀吉が僅に偏師の將に任せられ、旗を中國に進むるの日、早く大陸の征服を思ひ、意衷を信長に告げたるがごとし。南洲の英雄たる、是に於て乎、則ちこれ在り。而して其征韓の志業が對清對露洪猷の初一步た

りしは、識者の永く認むる所。故に我は常に言ふ、吾國人にして、太閤以降、雄略大才之と相匹す可き者は、獨り西郷南洲あるのみと。後復た三十七八年にして、韓國始めて版圖に歸せり。彼や鐵中錚々の徒、幸に其時機に際會し、收めて己が勳績と爲し、願盼自ら雄とすと雖も、是れ畢竟、水到りて渠成り、春回りて木華さくの類のみ。それら果して英雄ならば、英雄は一山一石、在々乎として所在に在らん。

第十三 英雄の特能(二)

超邁の創意と卓越の先見………漢尼婆とシヒオン。

Carthage

英 雄 論

雄を要する所以のもの、實は此に在り。
 羅馬の始めて勃興するや、地中海の海上權力を封植して、以て世界を混一せんと欲し、先づ戦を加爾達塞に開く。加爾達塞積世の富力に藉し、抗爭二十四年の久しきに亘りたるも、力終に敵する能はず。一旦獅子里を割きて、和を講ずるの已むを得ざるに至れり。謂ふ所の第一回チュニク戦役は即ち是なり。加爾達塞の國勢日に非なり。漢尼婆推されて、國防軍の主將となる。彼年始めて二十六歳。創意して謂へらく、本國の形勢日に潜焉たる所以のものは、専ら守勢的防禦を事とするに由れり。是れ坐して亡を待つもの道なるのみ。寧ろ進みて敵の意表に出で、羅馬の首府を突き、攻守の勢を一變す可きのみと。諸元老疑懼して之を止むれども、斥けて聽かず。歩兵九萬騎兵一萬二千香象

264-241

27-207

英 雄 論

智愚の分るゝ所以の根本如何と願みよ。主として創意と先見との貧富に在り。古の英雄が「民は俱に成を樂む可きも、俱に始を語る可からず」といひ、又英雄の言行が屢人意の表に出づるものは、畢竟英雄には此特能多く、凡衆には此特能乏しきを以ての故なり。凡衆は賸々として未だ其思にだに上せず、又設ひ之を思ふも、其の爲す所を知らざるに當り、早く超邁の創意を起し、手を著け、業を振むる者は、英雄なり。凡衆は茫々として朝た夕べを測らず、又好し之を測ると雖も、恰も牆に面して立てるが如くなるに際し、夙に卓越の先見を以て、事を未然に察し、其の爲す可き所を爲す者も、亦英雄なり。生民の世界に英

……源九郎義経と非黎德大王。

三十七頭を率ひ、海に航して西班牙に入り、ピレネーの山脈を越えて、鄂爾圖西の佛に出づ。將士の疑懼する者亦又多し。漢尼婆乃ち從を欲せざる者を其地に留め、歩兵五萬騎兵九千及香象の屬を率ひて、東を指し、ローヌ及イゼルの洪河を渡り、亞爾布の絶險に乗る。香象皆路に死し、馬の仆るもの亦三千。伊太利の地に達するに及び、軍の能く屬する者、歩兵二萬騎六千に過ぎず。然も羅馬人は初より亞爾布の天險を待み、敵軍の其國に侵入す可きを想はず。漢尼婆の來り襲ふに及び、舉國震駭し、急に軍を出して之を迎ふ。漢尼婆先づ羅馬の名將シピオンが軍をテゼンに破り、次ぎてトレビー及カンヌに戦ひて、亦大勝を獲、羅馬人を殺すこと五萬人。羅馬の首府且つ守らざらんとするに至れり。惜い哉後繼到らず。見軍日に減す。乃ち已む

を得ずして、半島の南部に出で、地方を略して、此に占據すること八年間。羅馬の強盛を以てして、之を奈何ともする能はず。是に於て乎羅馬のシピオンも亦一策を按じ、敵軍の國內を侵略するにも關はらず、艦隊を進めて、擣きて加爾達塞に入れり。事亦加爾達塞の意外に出で、本國驚擾して、頻々漢尼婆の入援を催す。漢乃ち軍を收めて還れり。而してザマの一戦、終にシピオンの勝利に歸せり。願ふに加爾達塞の國祚をして半世紀の後まで遺存せしめ、羅馬の國運をして再び優勢に復せしめたるものは、皆是れ當初對敵の兩雄が超邁絶倫なる創意の賜なり。後ち二千餘年にして、拿破崙勃那巴督が亞爾布の天險を踰越して、伊太利に入り、一朝にして佛蘭西共和國の爲に能く攻守の勢を變じたる、我其の漢尼婆に負ふもの、尠少ならざるを

知れり。彼が兵馬倥傯の間に在りて、仔細に漢尼婆の戰畧戰術を叙述したりしもの、抑亦故ある哉。

鐵拐の險、亞爾布の險、固より同日にして論ず可からず。然も馮險の創意は則ち一なり。吾源九郎義經は曰く「鹿の越える所は、馬の越える所なり」と。後世魯魯亞の大王菲黎德も亦曰く「山羊の踰える所は、馬の踰える所なり」と。英雄の見る所、古今東西、符節を合するが如し。英雄豊崇尙せざるを得んや。

願みて我に視れば、永祿中、今川義元、既に駿遠參を定め、三年五月、自ら三州の兵四萬五千を率ゐて、尾張に入り、將に一舉して織田氏を覆し、旗を京都に建てんと欲せんとす。行々中村鳴海大高春懸の諸城を降し、又鷺津丸根の二城を陥れ、兵

威堂々、進みて桶峽に陣す。織田氏の存亡旦夕に在り。信長、將士を清洲に會して、戰を議す。林通勝進説して曰く、敵衆五萬に幾くして、吾見兵三千に過ぎず。暫く其銳を避け、本城を保守して之を防がんには如かずと。信長之を斥けて曰く、城池を待みて、敵を待つ。是れ自ら亡を招くの道なり。我聞く、先んずれば人を制し、後るれば人に制せらる。明日出で、敵に當り、勝敗を一戦に決せんのみ。我と志を同くする者は、我に従ひて敵に赴く可しと。由りて酒を命じ、酣飲宵を徹す。天漸く曙なり。信長扇を開きて、且つ舞ひ、且つ謠ひて曰く「人間僅に五十年、下天の内を較ぶれば、夢幻の如くなり」と。其意氣虹の如し。忽にして甲を被り、馬上に上り、單騎鞭を擧げて出づ。騎の能く屬する者十餘人。熱田に及ぶ比ほひ、千人を得たり。

親ら神宮に詣で、戦勝を祈り、私に宮司に囑して、甲を龜中に鳴らさしむ。出で、衆に謂て曰く、休徵彼の如し、神祐疑ひ無しと。乃ち山路を取り、行々諸城の兵を收め、兵凡そ三千を合す。東を望めば、火焰二城の上に冲す。衆其の陥落を覺り、色を失す。信長意とせず、益前進す。諸將、馬を控へて諫めて曰く、敵は衆にして、我は寡なり。且つ彼は新に勝に乗ず。強て之を冒しなば、一軍立ちどころに覆斃せんのみ。信長厲聲叱咤して曰く、汝等、我を以て暴虎馮河、死して悔の無き者と爲す歟。敵、糧餉を大高に納れて、終夜息はず。今又兩城を抜く。其兵の疲困知る可きなり。而して義元、我を侮りて、亦備を設けじ。我是間に乘じ、其不意に出づ。勝を制せんこと必せりと。梁田出羽之を賛して曰く、敵、今兩城を抜きて、未だ兵を收め

23 2.50
24 1.20
25 1.50
26 1.50
27 1.50
28 2.00
10.50

ざれば、中軍必らず後へに在らん。我直ちに之を襲はひ、義元獲べしと。信長即時旗を伏せ、山に循ひて馳せ、桶峽に到りて、下瞰すれば、果して義元の本營なり。信長馬より下りて接戦せんと欲す。森可成曰く、歩戦相當らば、衆寡敵せじ。宜く騎して馳突すべしと。信長曰く善し。親ら馬上槍を揮ひ、衆に先だちて馳せ下る。會、雷雨晦冥なり。全軍鼓譟して營を斫る。東軍驚擾、出づる所を知らず。服部小兵太進みて、義元に薄る。義元刀を抜きて、其膝を斫る。毛利秀高槍を舞はして義元を刺し、其首を擧げて出づ。東軍終に大に潰ゆ。信長追撃、敵を仆すもの二千餘人。乃ち神宮に賽して還る。信長一代の霸業、實に此血戦に基せり。而して其の勝を制せし所以のものは、唯當初の一創意なり。

天正十年の夏、羽柴秀吉、軍を督して、毛利氏の將清水宗治兄弟が守る所の備中の高松城を圍み、諸川を決して之に漑ぐや、毛利氏の援軍大に到り、水を隔て、陣を對す。會六月三日の夜半、凶報京都より達し、云ふ、昨曉、右府、明智光秀の爲に獄に遭ふと。秀吉部下の諸將皆色を失す。是時に當りて、光秀始めて志を得、旗を京都に建て、四方に號令す。信長の宗族宿將概ね遲疑して、未だ兵を動かさず。秀吉以爲へらく、光秀暴發して、一旦志を逞くするも、與黨未だ多く附かじ。敵に克ちて、驛を報じ、衆を服して、覇を成すは、唯だ此時に在り。時や、機や、失ふ可からずと。嚴に諸將を戒め、喪を秘して、發せず。翌日、前約に據り、清水宗治兄弟に屠腹せしめて、高松

城を收め、毛利氏と新に媾和の約を立て、五日拂曉、營を撤して、軍を回し、星馳して東上し、未だ周日を出でざるに、早くも攝津の尼ヶ崎に達し、同月十三日、山崎に血戦して、此に非常の大勝を博し、忽ち光秀を滅して、直ちに畿甸の大勢を制したり。茲に知る可し、千古の史上を照耀する太閤不朽の生命は、本能寺の變報飛到の瞬間、彼の頭腦に衝發せし不羣の一創意に因せしことを。

第十四 英雄の特能(三)

凡衆と英雄……非黎德大王……拿破崙大帝……凡衆は成形宗の信徒なり……兵眼一撃……獨逸の新工業。

普國の大王非黎德立の世に在るや、戦へば勝ち、攻むれば取

り、兵鋒の向ふ所、天下殆ど敵なきの概ありき。是を以て大王
 成功の後、列強争ひて其制に倣ひ、所謂變法自強に出づ。佛國
 の陸軍亦爲に動かされ、多くは之に準據せんと欲す。但だ此國
 には大將モリスドサクスあり。夙に縦隊及深厚隊次論を主
 張し、普王の横隊及淺薄隊次論と相容れず。是に於て乎佛國の
 陸軍は分れて二論派となり、兩々相執りて、相下らず。或時の
 如きは、十餘旅團の兵を二分し、兩派主張の隊形に由りて、各
 軍を作り、對抗大演習をポーシユの地に行ひ、其優劣を判せんと
 試みたるも、亦決せず。論争延きて二十年の久しきに亘れり。
 然も當局多く普國派に傾きしを以て、本國派漸く顔色なきの觀
 あるに至れり。既にして大革命の舉は發し、勃拿巴得一軍を率
 ゐて伊太利に入り、サクスの遺法に遵ひて、之に自家の創見を

加へ、到る處に塙軍を撃破するに及び、未だ半歳ならずして、
 普國論派は自然に消滅せり。
 我之を想起する毎に、覺えず獨笑を催すものあり。我年八九
 歳、吾封建の末造に會す。當時吾福岡の藩主、西式兵法を採る
 可きを思ひ、一隊を編して、其法に習はしむ。忽にして藩論沸
 騰、我に古來長技の在るあり。何ぞ夷狄の兵法を用ゐんやと。
 強ひて逼りて藩廳に請ひ、對抗演習を郊外に行へり。喇叭唳々、
 法螺號々、終日對抗して、相互に憤激し、遂には人々格闘して、
 數人の負傷を出すに及べり。居ること一二歳にして、大勢丕變
 し、藩兵奥羽の征討に参加す。凱旋して里間に入りたる日は、
 復た人の小幡流長沼流を説く者なかりき。事や大小相同じから
 ざるも、天下の事皆斯くの如きのみ。

何れの時も、滔々たる凡衆は、成形宗の信徒なり。成形の
圓相以外には、思も馳せず、手も出でず。唯其成形の前に匍匐
し、禮拜奉事するあるのみ。英雄一たび起ちて、其成形を破壊
し、更に一新成形を贈れば、亦従ひて其前に羅拜し、能事は此
に盡きたりと爲す。試に前の佛國に視よ。勃拿巴得其國の兵
制を一變して、歐の大陸を蹂躪し、其の志を得るに當りてや、
王の王にして、帝の帝なりと稱せらる。大帝不遇にして、其終
を善くせざりしと雖も、帝の兵制は久しく佛國の木主となり、
謂へらく、之を奉じて周旋すれば、以て天下に衝行するに足
と。墨守すること半世紀にして、一朝普佛戰爭となり、普軍の
爲に隨處に打壞せられ、大軍セダンの降伏となり、巴黎城下の
盟となれり。殊に知らず、拿破崙一世は居常兵制に關していへ

り「兵威を以て四方に臨み、天下に衝行せんと欲すれば、十年毎
に兵制を一變せざる可からず」と。是れ豈超邁の創意に待ち、又
卓絶の先見に待つ所のものには非ずや。
抑拿破崙一世が兵聖として天下後世に尊崇せらるゝ所以のも
のは、其天京 Coup d'oeuil militaire の特能を有せし所に在り。我に譯
して之を戰略眼といふは、未だ盡さず。正しく言へば、是兵眼
一撃なり。軍を率ゐて、一地に出づ。山嶽あり。河川あり。森
林あり。原野あり。敵軍來りて、我に對す。豫備の在る所、主
力の在る所、容易に我に知らしめず。主將一たび之を展望し、
其目睫の一瞬擊間に、善く眼界の地形を察し、又善く敵軍の形
勢を察し、咄嗟之に應じて、適當に吾歩騎砲工の配置を決定し、
以て其勝機を先制す。兵眼一撃は即ち是なり。願ふに斯くの

如きは獨り用兵の上のみに止まらず。政事には政事眼の一撃を要し、外交には外交眼の一撃を要し、其他の複雑なる大事業には亦復た事業眼の一撃を要す。畢竟是れ卓越なる先見の一作用。愈英雄にして、愈此特能を見ん。

之を要するに、超邁の創意と卓越の先見とは、英雄の特能中の特能なり。之なければ、以て英雄を談するに足らず。近くは獨逸の商工業蔚然として勃興し、日に其國の富強を加ふるを看て、私に感嘆を禁せざるものあり。抑、獨逸は古國なりと雖も、聯邦を約して、統一的帝國を再造し、起ちて世界の衡争に入込みたるは、十九世紀の後半以後に在り。是時に當りて、列強の經營如何と顧みれば、美術工藝には、佛國の夙に其名を馳するあり。機器製造には、英國の昔より其場を擅にするあり。前者

を以て争はん乎、新造の獨逸、佛國に及ばず。後者を以て競はん乎、成金の帝國、亦大英に如かず。唯佛國品は餘りに贅澤なり。英國品は餘りに上等なり。而して世界の情勢如何と察すれば、西も、東も、南も、北も、生活の困難を訴へざるは無し。是れ今世の特色なり。獨逸先づ此に見るあり。乃ち一新創意を出し、巴黎の商品をも摸すれば、倫敦の製産にも擬し、驚く可き廉價を以て、其の賈物の食はせ物を輸出すれば、四方争ひて之を需用し、未だ半世紀を出でざるに、獨逸の商工業は、早く佛國のそれを壓し、英國の壘を摩するに至れり。我嘗て倫敦に遊びて、之を其地の人より聞けり。獨逸製品の輸入年々に増加し、頗る倫敦の工業に影響し來れるあり。一年、市の商業會議所之が防遏を圖り、市内の輸入商に約し、獨逸品に限り、

「日耳曼製」の商標を貼附せしめしことあり。當時其意に謂へらく、獨逸製の蠱惡にして廉價なるは、内外人の夙に知悉する所。故に「日耳曼製」といふ商標を貼附せしめなば、人々之を指目せらるゝを恥ぢ、身に著け、手に把らざるに至る可しと。既にして實施一年後、其輸入額を統計するに及び、却て前年に倍獲するを發見せり。是れ他なし、多數なる倫敦の下流社會も、亦生活の困難に逐はれ、苟も「日耳曼製」といへば、其價格の下廉なるを思ひ、其物品の商標を指目し、争ひて之を購へるに由りてなり。倫敦の市場すら且つ然り。而るを況や其他の各邦に於てをや。今日吾東京の市内に散在する幾多の舶來小品店を看よ。店頭陳列する所の十の六七までは所謂「日耳曼製」に非ざる無し。斯くの如くして獨逸は其特能を發揮し、日に其富強を加へつゝあり。

是れ其當初英雄の士ありて、卓越の先見、超邁の創意、之が大端を啓きたる賜ならざること莫らんや。願ふに故大相宰相斯麥克、豊或は其人なりけん歟。

第十五 英雄の特質 (一)

絶倫の精力……邁往の氣象……堅忍の意志……繼續の精神……加爾大王の千里獨行。

熟古今の英雄を觀るに、其精力の旺盛なる、常に萬人に殊絶するものあり。唯其精力既に絶倫なり。是を以て事に當りては、邁往屈せず。業を執りては、堅忍撓まず。之を運らすに、繼續

の精神を以てせり。故に邁往の氣象といひ、堅忍の意思といひ、繼續の精神といふも、要は源泉滾々たる一精力の發動に外ならず。或は之を名けて精力主義といふ。亦如是觀を爲すをも得べし。拿破崙一世大帝が壯時、如何に困憊せる時と雖も、僅に二時間睡眠すれば、心身兩つながら爽然として、忽ち精力を回復したりしと云。彼や此絶倫なる精力あり。彼が居常 impossible 即ち不可能の語を惡み、之を辭書より削り去らんと欲したるの、抑偶然に非ざるを知る可し。

試に英雄邁往の一例を回顧せん乎、瑞典の英主加爾十二世は、夙に霸業を中歐に立て、露の彼得大帝を抑制すること十餘年。大王進みて莫斯科に入り、一舉其志を成さんと欲して、不幸、天寒と凶歎とに會ひ、ボルタワの一戦終に競はず。退きて土耳

其に投じ、更に土帝を獎慰して、復た露國と戦はしめ、ブリュッの役、殆ど彼得を得んとしたるも、土將敵の重賂を貪りて、事媾和に歸せり。大王快々として樂ます。居ること暫くして、敵軍本國に逼ると聞き、歸りて之を救はんと欲し、人をして別を土帝に告げしめ、千七百十四年の十月一日、其隸屬を率ゐて、デミルタシニの行宮を發す。土帝亦鹵簿の一隊を附して、道路を警蹕せしめ、且つ國內沿道の諸總督に勅して款待せしむ。車駕の過ぐる所、送迎雲の如く、早く既に三旬餘を経たり。忽ちにして瑞領ボメラニーの首府ストラルサンドの急を告げ來る。大王單騎之に赴かんと欲す。左右之を危めども、顧みず。悉く其隸屬と土廷附する所の護衛を揮ひ去る。衆暗然涙を飲みて別る。王乃ち假髮して、相貌を份し、身に長套を被り、腰に一劍

を佩び、獨逸の士官と號稱し、獨り侍從ヂューリングを從へて、其程に就けり。然も大王餘りに高名にして、敵國の士民多く王の風采を知れば、路上の變測る可からず。是に於て路を匈牙利より、モラヴィイ、埃地利、巴威利、ウルテムベルヒ、バラチナ、ウエストフアリー、メクレムベルヒに取るに決したれば、之を順路に比するに、幾んど一倍紆回の長程となれり。其發程當日の事なり。大王馬を走らすこと終日、夜に入りても、尙ほ疾驅を停めず。ヂューリング年壯なるも、困頓實に甚し。馬より下りて、路傍に箕踞し、王に謂て曰く、人馬既に疲れて、夜も亦闇黒なり。請ふ宿舎に就かん。大王憐ばず。顧みて問うて曰く、我の此行に、汝は資斧幾何をか齎らし來りしや。曰く、黃金一千エキューを齎らせり。曰く、然らば其一半を我に附せよ。

我、汝の狀態を視るに、畢竟私の旅伴ならず。我は是より獨行せん。汝は後より來る可きのみと。ヂューリング哀願して曰く、臣豈陛下に離るゝを得んや。已むこと無ければ、只三時間、陛下忍びて此に憩はせたまへ。臣能く臣の疲困を醫して、以て陛下に奉隨せんと。然も大王固く執りて、之を聽かず。ヂューリング其の争ふ可からざるを覺り、五百金を王に捧ぐ。王更にヂューリングに命じ、驛站に就きて、繼馬を求めしむ。ヂューリング即ち一計を按じ、黃金二エキューを驛長に賄ひ、囑して曰く、我、吾從兄と此行を俱にし、此地に到りて、吾心地例ならず。暫く休息して、吾勞を醫せんことを求むれども、從兄性急にして、吾求を容れず。獨り我を此地に遺し、單騎前往し去らんと欲す。望むらくは彼に惡馬を與へ、我爲には駿馬を擇みて、

豫め之を傳車に駕せよ。二三時間の後、遅れて發するも、彼に追及す可からしめよと。驛長領して、其言の如くす。大王初より之を知らず。夜方に十時なり。馬を代へて、獨り發す。道路闇黒にして、物色を辨せず。加之、雨雪交り下り、疾風之を捲く。而して其馬果して驚駭。叱すれども動かず。策すれども進まず。大王怒りて馬を棄て、闇を冒して行くこと數里。ヂューリング此間隙を利用し、驛舎に睡ること數時間の後、驛傳の馬車を驅りて、王の後を追ふ。其馬も亦果して峻足、天明に及ぶ比ほひ、前程に歩行せる大王に追及べり。ヂューリングの喜や想ふ可し。即ち王に勸めて車上に上らしむ。王、藁蓐に憑りて、一睡少時、神色些の疲困を見ず。是より後ち、晝は馬を走らしめて、日の力を極め、夜は馬車を驅りながら、僅に車中に睡り、

風雨と戦ひ、氷雪を冒し、晝夜兼程、未だ一夜だに驛舎に就かず。十有六日間、長程を馳せ續け、十一月二十一日の夜一時、始めてストラルサンドの城門に達したり。王、哨兵をして調を主將ヂューケルに通せしめて曰く、我は土耳其に駐蹕したまふ吾國王陛下より重要な使命を帯び來れり。直ちに將軍を見て、之を傳へんと欲す。入りて之を將軍に告げよと。哨兵之を遮りて曰く、吁此深夜、總督閣下は就寢既に久し。閣下に見えんと欲しなば、明朝早く再び來る可しと。王曰く、事極めて急なり。今夜之を通せずば、明日汝等嚴罰を受けん。哨兵已むを得ずして、ヂューケルに報ず。ヂューケル以爲へらく、陛下左右の一將校、使命を齎らし來りしならんと。命じて之を寢室に導かしむ。大王既に入る。ヂューケル尙ほ臥床に在り。睡眠未だ

water

英 雄 論

動かんとせす。乃ち小刀を以て其革を寸断し、始めて之を除
 去するを得たり。將軍、便服を求め來りて、王に捧ぐ。王乃ち
 服を改め、茲に始めて臥床に就く。一睡數時間、覺め來れば、諸
 將を聚め、各種の情報を聽きて、一々訓令を與へ、了れば直ち
 に諸隊を檢閲し、又諸堡塞を巡視して、倦みたる色も無かりし
 と云。

以上は文豪ヴァルテールが親しく大王の左右に在りて、目の
 あたり之を睹たりし近親に聞きて、大王本紀に録せし所。英雄
 の特質を發揮して、亦遺憾なし。我嘗て懷を述べて曰く、
 大丈夫は命の限り勤しまん加爾十二は吾師ならずや。
 大丈夫當に斯くの如くなるべきのみ。

英 雄 論

定まらず。眼を摩しつゝ問うて曰く、貴官何等の使命をか齎ら
 したるや。大王突として其腕を把り、謂て曰く、吁我に忠順な
 る一將も、亦我を忘れたる歟。聲に驚きて、其顔を仰げば、是
 れ瑞典の大王加爾十二世陛下なり。ヂューケル殿下して、脚下
 に俯し、王の膝頭に接吻し、感極まりて、言ふ所を知らず。只
 看る其眼底より狂喜の涙滴々とし落下し來れるを。此報忽ち
 全府に聞ゆ。家々皆門を開き、人々皆衢に聚まり、口々に叫び
 いふ、大王單騎城中に入り、我等を既亡に救ひたまふと。忽ち
 にして祝砲轟々、其響滿府を動かす。祝杯を舉ぐる者、國旗を
 掲ぐる者、一府の人民皆狂の如し。將校は王の左右に蟬集し、
 先づ王の長靴を脱して、長途の勞を休めんと欲し、手にく之
 を曳けども、十六日間、其足に穿たれたれば、固く膠著して、

第十六 英雄の特質 (二)

漢の高祖と魏の曹操……諸葛武侯の出師表……
加爾大王と彼帝大帝。

漢の高祖沛の豊邑より起り、三年にして、秦を滅ぼし、後ち又漢楚相争ひ、五年にして項羽を亡ぼし、通じて八年にして、天下を取れり。然も其の楚と相争ふに當りてや、戲下に危く、彭城に敗れ、滎陽に圍まれ、成阜に困み、廣武に傷つきながら、未だ嘗て撓屈せず。而る後ち垓下の大勝を博し、終に彼の志業を成せり。彼の堅忍不拔なる、亦以て見る可きには非ずや。即ち是れ繼續の精神、其れをして然らしめたるなり。

曹操、漢室の衰運に乗じ、天子を挟みて、群雄を控制し、終に以て自ら退くす。彼や固より英雄の徒、許すに匹敵を以てす可からずと雖も、其の始めて兵を起して、董卓を討せしより、魏家の基業を定めて、歿するに至るまで、中間實に三十年。其間彼の踰躍を顧みよ。諸葛武侯の評は、簡に盡せり。其言に曰く「曹操智計人に殊絶し、其の兵を用ゐるや、孫吳に髣髴たり。然れども、南陽に困み、烏巢に險しく、祁連に危く、黎陽に偪り、幾んど伯山に敗れ、殆ど潼關に死し、然る後ち一時を僞定したるのみ」と。是れ即ち操の堅忍なり。而して是が評者たる諸葛武侯は則ち如何。侯が先主の三顧に遭ひ、許すに馳驅を以てしたるより、王業の復興を以て自ら任とし、五丈の原頭に將星隕つるに至るまで、二十八年唯一日の

如きものあり。其の最後の北征に臨み、後主に上りたる後出師の表を讀め。

『先帝深慮。以漢賊不兩立。王業不偏安。故託臣以討賊也。以先帝之明。量臣之才。固當知臣伐賊才弱敵強也。然不伐賊。王業亦亡。惟坐而待亡。孰與伐之。是故託臣而弗疑也。臣受命之日。寢不安席。食不甘味。思惟北征。宜先入南。故五月渡瀘。深入不毛。并日而食。臣非不自惜也。願王業不可得偏全於蜀都。故冒危難以奉先帝之遺意也。而議者謂爲非計。今賊適疲於西。又務於東。兵法乘勞。此進趨之時也。謹陳其事如左。高帝明並日月。謀臣淵深。然涉險被創。危然後安。今陛下未及高帝。謀臣不如良平。而欲以長計取勝。坐定天下。此臣之未解一也。劉繇王朗。各據州郡。論安言計。動引聖人。羣

疑滿腹。衆難塞胸。今歲不戰。明年不征。使孫策坐大遼并江東。此臣之未解二也。曹操智計。殊絕於人。其用兵也。髣髴孫吳。然困於南陽。險於烏巢。危於祁連。偏於黎陽。幾敗伯山。殆死潼關。然後僞定一時耳。況臣才弱。而欲以不危而定之。此臣之未解三也。曹操五攻昌霸不下。四越巢湖不成。任用李服。而李服圖之。委任夏侯。而夏侯敗亡。先帝每稱操爲能。猶有此失。況臣駑下。何能必勝。此臣之未解四也。自臣到漢中。中間非年耳。然喪趙雲陽群馬玉關芝丁立白壽劉郃鄧銅等。及曲長屯將七十餘人。突將無前賓叟青羌散騎武騎一千餘人。此皆數十年之內所糾合。四方之精銳。非一州之所有。若復數年。則損三分之二也。當何以圖敵。此臣之未解五也。今民窮兵疲。而事不可息。事不可息。則住與行。勞費正等。而不及蚤圖之。

欲以一州之地與賊持久。此臣之未解六也。夫難平者事也。昔先帝敗軍於楚。當此時。曹操拊手。謂天下已定。然後先帝東連吳越。西取巴蜀。舉兵北征。夏侯授首。此操之失計。而漢事將成也。然後吳更違盟。關羽毀敗。穉歸蹉跌。曹丕稱帝。凡事如是。難可逆見。臣鞠躬盡力。死而後已。至於成敗利鈍。非臣之明所能逆觀也。」

吁此一篇、永く天地の間に留まり、武侯英雄の本領と、又其繼續の精神を看る。壯なる哉。

更に之を近古に察すれば、瑞典の大王加爾十二世と露西亞の大帝彼得とは、時を同じくして、歐洲に見はれ、兩々相執りて、相下らず。而して其精力の絶倫にして、邁往堅忍繼續の精神に

富みたることも、亦又彼是相當るものあり。是を以て兩雄の抗爭、永く史家の驚嘆を惹けり。抑々兩雄たる、何れも世襲の帝王たれば、一家を以て名く可きに非ずと雖も、加爾大王は夙に戰闘を以て當世に顯はれたれば、自ら兵家の觀あり。之に反し、彼得大帝は早く事業に由りて世界に知られたれば、亦自ら事業家の概あり。従ひて加爾は邁往して征服を完成せんとすれば、彼得は陰忍して事業を繼續せんとせり。之を東方の豪傑に比せん乎、加爾は楚の項王之如く、彼得は漢の高祖に似たり。加爾は上杉謙信の如く、彼得は武田信玄に似たり。加爾の意氣や洵に尙ふ可く、彼得の氣象も壯とするに足るものあり。

兩雄の爭端一たび發するや、加爾大王は其天縱の雄才に藉り、自ら瑞軍の元帥となり、精騎八千を以て四萬の露軍を破り、ナ

ルワの大勝、歐洲の天地を震動せしめたり。是れ加爾の雄なる所。是時に當りて、彼得は兵法を知らず。露軍は節制に習はず。彼得乃ち上將を抽任し、其身は大尉として上將の約束に就き、一には自ら戰鬪を學び、二には其軍に軍紀を覺らしむ。是れ彼得の偉なりし所。爾後の戰鬪に於て、每戰概ね露軍は敗る。然も彼得は夷然として曰く「是れ吾學習中の月謝なり。他年一日得業せん乎。最後の勝利は吾有たらんのみ」と。加爾が懸軍長驅して、將に莫斯科に入らんとするを聞きし時にも、彼得は亦慨語して曰へり「吾友加爾、亞歷山を以て自ら居らんと欲するも、我豈永く達流斯となりて終る者ならんや」と。其後ホルタワの一役、戰の罪に非すと雖も、加爾大王の敗衄に歸して、王は未來の拿破崙一世と運命を同くし、彼得大帝與して達

流斯とならず。露國中興の太宗として、永く其名を史冊に照耀せり。史家ヴォルテール之を評して曰く「ホルタワの一戰、兩雄の運命を定めて、天下の事大に定まれり。是れ天、北方に位する世界の一大分野の爲に、彼得に與ふるに之を文明に導くの自由を以てしたるもの歟」と。自らは是れ長者の言なり。之を統ぶるに、加爾は天授、人々の企て及ぶ所に非ず。中行の士にして英雄の域に志す者は、彼得の蹟に就き、工夫を贏ち得て進むべきのみ。

第十七 英雄の襟度(二)

天眞即ち自發の本源。…魯の孔子と埃及の大王アマ
 シス二世。…放達…忽必烈汗の放達。…疎財。…漢の
 高祖・豐太閔・加爾大王・西郷南洲の疎財。

英雄には自ら英雄の襟度あり。是れ其濶達大度の本領より來
 るものなりと雖も、亦別ちて之を觀んことを要す。其一は天眞
 に在り。即ち自發の本源を有するに在り。怒れば雷霆霹靂とな
 り、鬼神も其威を避け、喜べば春風和氣となり、兒童も其膝に
 戯る可し。古より「英雄頭を回らせば則ち神仙」の語あり。是
 れ英雄の一半を解得したるの語に過ぎず。其れをして眞の英雄
 ならしめば、頭を回らさざるも、亦神仙たらんのみ。何となれ
 ば、Herosは即ち神人なればなり。是故に眞誠なる英雄の襟度は、
 自然にして聖人のそれに符合するものあり。

上世、支那には臘月に蜡の祭あり。是れ百穀豐穰の後、神恩

を感謝せんが爲に、羣神に捧ぐる祭祀にして、當時の國民の大
 祭なり。孔子魯に在る時、門人子貢を從へて、出て焉を觀る。
 願みて子貢に問うて曰く、賜や樂しき乎と。子貢眉を擧めて曰
 く、一國の人皆狂するが若し。賜や未だ其の樂みたるを知らざ
 るなりと。孔子莞爾として曰く、是れ「百日の勞に、一日の樂
 一日の澤。爾の知る所に非ず。張りて弛べざれば、文武も能は
 ず。弛べて張らざれば、文武も爲さず。一張一弛は、文武の道
 なり」と。是れ弓を以て人に喻へ、常に弦を張る時は、其弓力
 を弱らし、全く之を弛ぶる時は、其弓體を失はしむるを説示し、
 一張一弛、其時に於てするが、先聖文王武王の政道なるを教へ
 しなり。

孔子の支那に於て卒したるは、基督紀元前四百七十九年に在

り。之に先だつこと尙ほ約半世紀、即ち紀元前五百二十二年、埃及に於て殞落したる國王アマジス二世は、ファラオン中の一英雄なり。王の世に在るや、孜孜として軍國の政に勉め、治績内に擧がり、威武外に振ひ、夙に賢王の稱を負へり。然れども其の入りて宮中に在るや、逸樂に耽り、幾んど全く別人の觀あり。人あり、王を諫めて曰く、大王内を好みて、逸樂に耽りたまふとの譏あり。盍ぞ旰衣宵食して、一層國政を視そなはし、國民の瞻仰を加へたまはざる」と。王笑ひて、坐右の弓を指して曰く「卿等も亦弓の用法を知らん。常に緊張して、弛ぶること無くば、其弦絶えざれば、則ち撓まん。人も亦斯くの如きのみ。徒に勤勞して、逸豫を廢しなば、其人狂せざれば、則ち耗せん。是れ我の勞逸を適分する所以なり」と。以て觀る可し、

アマジスと孔子と其襟度則ち一なることを。

又英雄の襟度を察するに、其二は放達に在り。昔は楚の屈原、言を漁父の辭に假りて「聖人は物に凝滞せずして、能く世と推移る」といへり。是にして聖人の襟度ならば、英雄も亦其揆を一にせり。古今の英雄が甚だ事物に拘々たらず、變通の妙用を一心に存するものは、此放達あるに由りてなり。但し是れ本領ある者にして、而る後と言ふ可きなり。若し其本領の見る可き無く、徒らに放達是れ尙ば、喪守失節、永く英雄壇下の泥土に没せんのみ。

忽必烈汗蒙古より起りて、金宋を滅ぼし、大元一統の天下を制するや、其版籍、南は支那全國を蔽ひ、北は西伯利に及び、

彼が餘りの横著さ、固より以て常範と爲す可からずと雖も、彼に此大放達あり。而る後ち能く彼が彼大帝國を創建維持せし所以を見る。雄なる哉。

英雄の襟度や既に放達なり。其の好みて物を人に施與するもの、亦此放達あるに由れり。我嘗て之を聞く。近世、支那には疎財といふ語あり。流俗、疎財の人を視れば、直ちに英雄と爲すと云。斯くの如きは拜金風氣の然らしむる所。是を以て英雄を論ずるは、餘りに卑にして、言ふに足らざるも、然も疎財は人々の難しとする所。之を敢てして顧みざる、亦豪とするに足るものあり。其人は自ら英雄の片鱗を得たりと謂ひつ可し。司馬遷が漢の高祖を傳するや、「仁にして人を愛し、施を喜む」

といふ。高祖疎財の人たりしや想ふ可し。其一端とも視る可きは、楚の君臣を離間せんが爲に、陳平に與ふるに黄金四萬斤を以てし、其出入を問はざりしが如き、即ち是なり。二十四銖を兩と謂ひ、十六兩を斤と謂ふより算すれば、四萬斤は五十六萬兩の黄金なり。之を金錢上には信用の置けぬ一陳平に放委して顧念せざる、高祖、果して遷の稱せし所に違はず。

九江王鯨布が楚より漢に歸するや、漢王床に踞して、足を洗ひながら、之を召見せり。鯨布且つ憤怒し、且つ悔恨し、一たびは自殺せんとまで欲せしも、出で、館舎に就きみれば、帳御從官の備、漢王の居に異ならず。是に於て乎布大に喜び、以て望外と爲せり。

韓信の齊を定むるや、特使を發して漢王に見え、請はしめて

曰く、齊は僞詐多變反覆の國、且つ南のかた楚に遷れり。假王となりて之を鎮せざれば、形勢定まらず。願くば大王之を假せと。時に漢王は滎陽に圍まれて、危急に際したれば、勃然として罵りて曰く、我は此に困み、且暮、彼の來り佐けんことを望めるに、乃ち自立して王とならんと欲する歟と。時に張良傍に在り。王の將に大事を誤らんとするを視て、其足を躡み、且つ耳語す。王頓悟し、脱然として復た罵りて曰く、大丈夫、諸侯を定めなば、即ち真主たらんのみ。何ぞ屑々として假を以てすることを爲さんやと。直ちに命じて印を賜ひ、韓信を立て、齊王と爲せり。

彼や既に此放達喜施疎財あり。故に其志業成りたる後、雒陽の南宮に置酒するの日、高起王陵は則ち曰へり「陛下は慢にし

て人を侮り、項羽は仁にして人を愛せり。然れども陛下は人に城を攻め、地を略せしむれば、降下する所は、因りて之を予へ、天下と利を同くしたまへり。項羽は則ち之に反し、賢を妬み、能を嫉み、有功者は之を害し、賢者は之を疑へり。戦勝ちて、人に功を予へず。地を得て、人に利を予へず。此れ天下を失ひし所以なりと。

吾豊太閤の喜施疎財、亦酷だ漢高に肖たり。彼の漸く志を得て、歳入二百萬石に上り、其府庫充溢するや、彼は謂へらく、我獨り自ら封殖す可からずと。場を聚樂の門前に設けて、黄金を山積し、將士に頒與したること、前後二回。自ら臨みて之を観る。喜色面に満ちたりしと云。彼が能く一世の豪俊を驅使したる所以の一端を観るに足らん。

唯漢高太閤は、人に與ふることの豊なると同時に、自ら奉ずること亦又太だ豊なる者なり。若し其れ自ら奉ずることは極めて薄く、人に與ふることは甚だ厚き者を求むれば、西に加爾大王ありて、東に西郷南洲あり。加爾中歐の霸王として、其身士卒と衣食を同くし、死に至るまで之を變へず。而して群下に與ふること太だ豊富、常に人々の望外に出でたり。是を以て法を持すること峻嚴なりしと雖も、衆喜びて之が用を爲し、未だ嘗て怨望を發せず。西郷南洲の生活に至りては、乾淨寒素、太古の人の如く、而して財賄を視ること土塊に異ならず。在れば則ち人の取去るに委せ、人の急に赴くこと、饑者の食に於けるが如く、渴者の飲に於けるが如かりき。吁是れ天地間の一人なる乎。

第十八 英雄の襟度(二)

寛裕…唐の太宗の寛裕…自感…参や
魯…太宗の自愚…石田三成の亞雄たる
所以…玉と水精…眼中の英雄に告ぐ。

英雄の天真放達と相並びて、俱に之を観る可きは、則ち寛裕の襟度に在り。古今の英雄が概ね諫に従ふこと流るゝが如くなるものは、此綽々たる餘裕あるに由りてなり。唐の太宗は漢高以後支那に於ける帝王中第一等の英雄なり。嘗て趙翼が劄記を讀み、「貞觀中の直諫者は魏徵に止まらず」の章に至り、稽首地に抵るを覺えざるものあり。今其章を此に抄出す。

「貞觀中の直諫者は、首として魏徵を推す。太宗嘗て徵に謂て曰く、卿が前後の諫諍二百餘事、至誠に非ざれば、何ぞ能く斯くの若くならんやと。又朝臣に謂て曰く、人は魏徵の舉止を疎慢なりと言ふも、我は但だ其嫵媚を覺ゆるのみと。徵疾を以て位を辭すれば、帝曰く、金は必らず鍛鍊して器を成す。朕は方に自ら金に比し、卿を以て良匠と爲せり。豈去る可けんやと。今に至るまで傳ふる所の十思十漸等の疏、皆人の敢て言はざる所。而して帝悉く之を聽納せり。此れ貞觀の君臣間。直ちに都兪吁嘯の盛を追ひつ可し。
然れども其時の直諫者は止だに魏徵のみならず。薛收、獵を諫む。帝即ち金四十錠を賜ひて、以て之を獎む。孫伏伽、元師律が罪の死に當らざるを諫む。帝即ち賜ふに蘭陵公

主の園直百萬なるものを以てす。或ひと以て太厚と爲す。帝曰く、朕、位に即きて、未だ諫者あらず。是を以て之を賞すと。温彦博、長安令楊纂が失察罪は死に當らずと諫む。帝即ち之を赦す。虞世南、田獵を諫む。次ぎて山陵の制は厚きに過ぐべからずと諫む。既にして宮體詩の作るべからざるを諫めて云く、恐らくは天下風に從ひて靡かんと。又功高を以て自ら矜る勿れ、太平を以て自ら怠る勿れと諫む。帝曰く、群臣皆世南の若くならば、天下何ぞ理まらざるを憂へんやと。馬周、大安宮の宜く崇奉すべく、宗廟の宜く親祀すべく、樂工王長通等の宜く官を賜ふべからざるを諫む。帝、大宅の直二百萬なるものを購ひて、之に賜ふ。廬江王瑗が姫幸せられて帝側に侍す。王珪諫めて曰く、陛下、瑗が姫の夫を殺し

て之を取りたることを知り、以て非と爲しながら、奈何ぞ又左右に侍せしむるやと。帝即ち之を出す。珪又祖孝孫は雅士宜く女樂を教へしむべからずと諫む。帝之を斥けたりと雖も、明日悔みて、房元齡に語り、群臣をして此に因りて直言を諫むこと勿らしむ。姚思廉、九成宮に幸するを諫む。帛五匹を賜ふ。高季輔時政の得失を指陳す。帝賜ふに鐘乳一兩を以てして曰く、卿、藥石の言を進む。故に藥石を以て相報うと。戴胄、洛陽宮を修むるを諫む。帝之を嘉みす。張元素も亦此役を諫め、以て隋の煬帝よりも甚しと爲す。帝曰く、卿、我を煬帝にも如かずと謂ふが、桀紂とは如何と。元素對へて曰く、若し此役にして辛に與らば、同じく亂に歸せんのみと。帝嘆じて曰く、我遂に此に至らんことを思量せざ

りきとして、命じて役を罷め、言者に帛二十疋を賜ふ。褚遂
 良、魏王泰を寵せらるゝの太だ過ぎたるを諫む。帝之を納る。
 又成を東岳に告ぐるを諫む。即ち封禪を罷む。張元素は令
 史出身なり。帝其履歴を問ふ。元素慚ちて、對する能はず。
 褚遂良謂ふ。元素已に擢んでられて三品に至れば、陛下宜く
 群臣に對して其門戸を窮むべからずと。帝亦之を悔う。帝
 常に山東の人物を論ず。張行成言ふ、天子は四海を以て家と
 爲す。宜く東西を以て限と爲すべからずと、帝之を善みし、
 馬一匹、錢十萬、衣一襲を賜ふ。裴仁軌私に宮門の夫を役す。
 帝之を斬らんと欲す。李乾祐奏すらく、罪、死に應せずと。
 帝即ち之を免せり。權萬紀、太子承乾に教ふるに正を以て
 する能はず。帝之を誅せんと欲す。柳範曰く、房元齡すら尙
 ほ陛下の田獵を止むる能はず。豈獨り萬紀を罪す可けんやと。
 帝大に怒り、衣を拂ひて入る。之を久して獨り範を召し、之
 を慰諭せらる。帝好みて群臣と論難す。劉洎力諫す。帝詔
 答して曰く、物を輕んじ、人に驕ること、恐らくは此に由ら
 ん。敬みて當に虚懷之を改むべしと。洎又上言す、近來上書
 の人あれば、陛下或は面窮詰を加ふ。恐らくは進言の路を阻
 するを致さんと。帝曰く、卿の言是なり。當に之を改むべし
 と。
 魏徵嘗て帝に言ふ、陛下之を導きて言はしめたまふ。臣の
 敢て諫むる所以なり。初より陛下之を受けられずば、臣豈敢
 て龍鱗を犯さんやと。一日、帝、韋挺、虞世南、姚思廉等を宴
 す。謂て曰く、龍に逆鱗あり。人主にも亦これあり。卿等遂

りきとして、命じて役を罷め、言者に帛二十疋を賜ふ。褚遂
 良、魏王泰を寵せらるゝの太だ過ぎたるを諫む。帝之を納る。
 又成を東岳に告ぐるを諫む。即ち封禪を罷む。張元素は令
 史出身なり。帝其履歴を問ふ。元素慚ちて、對する能はず。
 褚遂良謂ふ。元素已に擢んでられて三品に至れば、陛下宜く
 群臣に對して其門戸を窮むべからずと。帝亦之を悔う。帝
 常に山東の人物を論ず。張行成言ふ、天子は四海を以て家と
 爲す。宜く東西を以て限と爲すべからずと、帝之を善みし、
 馬一匹、錢十萬、衣一襲を賜ふ。裴仁軌私に宮門の夫を役す。
 帝之を斬らんと欲す。李乾祐奏すらく、罪、死に應せずと。
 帝即ち之を免せり。權萬紀、太子承乾に教ふるに正を以て
 する能はず。帝之を誅せんと欲す。柳範曰く、房元齡すら尙
 ほ陛下の田獵を止むる能はず。豈獨り萬紀を罪す可けんやと。
 帝大に怒り、衣を拂ひて入る。之を久して獨り範を召し、之
 を慰諭せらる。帝好みて群臣と論難す。劉洎力諫す。帝詔
 答して曰く、物を輕んじ、人に驕ること、恐らくは此に由ら
 ん。敬みて當に虚懷之を改むべしと。洎又上言す、近來上書
 の人あれば、陛下或は面窮詰を加ふ。恐らくは進言の路を阻
 するを致さんと。帝曰く、卿の言是なり。當に之を改むべし
 と。
 魏徵嘗て帝に言ふ、陛下之を導きて言はしめたまふ。臣の
 敢て諫むる所以なり。初より陛下之を受けられずば、臣豈敢
 て龍鱗を犯さんやと。一日、帝、韋挺、虞世南、姚思廉等を宴
 す。謂て曰く、龍に逆鱗あり。人主にも亦これあり。卿等遂

に觸犯を避けず。常に斯くの如くなれば、朕豈危亡を慮らんやと。」
張翼曰く、諸臣の敢諫斯くの如し。是れ寔に帝の能く諫を受くるに由りてなりと。貞觀の治績と文明とか支那の三千載間に特出照耀するものは、則ち是を以ての故なり。

英雄既に寛裕の襟度あり。而して是れ此寛裕中に一世の俊傑を籠罩し、天下の大事を成就す可き甚妙甚玄の一物を包含せり。「自愚」なるもの即ち是なり。自愚の語獨創、未だ盡さず。「馬鹿になる」といふこと即ち是なり。英雄是ありて、亦聖者と合す可し。彼孔子の言を聽け。曰く「君子は盛徳ありて、容貌愚なるが如し」と。意は「如」しの一字に在り。愚なるが如くな

れば、人々に寄附く可し。智者は爲に智を出し、勇者は爲に勇を出す。金平糖の芥子の粒、轉がる毎に大なる可し。孔子の門下を月旦するや、曾子を「参や魯なり」と言ふ。魯は馬鹿なり。薄乃魯なり。曾子は然く馬鹿なりし歟。孔門三千の中に在りて、道統の傳を繼承せしは、此魯なる参には非ざりしや。近くは枝吉神陽の世に在るや、令弟副島先生を指して「次郎は馬鹿」と稱せしと云。又南洲翁が其昔、今の東郷大將を俊傑の士に紹介するの際「是は平八郎といふ馬鹿者でござす」といひしと聞く。故伯現大將孰れも皆一世の雋、亦是れ「参や魯」なり
の意なり。
請ふ唐の太宗を看よ。天錫の智勇一世に冠絶し、當時の俊傑皆下風に在り。献策上言の群臣中には、迂儒も交はる可く、俗

更も在りたらん。帝の時に之と論難し、或は時に面詰を加へたる、其批、其詰、十の八九に至るまでは、帝の言旨必らず當りつらん。然も劉洎之を諫むれば、「卿言是なり。虚懐當に之を改むべし」といふ。是れ其容明特達の天性、事に觸れて、圖らず發出し、劉洎の言を得るに及び、我亦之を出したる歟と頓悟自覺したる後、自愚體の馬鹿に復せしなり。太宗眞の英雄たる、是に於て乎則ち觀る可し。

我嘗て石田三成を論ず。太閤の薨後、諸將職々、尙ほ小康を庶幾するの時に當り、夙に姦雄徳川家康が姦謀を透見し、太閤の遺澤未だ人心より去らざるに乘じ、能く海内一半の侯伯を糾合し、堂々の陣、正々の旗、輪贏を關ヶ原の一戦に賭したるは、命世の才と謂つ可し。且つ其政眼戦眼の一撃、亦英雄の特質を

具備したり。唯彼賦性餘りに敏穎、自ら愚にして馬鹿になる能はず。豊家に忠實なる舊曲の勇將健卒一半を驅りて、老賊の旗下に投せしめ、壯志永く一空に歸せり。願ふに三成をして初より自愚の襟度を有せしめば、加藤福島黒田山内等、皆其敵にはならざりしならん。惜む可き哉。

昔は程子、孟子を評して曰く「孟子些の英氣あり。才に英氣あれば、便ち圭角あり。英氣甚だ事を害す。顔子の如きは、便ち渾厚、顔子の聖人を去る、只毫髮の間のみ。孟子は大賢、亞聖の次なり」と。或ひと更に問うて曰く、英氣何の處にか見ゆる。程子之に答へて曰く「孔子の言を以て之に比しなば、便ち見ゆ可し。且つ氷と水精との如し。光らざるには非ず。然も之を玉に視よ。自ら是れ温潤含蓄の氣象ありて、許多の光耀なき

也」と。善い哉比喩や。亦以て英雄に移す可し。眞の英雄は以て玉たる可し。氷と水精なる可からず。彼晃々たるものは英氣、圭角甚だ事を害す。三成の終に成る可からざる所以なり。嗟乎彼三成は亞雄の人歟。

論じて一たび此に至れば、我の眼中に英雄の鳳雛あり。羽毛翮翼悉く具れるも、彼崑山に住するを思はず。好みて水精の阜上に在り。英氣晃々、人目を奪ふ。衆鳥の従ひて飛ばんは難し。「鳳兮鳳兮遊崑山」。我重ねて之を歌ふ。「鳳兮鳳兮遊崑山」。

第十九 英雄の性癖(二)

二個の反撥性……明の大祖……クロンウエル……善にも強ければ、悪にも強し……英雄好まざる所なく、嗜まざる所なし……加爾大王の功名心……梟雄亂を好む……埃及のファラオン・秦の始皇及其他諸英雄の好土功……大禹の治水……ラムセス三世の運河……秦の始皇の長城……亞歷山・太閤の建府。

明の大祖乞巧僧より起りて、天下の大亂に克ち、有明一代の帝業を立つ。其の大成功の根本如何と顧みれば、孟子の所謂「人を殺すことを嗜まず」といふ一語に在り。張翼嘗て此人を論じて曰く、

「元の末造に當り、群雄並び起り、唯だ子女玉帛を事として、生靈を荼毒す。獨り明祖のみは世を救ひ、天下を安んずるを

Cromwell
puritan

英 雄 論

以て心と爲せり。故に仁聲義聞四方に被及し、至る所に降附相接し、攻戦の力を省くこと大半なりき。然れども其後胡藍二黨の變、誅戮四五萬人に至れり。又滇黔を平定するや、苗蠻を殺すこと、亦六七萬に下らず。蓋し明祖は、一人にして聖賢豪傑盜賊の性を兼有せる者なり」と。
一人にして聖賢豪傑盜賊の性を兼有す。言得て甚だ善し。明の太祖に後るゝこと百年にして、歐西の英國にクロンウエルの出るあり。其人、英王查理一世の暴政を憤りて、一たび兵を起しより、義聲仁聞亦國內に信孚し、天下を一匡して、國民を塗炭に救ひ、永く英國富強の基を開けり。此點より視れば、彼は實に人道の保護者にして、即ち是れ聖賢の徒なり。然も王黨を殺戮するに、餘力を遺さず。遂には國王の弑逆をも忍べり。此

英 雄 論

點より言へば、即ち殘暴の人なり。亦是れ一人にして聖賢英雄盜賊の性を兼有せる者歟。故にカーライルの英雄論を著すや、帝王的英雄に於て、首として此人を論じ、其の相容れざる二個反撥の性質を指斥せり。
然れども此反撥せる二個の性質たる、其實、人々の皆通有する所。古聖謂ふ所の人心道心は即ち是なり。唯英雄には絶倫の精力あり。是を以て道心を發揮するにも、此精力を以てし、誤りて人心を妄用するにも、亦又此精力を以てすなり。是に於て乎二個の反撥性殊に兩つながら顯著を見る。世に有爲桀黠の人物あり。一旦己の非行を悟り、翻然として之を改むれば、其の正路に進進するも、亦大に見る可きあり。世人之を稱して『惡にも強ければ、善にも強し』といふ。畢竟是にこれ由るのみ。眞の

Alexander
Cedar

英 雄 論

最も英雄性癖の病根に的中せるを覺ゆ。曰く「陛下内多欲にして、外仁義を施す」と。是れ此多慾即ち人心、動もすれば絶倫の精力に伴ひ、無限に増長し來らんとす。是に於て乎道心の發動たる人道及正義と反撥し、内に相戦はざるを得ず。英雄の有する二個の反撥性往々相掩はざる所以なり。

我、加爾十二世の功名に志したる所以を觀るに、王年十八にして大志を發し、世界の大王とならんと欲す。由りて謂へらく、亞歷山愷撒雄は則ち雄なりと雖も、其人皆失徳ありて、毀譽掩はず。自今我は失徳なき歷山愷撒となりて、以て古今に獨歩せんのみと。是より一切酒色を斥けて、士卒と衣食を同くし、人を愛し、衆を容れ、其身を終るまで、操行を變せず。功名心も此まで至れば、道に合す。大王豈眞の英雄には非ずや。

英 雄 論

英雄たる者の宜く大に鑑みるべき所なり。

東洋古來可笑しき一成語あり。稱して「英雄色を好む」といふ。今に於ても流俗尙ほ往々此話を假りて、英雄を品隲せり。呵々、是れ草昧時代の人民が英雄性癖の一切を概見し得ず。僅に其眼前に依稀せる一端を捕捉して、之を狀し來りしのみ。殊に知らず、英雄なる者は、大を好み、名を好み、建設をも好めば、破壊をも好む。別ちて而して之を言へば、治術をも好めば、戰鬪をも好み、遠征をも好めば、土功をも好む。遊技も好きなり。田獵も好きなり。文學も好きなり。美術も好きなり。古の英雄は神仙まで好きなり。士を好みて、又女をも好む。酒を好むだけ、色をも好む。嗜まざる所なく、又好まずといふこと無し。

我知れる界に於ては、汲黯が漢の武帝に直言したりし所のもの、

高の理想に徇ふるに在るのみ。
 其の大士功を好むも、亦英雄性癖の一顯象なり。之を古史に
 徴すれば、直ちに以て六千七百載に溯るを得べし。其の最も舊
 くして、最も壯大なるものは、フアラオン時代に於ける埃及の
 建築に在り。彼諸ピラミッド中の最大なるケオツプス王の寢陵
 塔の如きは、其高サ百四十五米突、其基礎二百三十三米突に亘
 り、之に用ゐたる石材二百五十萬立方米突を算せり。他は是に
 由りて類推するを得ん。總じて古埃及の寢陵建築は分ちて兩期
 二種と爲す。其第一期は紀元前二千年頃より、四千七百年頃ま
 でに溯り、之を地上建物の時代と爲す。是等の建築たる、要は
 英雄の壯圖を記念し、天下後世をして之を瞻仰せしめんと欲す
 るに出でたるなり。今日此古國內に散在せる諸ピラミッドの如

英雄の性癖中、最も危険なるは、其の大を好み、功名を好む
 所より、動もすれば遠征を喜び、戦争を嗜むの點に在り。史家
 賴襄は天慶亂の一叛人興世王を叙して、「兇險にして亂を喜む」と
 いひたるが、兇險にして亂を喜む者は獨り興世王のみならず。
 謂ふ所の梟雄姦雄なる者は、比々皆是なり。生靈を荼毒し、人
 道に悖戾する、蓋し焉より甚しきは莫し。然れども遠征戦争、
 豈單に一人若くは一國の功名のみに屬するものならんや。暴を
 禁じ亂を遏むるも、亦之に頼らざる可からず。是に於て乎眞の
 英雄に待つ。孟子が齊の宣王の勇武を好むといふに對して、周
 の武王のそれを稱し「今、王も亦一たび怒りて、天下の民を安ん
 じなば、民は王の勇武を好まざらんことを惟れ恐れん」といひた
 るは、即ち是なり。要は拿破崙一世が所謂「本國の公善以上、崇

而して始皇の寢陵は、彼在位の日より鄴山を穿治せしめ、徒を役すること七十餘萬人、其陵中には宮觀を興し、天下の珍寶を收めて之に充て、其口には機弩矢を裝置し、敢て穿ち近づく者あれば、立ちどころに射殺す可からしめたり。斯くの如くして死後其棺を收め、併せて其通口を塞ぎ、上には異草奇木を樹る、居然たる一大山象を爲せり。是れ亦地下建物の一巨觀。

若し其れ英雄の創建せし壯大の寺觀宮殿に至りては、印度埃及巴比倫亞悉里希臘羅馬より、支那日本に互り、擧げて數ふるに違あらず。要、是れ英雄の好大名好土功の癖性に安徇したりしに外ならず。阿房の宮殿、楚人の一炬。三泉の寒灰、馬蹄の塵烟。寰宇の大より之を觀れば、溝中の子々がノへに過ぎず。然れども其の土功を喜ぶの心、雄大崇高の理想に發するもの

き、即ち是なり。其第二期は爾後の二千年間に亘り、更に地下建物時代の現出せり。是れ實にアラオン第十一朝以後に屬するものにして、當時の雄王は謂へらく、地上の諸大建築たる、壯觀は則ち壯觀なるも、後王之を破壊せば、雄圖一朝にして空しからん。寧ろ記念を地下に留め、天地と悠久を競はんには如かずと、是に於て乎或は巖山の下、或は厚土の底に大建築を興し、其工成れば、之が通口を密閉して、其痕跡を滅し去れり。近世に至りて發見せられたるラムセス二世三世の寢陵の如き、殊に其著名なるものなり。此他に發掘せられたるもの既に二十有餘に及べり。是れ皆古英雄の記念ならざるは無し。

支那に於て之に匹す可きは、秦漢時代の雄略の主が屢試みたる名山大嶽の封禪に在り。就中、秦皇漢武の擧を其最と爲せり。

て遺圖を繼ぎ、蘇西の運河、永く世界の交通を發く。始皇に於ても亦然り、彼一たび中華の爲に萬里の長城を建立すれば、爾後の二十二世紀に互り、億のみならず漢族の大民衆は、此厚壁の庇蔭に頼りて、北胡幾多の侵入を免れて活き來りしに非ずや。

歴山の帝業、太閤の覇圖、與に俱に忽焉たるも、アレキサンドリヤの一市永く大王の名を留めて、北阿屈指の貿易港となり、太閤の經營せし大阪府と、又其創意より現出せし江戸府とは、大日本帝國の二大中心となり、箇中の一府は、現代に至りて、八限知し大皇の大宮所とまでなりて、世界萬邦の船舶を此に朝宗するに至れり。斯世と、斯民と、俱に英雄に待たざるを得んや。

に至りては、世界の文運と人道の銷長に關すること、極めて大なり。夏の禹王、洪水汎濫の時に生れ、其父失敗の後を承け憤を發して、治水に従事し、經營實に十三年。漠々たる支那大陸を水底より救出し、謂ふ所の禹貢九州を拓創せり。爾後の四千載間に互り、兆京無盡の生靈をして其土の上に生々することを得せしめたる、豈大禹の功烈には非ずや。

埃及のラムセス三世及秦の始皇帝が一個の好大功名に徇へ、各地下の寢陵を興したるは、英雄の兒戲、言ふに足らざれど、其ラムセス王一たび生民の爲に創意し、亞細亞阿弗利加の地峽を切りて、紅海地中海の大水を通すれば、悠久の歲月と、兩岸の土沙と、交其蹟を埋めんと試みたるも、英雄の壯圖は終に滅せず。二千五百餘年の下、ヘルヂナンド・ド・レツセプスは臂を揮ひ

第二十一 英雄の性癖(三)

英雄色を好む……ヘラクレス・素盞雄尊・堯舜・以下古今
英雄の好色……女英雄の好色……加爾大王・水戸光圀
克己の大勇猛……英雄亦酒を好む……七分の哲理と
三分の詩味。

英雄の色を好むも、古來亦久しい哉。之を神人的英雄に觀れば、希臘のヘラクレスには、正后として、前にテープの王女メ
ガールあり。後にカレイドンの王女デジャーニールあり。又其の寵
幸せし所にはリヂーの王妃オムファールあり。ユーリート王の公

主イオールあり。ヘラクレスの殞落は正后デジャーニールが誤りて
被らしたる浸毒の御服に由りしと傳ふるも、當時大王の愛はイ
オールに移らんとしたりし時に在れば、殞落の事情も亦推想に
難からず。而して昇天の後に至りても、更に女神ベールと婚せ
しといふ。大王の多情も亦知る可し。

顧みて吾神人に視れば、素盞雄尊の后妃に、早く稻田姫及大
市姫あり。其御子大國主命に至りては、后妃として既に須世理
姫及八上姫あるが上に、尙ほ沼河姫多紀理姫神屋楯姫等の寵
を數ふ。是れ亦頗るヘラクレスと其性癖を同くしたまはずや。

支那に於ては、堯舜を肇國の祖聖人の首と稱す。其人の英雄
たりしや想ふ可し。堯舜に舜の爲すあるを知り、娥皇女英の二
王女を降嫁せしむれば、舜も敢て之を辭せず、善く兩妻に則れ

り。堯乃ち舜に政を委ね、終には帝位まで譲りしと。尙書載する所の二典の粉飾、事も莊重に見ゆれども、如何に草昧の世なればとて、與ふる者も、與ふる者なれば、受くる者も、受くる者なるなり。岳翁駟馬、與に俱に遺憾なく性癖を顯現したらずや。舜の野に在るや、鳥獸までも其徳に懐き、鳥雀群りて草を啄み、香象來りて耕を助けしと傳ふ。我聞く婦人の毛髮を綯ひて索とすれば、香象も爲に引かると云。願ふに香象は虞舜の徳に引かれて來廷し、又其處舜は娥皇女英の色に惹かれて來王したりしならん。

神代の英雄既に斯性癖を掩はず。人世のそれに至りて、愈益甚しきものあり。之を西方に觀れば、羅馬のカイザルアントニオ・オクタヴウスより、英國のクロンウエル・佛國の拿破崙一世

に至り、之を東方に察すれば、齊の桓公、晉の文公、漢の高祖及武帝より、隋の煬帝、唐の太宗に至り、更に之を吾國に顧みれば、源家の諸雄より、豊臣秀吉、徳川家康に至るまで、史上歴々其蹟を絶たず。

男中の英雄既に然り。女中の英雄も亦同じく此偏傾を免かれず。一たび思ひて漢の呂后、唐の則天武后に至れば、理解は自ら心頭に來り上るものあらん。張翼嘗て武后を論ず。其意を付度して、甚だ妙なり。

「人主、富は四海を有ち、妃嬪動もすれば千百に至る。后既に身は女主となれり。寵幸する所、數人に過ぎず。固より深く怪むに足らず。故に后初より之を諱まず。其意亦必しも之を諱まずして可なりとしたるが若し」と。

英雄の好色斯くの如くなる、上來既に述べたるが如く、是れ其絶倫なる精力の一妄用。已まんと欲して、已む能はざるもの歟。然れども其絶倫の精力を用ゐて、己に克ち、欲に克ち、美德を光耀せし英雄も亦又尠からず。今其數例を史上より呼ばん。十八世紀の初葉、瑞典の大王加爾十二世の勢威赫々として、露索丁三國の帝王聯合も、以て之に當るに足らず。就中露索王兼波蘭選王奧額斯得は勢窮まり、力屈し、坐して選王の王位を失ふの外なきに至れり。是に於て狡智の奧額斯得は一詭計を按じ、女色を以て加爾大王を盡惑せんと欲し、陰に旨をコンテス・コエニグスマルクに授けたり。コンテスの先は瑞典より出で、露索に在りても名門として推され、父兄相繼ぎて將軍となれり。コンテス其家に生れ、才貌當世に雙び無く、加之、文學に長じ、

是れのみならば荒淫の人、齒牙に上す可からずと雖も、「然も用才行政の大端に至れば、獨り其綱を握り、老に至るまで撓撼せず。陸贄は謂ふ。后、人心を收め、才俊を擢き、當時、知人の明を稱し、累世、多士の用に頼れり」と。李絳も亦言ふ、後の命官猥多なるも、開元中の名臣多くは其選に出でたりと。舊唐書本紀の贄にも謂へらく、后、官爵を惜まず、豪傑を籠して、以て自ら助く。一言の合ふあれば、輒ち不次に用ゐ、職に稱はざれば、亦廢誅少しも假さず。務めて實才眞賢を取りしと。然れば則ち區々たる帷簿の修まらざるは、固より其末節なり。人を知りて善く任じ、權の下に移らざる、女中の英主に非ずと謂ふ可からざるなり」と。武后及武後の亞流、此言を得て、枯骨に肉を生ずるならん。

外交に巧みにして、屢國際の秘局に當り、鬚眉の大使公使をし
て其の辣腕に驚倒せしめたり。是を以て當時歐洲の社會には、
北方のセミラミスとの稱あり。コンテス心に加爾の必擒を誓ひ、
先づ大王の功烈贊嘆の詩を賦して、遙に之を王の行營に寄献せ
り。彼女少時嘗て瑞典の宮中に事へたることありたれば、王も
夙に之を知れり。今其詩を得て、之を讀むに及び、其意頗る動
くものあり。以爲へらく、若し親しく彼を見なば、戀々の情な
きことを必せずと。既にしてコンテスは大王がリチュアニーの
行營に詣り、宰相ビペー伯に頼りて謁見を請ふ。ビペー伯入り
て王に奏す。王、事に托して許さず。次ぎて請ふこと再三なる
も、又聽かず。在ること數日、コンテス、王の毎朝馬を驅りて
散策するを聞き、次日、裝を凝らして、馬車に駕し、刻を計り

て、一徑に抵る。大王果して單騎出で来る。徑隘くして、車馬
交せず。コンテス滿面に媚を湛え、一揖して車を下り、二歩、
三步、將に馬側に近づかんとす。王も亦禮を復し、其馬を駐む
るの間、忽ち是れ北方のセミラミスなることを想起せり。王俄
に馬首を旋らし、前路を望みて鞭を揚ぐ。鐵蹄聲々、未だ數分
を出でずして、玉影早く林中に沒せり。コンテス茫然として失
ふが如く、彳立するもの焉を久くし、悄然として索逕に歸りた
り。
又吾水戸光圀の公子たりし際、嘗て祖母養壽院の邸に寓す。
紀伊大納言頼宣の女松姫も亦時に此邸に來往せり。光圀風姿颯
爽にして、夙に超群の思あり。松姫も亦容顏端麗にして、早く
聞秀の聞あり。侍人密に耳語して、以て天上一雙の鳳鸞と爲す。

頼宣、養壽院と二人ながら其相婚を希へども、幕府の制、三家の連姻を許さず。頼宣素より潤達の人、變通の道を按じ、養壽院に囑する所あり。光圀一夕離亭に在りて、書を講ず。忽ちにして微に剝啄の聲を聴く。出で、之を見れば、松姫なり。侍女推して室に上せ、履を返して走避し去る。室中只光圀と姫とのみ。光圀曰く、此暮夜に方り、令娘何ぞ獨り來る。姫席を撫して曰く、月明に乗じて庭を歩し、圖らず郎君讀書の聲を聴き、偶來り候せしなりと。光圀席を避けて曰く、暮夜の獨行既に宜しからず。況や我と令娘と同席此に坐するをや。我の講書も既に終れり。請ふ復りて本邸に入らんと。送りて養壽院の許に至る。光圀當時未だ男女の情を解せざるもの、如かりしと云。公後に左右に語りて曰く「我早く聖經を讀み、同姓は娶らざるの

義法を知れり。故に己に克ちたるなり。學ばざりせば殆ど危かりき」と。
加爾大王既に勇猛。義公に至りては更に大勇猛。漢の高帝、唐の太宗、之に連なる好色の諸英雄、皆其脚下に羅拜す可きのみ。
酒の好悪は人々の天稟なり。或は好み、或は好まず。然も十中の七八まで概ね之を好むが如く、英雄の多くも之を嗜みて、亦精力を其酒量に加ふ。「臣等死をだに且つ避けず。卮酒安んぞ辭するに足らんや」の語ある所以なり。是に於て乎好酒と好色とは相並びて、英雄の特癖を發揮し來る。曰く「酒飲む可し、兵用ふ可し」。曰く「醉ひては枕す美人の膝。醒めては握る四海

の權。論理の會するもの無しと雖も、事や豪放磊落に聞ゆ。是を以て古來豪傑の輩、動もすれば二者に沈溺して、一往還らず。是が爲に身家を失ひ、大事を敗る者、踵を數千載に接したり。心に雄大、崇高の理想ありて、之を當世に實現せんと欲する者の、深く大に戒む可き所なり。

然りと雖も、斯酒、斯色に、一分の妙諦なきにもあらず。抑、人間の心理は偏傾を免かれず。之れを孔子の言に聞け。曰く、「人は其の親愛する所に之きて辟し、其の畏敬する所に之きて辟し、其の哀矜する所に之きて辟し、其の赦惰する所に之きて辟す。故に好みして其惡を知り、惡みて其美を知る者は、天下に鮮し」と。即ち是なり。嘗て山鹿素行が「配所殘筆」を讀む。中にいふ、程朱の説を講ずれば、勃窣家とならんとし、老

莊の學を修むれば、放誕家とならんとす。乃ち飄然として自個の天真に復し、大道を天地の間に求めたりと。素行の英雄を以てして、尙ほ且つ此偏傾を免かれず。而るを況や其他をや。

人生の事を成就せんと欲すれば、衆心の一致を得るに在り。「英雄務めて將士の心を攪る」も、此一致を欲するに由るのみ。而して衆心の一致は、其相互の和協に在り。和協を助くるものは、即ち酒なり。酒其れ無かる可けんや。蠻人の部落より、文明の社會に至るまで、青麥高粱葡萄三鞭瑞穂の酒の流れ流る、所以なり。若し其れ色に至りては、心理の和なり。己を空くして一人に合するの情は、即ち千萬人に合するの情なり。心理の餘裕は、自ら此情趣より得來る可し。請ふ之を孟子に聽け。曰く「昔は太王色を好みて、厥妃を愛す。詩に云へらく、古公亶父、

來朝馬を走らせ、西水の濇に率ひて、岐山の下に至り、爰に姜女と、聿に來りて胥宇れりと。是時に當りてや、内に怨める女なく、外に曠しき夫なし。王如し色を好まば、百姓と之を同じくせよ。王たるに於て何かあらん」と。此意なり。「色好まざらん男は、玉の盃底なきが如し。飽かぬ心地ぞする」と兼好法師も亦之を言ふ。其底の餘りに厚くして、手に刺るも厭はしけれど、底の在らぬも、物足らず。寒鴉枯木に倚るの狀、是れ人生の趣には非ず。

之を要するに、七分の哲理と三分の詩味歟。是れ英雄の窟宅す可き難攻不落の金城たらん。呵々。

第二十一 英雄の必須

此人間社會に向ふ所のものは、綿々として絶えざる優劣遷善に在り。一言以て之を蔽へば、其の不息の進歩に在り。何となれば人類慶幸の増大は、托して箇中に存すればなり。是故に社會は彼自ら常に之を求めて已まず。然れども凡衆の職々たる、之を欲せざるに非ずと雖も、其智の淺薄なる、其力の微弱なる、之を求むる所以を知らず。是に於て乎英雄の提撕に待てり。請ふ試に之を思へ。希臘の文明煥乎たりしと雖も、亞歷山大王の出づる微りせば、彼が如く早く世界には光被せざりしならん。

羅馬の人民有爲なりしと雖も、愷撒の出づる微りせば、彼が如く夙に富強を致し、や否やを知らず。始皇一出して、東方の大陸始めて一統の大帝國を形成し、太閤一出して、二百餘年間の妖雲一朝にして快霧を見る。是れ皆其社會其國民の久しく庶幾して得ざりし所のものには非ずや。

是れ嘗だ帝王的政事的英雄を然りとするのみならず。他の宗教的哲學的科學的文學的等の英雄に於ても亦然り。善い哉ミル子の言や。曰く、「ニュートンにして若し斯世に出でざらば、世界は他のニュートンの顯はれ來るまで、空しく其ニュートン哲學を待たざる可からざりしならん」と。惟ふに吾人の崇尙するニュートンこれ無きも、一たびは必らず次のニュートン出づるの時あらん。然れども其の出づるは五十年の後歟、將た或は百

年の後歟。是れ未だ知る可からず。其の空しく待てるの間は、人世の進歩を無益に撓滞せしむるには非ずや。英雄豈之を崇尙せざるを得んや。

我近く微菌學の大家獨逸のコッホ博士と米國の富豪カルネギーとの際會に觀て、吾感興を禁せざるものあり。彼カルネギーや、其身貧賤より起りて、世界の一富豪となりたる者なり。其人天性貨殖の道に長じ、善く取る點に於て、固より萬人に傑出し、其の善く散する點に於ても、亦善く萬人に傑出せり。彼は嘗てコッホ博士が醫學上の大發明を爲し、斯學の上に將に一新时期を書せんとするを見て、未識の博士に五百萬馬克の大金を贈與し、其學の大成に資したることあり。明治四十一年の夏、博士吾國に來朝の途次、新約克を過ぎて、カルネギーを訪ひ、深く

謝意を致したるに、カルネギー之に答へて曰く、草昧の世に在りては、最も多く人を殺したる者、即ち英雄なりしも、今や世運文明に屬す。最も多く人を活かす者、即ち英雄なり。予は是を以て夙に博士が今世の英雄たることを知れり。故に聊か一封を寄贈して、以て博士研究の一端を助けしのみ。曠昔、吾青襟の頃、亦嘗て醫學に志し、ことあり。當時家貧にして、志業を達せず。中道にして之を廢止せり。故に博士事業の生民に影響するの洪大を想像し得るも、其委曲を領解し、且つ其趣味を玩味するを得ず。是をこれ遺憾と爲すのみ。予にして若し善く箇中の趣味までを玩味し得なば、贈遺獨り彼小額のみに止まらざりしなんと。

今此二人の會談に觀よ。恰も曹操、劉備の手を把りて、「天下

の英雄は使君と操とのみ」といひたるに似たらすや。博士が醫學的英雄たるは、寔にカルネギーの言の如くなるも、カルネギーが世界の公善に向ひ、思ひ切つて善く散する處、亦是れ富豪的一英雄たるを失はず。之を要するに、眞の英雄なる者は優化遷善を求めて已まざる。斯社會の「變形委員」なり。故に其業の何たるは、我問はず。此生を現代に托し、爲すこと有らんと欲するの士は、雄大崇高の理想を奮ひ、之を實現せんことを努む可きのみ。

此篇を草し了る時、隣邦大陸の大亂に遭へり。嗟乎此大亂何に由りてか發生せし。一には燕京人無きに由れり。二には此舊社會も其變形を求むるに由れり。漢高果して其中

に在る歟。明祖果して其裏に伏する歟。一世の人、今にして始めて眞の英雄の斯世に必須なるを痛感するらん。我是に於て乎吾述作の無用ならざりしを知る。吁筆を擲たん。

英雄論 (終)

附 録

文學的英雄

漢の司馬遷

初め我の英雄論を起草するや、意は各種の英雄を概観するに在りき。既にして身世の多故に會ひ、筆を帝王的・政事的英雄に絶てり。私に謂ふに、續稿期す可からずと。乃ち嘗て作る所の文學的英雄の一篇を此に收め、初意の一端を記念すと云爾。

其一

一たび思を東大陸の禹域に馳せよ。四千年來、此二十七萬方里の面積の上に於て、生々死々したる者は、其數幾百億兆京

たるを知らず。中に就きて、一人の身を以て萬世の極を立てたる者を求むれば、想界に周の孔子あり。政界に秦の始皇あり。史界に漢の司馬遷あり。若し葱嶺以東を限りて、古今の英雄を論じなば、我は此三者を推して、眞の英雄と稱せんと欲す。

何を以てか之を言ふ。曰く、此人間社會なるものは、悠悠遷々、断えず變遷を求めて已まず、又断えず變遷に勤めて措かず。而して英雄なる者は其變形の委員なればなり。是故にカーライルはいふ、神人的英雄あり。預言者の英雄あり。詩人的英雄あり。哲人的英雄あり。文學的英雄あり。帝王的英雄あり。孔子は其哲人的英雄なり。始皇は其帝王的英雄なり。而して司馬遷は其文學的英雄なればなり。

今其れ孔子の哲人的英雄たる、始皇の帝王的英雄たるを謂へ

ば、萬人皆首肯して唯々と言はん。獨り司馬遷に至りては、人々其史能を認めながら、或は己を沾らんが爲に、或は學統に拘するが爲に、其瑕疵を指摘して已まず。固より是れ蚍蜉の大樹を撼かさんと試みる者にして、大樹の根幹に微動をだに及ぼさるも、聚蚊の雷を爲せば、愚者往々疑惑を免かれず。我是に於て乎聊か愚者の蒙を啓かんと欲す。

蓋し惟ふに禹域の史學たる、單だ生面の記實に偏し、又統體の義例に泥み、表裏の透察、兩端の推敲に盡にして、廣き世界の斯學の前に視れば、固より未だ至善と稱するに足らざるも、其國の文明は、遠く埃及印度と曙光を競ひ、爾來綿々茲に四千載、内は一大陸の盛衰興亡を包み、外は四隣との接觸關係を絶たざれば、學理といふよりも寧ろ實驗、攻究といふよりも寧ろ

應用の上よりして、史家たるの資格に對し、眞確不易の定義に到達せり。「曰く才。曰く學。曰く識。此三長を具へざれば、眞の良史と爲すに足らず」と。言や甚だ簡單なりと雖も、其意は自ら彰然たり。才とは何ぞや。能文の謂なり。學とは何ぞや。博學の謂なり。識とは何ぞや。識見の謂なり。
更に擴げて之を言はん乎。古よりいふ、「言の文ならざる以て久しきに傳ふるに足らず」と。請ふ看よ、ホームルの泰西に稱せられ、左丘明の泰東に崇まれ、二千有餘年の久しきを経て、其詩史、其經傳の地に墜ちざるものは、彼是俱に名文たるを以ての故には非ずや。但し是等は上の上なるものなり。尙ほ其の下なる者、近き者に就きて之を謂はん乎。等しく我中古以來の史記なるも、野史の大に顯はれず、外史の獨り稱せらるゝものは、

飯田忠彦の文、頼襄の筆に及ばざるを以てに非ずや。
我嘗て歐洲に遊ぶの日、頗る吾感興に觸れたる一事あり。オーストリアの哲學は實在を旨とし、主張一に世道人心の上にならざる。是れ宛たる泰西の孔學派、其人をして孔門に在らしめば、必らずや顔回曾參の下に在らすして、子思孟軻の右に出づるものあらん。是を以て其教義は歐の全陸に擴がり、英國に入りて最盛を稱し、遠くは米の南北にまで及びたり。而もオーストリアの國佛蘭西に於て、今日多く聞ゆるあらず。然る所以を問へば、オーストリアの文章信屈牙にして、文學國民たる佛人の心情に痛觸せず。是を以て大に行はれずと。甚しい哉言の文ならざる可からざるや。
才即ち能文と相並び、之よりもより多く史家の頭腦に分量を

占めざる可からざるものは、學即ち博學なり。箇中の主人の史學たるは、固より論なきも、其門たるや、綜合史より、以て部分史に至るまで、何れも其れ相當に森羅萬象を包容するものなるが故に、博學に非ざれば、萬般の生事に應接し、之を理解し、之を玩味し、之を發揮し、之を顯彰するに足らず。而して史家に關く可からざる比較考證の如き、亦自ら此學中に含蓄せり。最後には識即ち識見なり。事相の見はるゝや、由りて來る所あり。又其の見はるゝ、必しも全豹を示さず。加之、見はるゝ甚だ顯著なるも、影響甚だ微々たるあり。見はるゝ極めて細小なるも、波及の極めて廣大なるあり。是れ眼前に生出せる一事一相、そのみを捕捉する者の能く知る所に非ず。是故に眞の良史たる者は、禪家に所謂形なきに視、聲なきに聽くの特能を具

へざる可からず。而して判斷も繋りて箇中に在り。批評も繋りて箇中に在り。創意も亦又箇中に屬せり。「才學識の三長を具へざれば、眞の良史と爲すに足らず」。語や簡なりと雖も、史家の本能を道破し得て、其定義も亦略盡せりと謂ふ可し。我、古今の史家を此前に視て、子長の最も三長に裕かなるを想ふ。彼を以て史界の英雄と稱するものは、即ち是を以ての故なり。

其二

司馬遷の傳完く備はらず。其の存する所は、「太史公の自序」と任安に與ふるの書あるのみ。後漢の班固漢書を修め、爲に一傳を立てたるも、其の言ふ所、亦前の自序と手書とを點綴したる

司馬氏の先は遠く少昊及顓頊より出でたり。顓頊の世には、南正重天を司り、北正黎地を司り、唐虞を経て、夏殷の際に至るまで、重黎の子孫相襲ぎて、天地を司り、周に在りては、程伯林甫最も著る。宣王の時、其官守を失ひて、司馬氏となり、世々周史を典れり。惠襄二王の間、周室亂る。司馬氏乃ち去りて晉に適き、其後子孫諸國に分れたり。其の衛に在る者は中山の相となり、趙に在る者は劍論を傳ふるを以て顯れたり。蒯聵は其後なり。秦に在る者は司馬錯及其孫司馬靳皆將軍たり。靳の孫司馬昌は始皇に事へて、主鐵の官となれり。而して同族蒯聵の玄孫司馬卬は楚の將となり、項羽覇業の際殷王に封せられ、後漢に歸せり。

昌の子司馬無澤漢の市長となり、無澤の子司馬喜五太夫とな

に過ぎず。其餘の事、一も後世に傳ふる無し。是れ實に憾む可きなり。然りと雖も、斯くの如きは獨り遷のみならず。地中海の彼岸に於て、ホーメルといへば、天下之を知らざる者なきも、イオニーの七府は今に至るまで其生地を争ひて已まず。それだけ彼が何れの年に生れ、何れの年に死したるかをも知らず。僅に彼が基督紀元より十世紀前に希臘に存在したる可きを意識すのみ。遷に對しても亦同概あり。但だ彼イリヤードとオデッセーの二篇がホーメル不朽の生命なるが如く、史記の一百三十篇に司馬遷不死の神靈は嚴存せり。此に公の自序と手束とに據り、之に參するに遺著の全篇及固の立傳を以てし、傍ら百家の説に考へて、太史の生涯、手腕及其斤量を槩觀せん。

り、喜の子司馬談始めて漢の太史公となれり。是れ即ち司馬遷の父なり。司馬談夙に天官を唐都に學び、易を楊何に受け、道論を黃子に習ひ、樹立する所あり。武帝の建元より元封の間に仕へたり即ち是れ武帝紀元の前彼の黃子が鞏固と與に君王の前に湯武代立の際を論ずるを視るに、湯武は共に受命に非ず、乃ち桀紂を殺して自立したるなりと言ひて、忌憚する所あらず。其の獨立の意見を有したる、是を以ても察す可し。司馬談是等の人々に師受し、更に自ら一家を成せば、其造詣想ふ可きものあり。

司馬氏數世夏陽に家す。今の山西省此地方たる、黃河北より來り過ぎ、大禹の鑿ちたる龍門は方に其路に當れり。司馬遷は實に其下に生れたり。遷少にして河山の陽に耕牧す。十歳にし

て古文を誦せり。年二十にして、南のかた江淮に遊び、會稽に上り、禹穴を探り、九疑を闚ひ、元湘に浮び、更に北のかた汝酒を涉り、業を齊魯の都に講じつゝ、孔子の遺風を觀、鄒嶧に郷射せり。去りて蕃薛彭城に厄困し、梁楚を過ぎて、家に歸りたり。是に於て仕へて郎中となる。使を奉じて西のかた巴蜀以南を征し、南のかた邛笮昆明を略し、還りて天子に報命せり。顧みるに夏陽は即ち秦の故地、其俗の強悍想ふ可し。遷其間に生れて、耕牧に従事す。彼が夙に剛健の空氣に生長したりしや知りぬ可し。況や龍門は禹鑿の跡。黃河汨々、此門より來る。彼が胸間の磊塊に濺ぐもの如何ぞや。且つ遷十歳にして善く古文を誦す。是れ天性殊絶の兒なり。而して其父談の學は、陰陽儒墨名法道の六家を兼該し、又其傍ら伏生に師受する所あり。

遷の大夙に此際に樹立しつらん。而る後ら天下を遍歴して、名山大川を周覽し、鄒魯に入りては、孔子の遺教に接し、齊楚に遊びては、一時の豪俊に交れり。又而る後ち使命を千里の外に奉じ、戎馬に蠻夷の境に從へり。是れ皆擧りて彼の史感と文心とに入らざる無し。宜なり其文の佚宕豪爽、四千歳間に卓絶することや。

我聞く、希臘のヘロドタス少にして修史に志あり。夙に希臘の國內を周遊し、壯なるに及び、東のかた小亞細亞に入り、南のかた埃及を訪ひ、而る後ち歸りて史筆を著け、後世永く「歴史の父」と稱せらる。彼司馬氏や、周史の奇、司馬談亦漢家の太史となる。遷の夙に禹貢の九州に遍歴し、至る處其地の古今文物に徴見したる、亦た安んぞ他日修史の資を取りたるに非ざる

を知らんや。人若し此言を信せずば、請ふ之を其一百三十の遺篇に看よ。某國の史實は、遷之を其地の某々に問ひ、某都の故墟は、遷嘗て自ら往訪せりといふの類、曾に二三のみならず。彼が用意の在りし處、亦察す可きには非ずや。彼岸の學者多くは此の見知らず。蘇轍の明を以てすら、遷文の疎宕にして奇氣あるは、周覽交遊の致す所とのみいひて、其他に及ばず。恢なる哉。吁、彼れヘロドタス、是に由りて泰西「歴史の父」となり、司馬遷亦又是に由りて泰東「歴史の父」となれり。英雄の見る所、東西其節を合せたるが如し。後の歴史地理を言ふ者、其れ遷を尸祝せざる可けんや。

其三

元封元年元封元年。武帝始武帝始めて漢家の封漢家の封を建て、東巡東巡して泰山泰山を封封す。當時當時に在りては、是れ實實に一代の大典一代の大典なり。文武百官文武百官悉く車駕車駕に扈從扈從し、儀禮儀禮の盛盛なる、前古前古に無無き所所。而して封禪封禪、元元、天官天官の司司る所所なるに、司馬談司馬談身身太史太史に命命として、與りて從事從事するを得得ざりしかば、悲憤悲憤疾疾を爲爲して、死死に瀕瀕せり。司馬遷司馬遷適適功功、管管、昆昆、明明を略略して還り、談談に河洛河洛の間間に見見ゆ。談談其手其手を執り、泣泣きて曰曰く、余余が先先は周室周室の太史太史なり。上世上世より嘗て功名功名を慮慮、夏夏に顯顯し、天官天官の事事を典典れり。後世後世中衰中衰して、予予に絶えん乎乎。汝復汝復た太史太史とならば、則ち吾祖吾祖に續續げ。今天子今天子千歲千歲の統統を接接ぎ、泰山泰山を封封じたまふに、余余從行從行を得得ず。命命なる哉哉。余死余死なば、汝必汝必らず太史太史とならん。太史太史とならば、吾吾の論著論著せんと欲欲し、所所を忘忘るゝなけれ。且且つ夫れ孝孝は親親に事事ふるに始始まり、

君君に事事ふるに中中し、身身を立つるに終終る。名名を後世後世に揚揚げて、以て父母父母を顯顯すは、是れ孝孝の大大なる者者。夫れ天下天下の周公周公を稱稱誦誦するは、其其の能能く文武文武の徳徳を謳謳歌歌し、周邵周邵の風風を宣宣し、太王太王、王季王季の思慮思慮を達達し、爰爰に公劉公劉に及び、以て后稷后稷を尊尊ぶを言言ふなり。幽厲幽厲の後後ち、王道王道缺缺げて、禮樂禮樂は衰衰へたり。孔子孔子舊舊を修修め、廢廢を起起し、詩詩と書書とを論論じ、春秋春秋を作作れば、則ち學者學者今今に至至るまで之之に則則れり。獲麟獲麟より以來以來四百餘四百餘歳歳。而して諸侯諸侯相相兼兼ね、史記史記放絶放絶せり。今漢興今漢興りて、海内海内統一統一し、明主明主賢君賢君忠臣忠臣義義に死死するの士士ありて、余太史余太史となりながら論載論載せず。天下天下の史文史文を廢廢せり。余甚余甚だ焉焉を懼懼る。汝其汝其れ念念へやと。遷遷俯首俯首流涕流涕して曰曰く、小子小子不敏不敏なれども、請請ふ悉悉く先人先人次次する所所の舊聞舊聞を論論じ、敢て闕闕がざらんと。幾幾ばくも無無く談卒談卒す。其後其後ち三歳三歳にして、遷太

史令とはなれり。
案ずるに、司馬談の卒したるは、元封元年に在り。後ち三歳にして、司馬遷太史令となるといふ。其歳の元封三年に屬するや知りぬ可し。遷自ら序して曰く、遷の太史令となるや、史記を石室金匱の書に紬し、五年にして、太初元年に當る。十一月甲子朔旦冬至、天歴始めて改まり、明堂に建て、諸神紀を受くと。石室金匱は皆漢家圖書の藏まる處。遷此裏に入りて、史料を參考すること五年。而る後ち始めて茲に筆を著けたるなり。蓋し彼の抱負たる、可笑しきまで壯大なり。彼は思へらく、周公卒してより、五百歳にして孔子あり。孔子の卒後、今に至りて亦五百歳。能く明世に紹ぎ、易傳を正し、春秋に繼ぎ、詩書禮樂の際に本づくある、小子何ぞ敢て譲らんやと。是時に至

るまで禹域には未だ一貫の成史あらず。司馬遷乃ち天地を囊括し、古今を網羅せんと欲し、其大系としては、五帝より、夏殷周秦を経て、漢の武帝に至るまで、爲に本紀を作り、春秋以來の列國及巨室の爲には、世家を著し、殷周秦漢の賢豪士大夫の爲には、列傳を立て、更に年代を統紀せんが爲には、年表を製し、文物制度を叙べんが爲には、別に八書を述べたり。其が爲に苦心するもの復た七年にして、偶々李陵の禍に遭へり。遷の自に於て其文を論次すること七年にして、太史公、李陵の禍に遭へり。史記の記事天漢に推せば、正に天漢三年に當れり。班固の司馬遷傳にも、七本には其文を論次し、十年にして李陵の禍に遭ふに作る。是れ確として誤りなり。
李陵は所謂漢の飛將軍李廣の孫なり。善戰亦乃祖の風あり。天漢二年、武帝、匈奴征討の軍を發し、貳師將軍李廣利をして

騎三萬を將ゐて、酒泉より出で、右賢王を天山に撃たしむるや、帝、李陵に命じ、輜重を將ゐて之に従はしめんとす。陵固より氣を負へり。叩頭して、別に一隊に當り、蘭于山の南に出で、單于の兵を分たんことを請ふ。帝、騎の屬す可きもの無きを憂ふ。陵が曰く、臣が將ゐる所は皆荆楚の勇士なり。騎を事とする所なけん。臣願くば少を以て衆を撃ち、單于の庭に涉らんと。帝壯として之を許し、彊弩都尉路博德をして半道より陵が軍を迎へしむ。博德言を左右にして合せず。陵乃ち歩兵五千を以て、居延より出で、北行三十日にして、浚稽山に至り、單于が八萬の大軍に會し、惡戦十餘日、敵を殺すこと算なく、幾んど單于を獲んとしたるも、敵軍日に加はりて、我に後繼なく、陵の左右刺す所の者僅に十餘人に至る。陵嘆じて曰く、面目の以て陞

下に報する無しと。遂に降れり。報到るや、帝怒ること甚しく、群臣に問ふ。群臣皆陵を罪す。帝猶ほ決せず。太史令司馬遷を召して之を問ふ。帝の其人を重んじられたるや、亦知る可し。遷乃ち對へて曰く、陵や親に事へて孝。士と與にして信なり。常に奮ひて身を顧みず。以て國家の急に殉ふ。其の素より蓄積する所、國士の風あり。今事を擧げて一たび不幸なれば、軀を全くし妻子を保するの臣僚、隨ひて其短を媒蘖す。誠に痛む可きなり。且つ陵、歩卒を提ぐる、五千に満たずして、深く戎馬の地を蹂み、數萬の師を抑ゆ。轉鬪千里、矢盡き、道窮まり、士空拳を張りて、白刃を冒し、北首争ひて敵に死せり。人の死力を得たること、古名將と雖も、是に過ぎじ。身陷敗したりしと雖も、然も其の摧敗する所、亦

天下に暴すに足れり。彼の死せざるは、宜く當を得て漢に報せんと欲するなるべきのみと。上の怒を犯して救解に力めたり。既にして貳師の軍還る。帝其功少きを暗て、李陵が後距たらざるに由ると爲し、益怒り、謂へらく、司馬遷誣罔、貳師を沮み、李陵が爲に遊説すと。命じて遷を腐刑に處し、之を蠶室に下したり。司馬遷自ら李陵の禍に遭ふと言ふものは、即ち是なり。是れ實に天漢三年中に在り。

其四

西漢の世、名節を貴び、刑を卿大夫に上せず。自盡を賜へり。司馬遷之を論じて曰く、其次は體を誦して辱を受く。其次は服を易へて辱を受く。其次は木索に關がれ、箠楚を被りて辱を受

く。其次は髻髮を髻られ、金鐵に嬰りて辱を受く。其次は肌膚を毀たれ、支體を斷たれて辱を受く。最下は腐刑なり。極まれりと。腐刑の最侮辱刑たるや察す可し。是れ侗にして氣を負へる遷の能く堪へる所ならんや。遷他日其友任安に書を與へ、尙ほ其生命を刑餘に存せし所以を陳ぶ。中に曰く、僕怯栗にして苟活を欲すといふとも、亦頗る去就の分を識れり。何ぞ自ら縲繼の辱に湛溺するに至らんや。且つ夫れ臧獲婢妾だに、猶ほ能く引決せり。況や僕の已むを得ざるが若きをや。隠忍苟活して、糞土の中に函されて、而も辭せざる所以の者は、私心の盡さざる所あるを恨み、世を歿するまで文采の後世に表れざるを鄙とすればなり。古者富貴にして名の摩滅する、記するに勝ゆ可からず。唯侗非常の人のみ焉を稱せらる。蓋し西伯は拘は

れて、周易を演ぶ。仲尼は扞して、春秋を作る。屈原は放逐せられて、乃ち離騷を賦す。左丘は明を失ひて、厥に國語あり。孫子は脚を骸せられて、兵法修列せり。不韋は蜀に遷されて、世に呂覽を傳ふ。韓非は秦に囚はれて、說難孤憤あり。詩三百篇、大氏は賢聖發憤して爲に作る所なり。此人皆意の鬱結する所あり、其道を通ずるを得ず。故に往事を述べて、來者を思ふなり。左丘明が目なく、孫子が足を斷たるゝが如きに及びて、終に用ゆ可からず。退きて書策を論じて、以て其憤思を舒べ、空文を垂れて、以て自ら見せり。僕不遜、近く自ら無能の辭に託し、天下の放失せる舊聞を網羅し、之を行事に考へて、其成敗興壞の理を稽へ、凡そ百四十篇、亦以て天人の際を究め、古今の變を通じ、一家の言を成さんと欲す。草創未だ就らず。適

此禍に會す。其の成らざらんことを惜み、是を以て極刑に就きて、慍色なし。僕誠に已に此書を著さば、之を名山に藏し、之を其人の通邑大都に傳へなば、即ち僕前辱の責を償ひて、萬變せらるゝと雖も、豈悔あらんや。然も此れ智者の爲に道ふ可く、俗人の爲に言ひ難きなりと。子長の本領是に於て乎見る可く、其志亦真に悲む可きなり。初め遷の獄に下るや、其家貧にして財賂なく、以て自ら贖ふ能はず。人々上臆に觸れんことを畏れ、交遊救はず。左右親近亦爲に一言を出さず。遂に腐刑に陥れり。後ち帝頗る感悟する所ありし歟。遷を擧げて中書令と爲す。尊重せられて職に任せしと云。其の何れの歳に終りしや、永く傳はらず。然れども彼が任安に與へたる書中に「僕、先人の緒業に頼り、罪を鞏轂の下

に待つを得るもの二十餘年といふに視れば、武帝の征和年中まで、其人存して漢帝に仕へたるや必せり。

是に至りて、史記の記事何れの年紀までを包括するや。又其成稿何れの年月に於てし、やを回顧す可し。蓋し惟ふに、司馬遷西南夷に於てし、修史の遺命を其父司馬談に受けたるは、元封元年に在り。此歳一角の獸の廷に至るあり。武帝以て麟の瑞と爲して、泰山を封じ、元封と改元せり。而して司馬父子が修史の業たる、意は孔子の春秋に繼ぐに在りて、春秋の筆は獲麟に絶たれたれば、遷亦之に倣はんと欲したり。其自序の初に「往事を述べて、來者を思ふ。是に於て乎卒に陶唐以來、麟止に至るまでを述ぶ」といふもの、以て徴す可し。是れ其一なり。

既にして彼の思想に一小變化を來しつらん。彼はいふ「父卒して三歳にして、遷太史令となる。史記を石室金匱の書に紬す。五年にして太初元年に當る」と。是れ遷が修史準備の時期たるなり。而して此歳十一月甲子朔旦冬至、天歴始めて改まり、明堂に建て、諸神、紀を受けたり」と。是れ亦記念す可き一時紀ならずとせず。且つ此に至るまでの過去五年間、武帝の外征は益振ひ、内外の生事、後世に傳ふ可きもの、一にして足らず。是に於て乎彼は史筆を此まで著けんと思ひつらん。彼が自叙傳の最後に「余、黃帝以來、太初に至るまでを述歴して、百三十篇に訖る」といふもの、以て見る可し。是れ其二なり。

班固、司馬遷傳を立つるに及び、史記の包容する所を擧げ「司馬遷左氏國語に據り、世本戰國策に采り、楚漢春秋を述べて、

其後事を接し、天漢に訖るといふ。是れ遷が天漢三年李陵の禍に遭ひ、太史を罷められて獄に下りたるに由りて、爾か云ひたるならんも、遷自身亦太初元年以降此歳に至るまで七年間の生事をも放棄し得ざりしを想ふ可し。是れ其三なり。

遷や既に天漢に敗れて、太史を退き、班固亦從ひて其史記天漢に訖るといふに據り、後世の學者皆遷の文字を天漢三年に止まると爲し、記中其後の事を屬するものを擧げ、一併に後人の狗尾接貂と爲さんとす。是くの如き觀を爲さば、遷が任安に與ふる書中に「草創未だ就かず、適此禍に會す。其れの成らざらんことを惜み、是を以て極刑に就きて、愠色なし。僕誠に已に此書を著はさば、之を名山に藏せん」といへるを如何す可き。是れ其四なり。

要、太史令の本職其のものは、諫遷父子が志したる所の古今の修史に非ざれば、修史の擧が其人と相俟ちて、自ら一家の業たるや、知りぬ可し。武帝は單だ之を嘉みして、之を公認せられしのみ。否らざれば、一旦其職を退きながら、尙ほ其業を繼續し、書成るの日正本を名山に藏し、副を京師に留むるが如き、任意の事を允されんや。

惟ふに史記が著者の言の如く、太初に訖られたりとせば、恐らく是れ本史の本系たる本紀の謂ならん。惜い哉孝武本紀關けて傳はらず、之を徵するに由なきのみ。其餘の列傳に至りては、管に班固の所謂天漢に訖らざるのみならず、其事の關係如何に由りては、太始若くは征和の間まで及びたるならん。傳中處々に之を徵す可きもの尠からず。現に匈奴傳には李廣利の匈奴に

降りたるをいふ。其降年に就きては、二説あるも「貳師其家巫蠱を以て族滅せらる。因りて衆を并せて匈奴に降る」といひ、衛青傳にも亦衛趙二氏同じく巫蠱に坐して族せられ、永く榮爵を失ひたるをいへり。我其の必しも後人の追加に非ざる可きを思ふ。或はいふ、史記の成りたるは、武帝の征和三年に在りと。未だ其據を知らずと雖も、或は其れ幾からん乎。是れならば基督紀元の前九十年、全く茲に二千載を経たり。而して其史は完存して、葱嶺以東の天地に布けり。偉なる哉。

其五

今此史記に就きては、言ふ可きもの、枚舉に遑あらず。遷の時に至るまでに、書易春秋左傳國語世本戰國策楚漢春秋より、

公私の簡冊の存するありとはいへ、一人の手を以て之を囊括し、帝王には本紀を作り、公侯には世家を叙べ、賢士大夫には列傳を立て、加之、禮樂律、曆天官封禪河渠平準、各一科の學乃至一代の洪業に對しては、之が書を修むるもの、遷の精力、創意、博洽、手腕、共に古今に殊絶するものあり。爾後の二千載間を通じ、其本國禹域は論なく、南は安南、北東は朝鮮、東は我日本に亘り、史家といふ史家、歴史といふ歴史、遷の矩矱を奉せざる者、其れ果して幾何あるや。是れ我が稱して「歴史の父」とし、史界の英雄と爲す所以なり。唯だ其の始を爲す者は、力を爲し易からず。史中の事實に往々疎謬ある、是れ固より免かれざる所のみ。其後ち班固漢書を修め、其書類る詳密と稱せらる。然れども其範域は單に東漢の

一代に止まれば、力を爲す甚だ易く、且つ其體制一に遷の成例に倣ひ、一奇を見ず。加之、其著筆果して如何ぞや。試に司馬遷傳を看よ。太史公の自序を借り來り、之に任安に與ふるの書を點綴したるのみ。偶史記の成年を擧ぐれば、天漢に訖るといふに過ぎず。其斤量、其手腕、之を奈何ぞ子長の前に抗禮することを得んや。

我、子長の本紀を作るを見るに、後世史家の義例に拘りたるが如くならず。抑春秋の義例、善は則ち善なり。然れども彼が如き易姓革命の國に於て、極めて嚴正に篡奪者を斥けなば、殷湯周武も帝王とするを得じ、而るを況や其而下に於てをや。而も帝王の地位に在りて、帝王の業を立つる者は、事實に於ける帝王なり。遷は乃ち漢家の世に在りながら、漢祖の敵たる項王

をも、之を本紀に入れ、又次ぎに漢家を叙ぶれば、異姓の呂后をも本紀に收む。名分論者は目を眩り、唇を反さん歎。然れども今日露國史を讀みて、彼得大帝の次に、加多隣女帝を認むるあらば、何ぞ呂后本紀を異しまん。我は寧ろ子長の卓見に與みしなん。

班固の遷を賛するや「其の涉獵するもの廣博にして、經傳を貫穿し、古今に馳騁し、數千載の間に上下せり。則ち以て勤めた」といふもの、衷心私に服するものあるを見る。然も之に次ぎて「其是非頗る聖人に繆れり。大道を論すれば、則ち黃老を先にして、六經を後にす。遊俠を序ぶれば、則ち處士を退けて、姦雄を進む。貨殖を述ぶれば、則ち勢利を崇びて、賤貧を羞ぶ。此れ其の蔽はるゝ所なり」と。固や多く己の量を知らざる者のみ。

遷父子が六家の學を講じ、其要旨を論ずるを味へば、父子の卓見千古に振へり。遷や特に孔子を崇信せり。其の孔子を叙べて、世家に列せしが如き、一面は世家なるが故に世家としたる可きも、一面には是を用ゐて確かに敬意を表せしなり。唯だ其流派の儒學を成すや、禮儀三千威儀三百に捕へられ、就中、國の道に至りては、寧ろ黃老の尙は大本第一義を忘れざるの勝れるに加かず。遷等の黃老に取れる所は、此に在り。近世英國に史家シーレーの出づるあり。英國擴大論を著して、一世に顯れたるが、其旨半は黃老に合せり。其他天官には陰陽を取り、個人主義には墨説を棄てず。名分法制には名法を廢せざるに至り、彼等は二千載の上になりて、二千載間の文明を重ねて、其下今日の世界を支配せる今世的思想と契合せり。偉とし大とし

崇せざるを獲んや。獨り憐む、禹域の二十世紀間、人其明を奪はれて、孔子を木偶にし、硜々石の如き儒學に縛せられ、偉大なる漢代の意氣を失ひ、陵夷今日の清國とはなれり。悲い夫。遷や既に彼が如き洪思あり。隨ひて胸間優悠取捨の自由あり。故に孔子を尊ぶを知るも、時ありて乎孔子大賢と雖も、時に合はずといひて、必らずしも聖人とのみ呼ばず。堯の創業垂統に服するあるも、事實を直筆すれば堯や業を始めて成らず。禹を待ちて始めて完しといひて、古文尙書の粉飾を斥けり。何ぞ況や遊俠及貨殖の諸傳に於てをや。治道明ならず、姦宄道に横はれば、巖穴の高士の以て獨を善くする者よりも、市井の遊俠の權貴を挫くを、寧ろ多とす可し。貨殖は則ち富強の本、人生慶幸の大半は繋りて此に在り。遷が貨殖の序論を讀め。鑿々經濟

の要旨に合せり。善く讀む者、彼の學識に首肯せんのみ。
 若し其れ小心翼々たる者は、刺客傳に至りて、駭心驚悸せん。
 抑民に乖亂あれば、國家には即ち國擊の權あり。政府其政を失
 ふ時は、人民には則ち革命の權あり。兩權並び存し、國乃ち長
 久ならん。其次は權勢道に當り、正義枉屈して伸ぶるを得ざれ
 ば、刺客劍を按せざるを得ず。是れ亦天地間時ありて無かる可
 からざる所の者、子長の筆墨、後人を老倒せず。
 終りに將に一言せん。遷の崇尙、其れ何の處に歸宿する。
 曰く伯夷傳は實に七十列傳の劈頭に在り。彼れ其夷齊兄弟や、
 父の遺志を成し、友子の情を全くせんと欲すれば、孤竹の封國
 を擲ちて顧みず。篡奪の暴舉を遏めんと欲すれば、羣々乎たる
 二人の兄弟、成周十萬の大軍の前に立ち、武王品望と論争する

を避けず。而して天下皆周を宗とすれば、首陽に隠れて、採薇
 を歌ひ、「以暴易暴兮。不知其非兮」といへり。今の世に於て一に
 其歸趣を同じく、暴對暴を痛斥して、此五世界の權道
 を崇尙する帝王將相大統領を警醒せんと試みる者、獨り莫斯只
 比八十の老叟トルストイ一人あるのみ。其れをして本傳を讀ま
 しめなば、三千四百載の上に、冥契せる親朋夷齊に接し、又二
 千載の前に、會心の文學子長を獲たるに感泣せん乎。

附 錄 終

明明明明明
治治治治治
四四四四四
十十十十十
四四四四四
年年年年年
十十十十十
月月月月月
廿廿廿廿廿
二二二二二
日日日日日
六六六六六
版版版版版

明明明明明
治治治治治
四四四四四
十十十十十
五五五五五
年年年年年
一一一一一
月月月月月
廿廿廿廿廿
七五七五七
日日日日日
十十十十十
二二二二二
版版版版版

英雄論與付

正價金壹圓



著 者 福 本

發 行 者 伊 東 芳 次 郎

印 刷 者 山 田 英 二

印 刷 所 博 文 館 印 刷 所

發 行 所

東 京 市 神 田 區
鍛 冶 町 八 番 地

電 話 本 局 八 八 四 番
振 替 東 京 一 七 一 番

東 亞 堂 書 房

東 京 市 小 石 川 區 久 堅 町 百 八 番 地

東 京 市 小 石 川 區 鍛 冶 町 八 番 地

東 京 市 神 田 區 鍛 冶 町 八 番 地

誠

伊藤痴遊先生著

新刊 西郷南洲外編

僧月照

中判美裝全一冊
約三百八十頁
正價六拾五錢
送費六錢

「大君の爲めには何か惜しからむ、薩摩の瀬戸に身は沈むとも」と、一首の和歌に憂國の赤誠を留めつ、西郷南洲翁と相操し、波間の月影を碎きて身を海に投じたる傑僧月照は、抑も如何なる人物ぞ。嗚呼！薩摩の月は變らず、御前崎の浪は昔乍らの響を傳へて、徒らに行人の袂を絞らしむ。實にや月照を度外しては幕末維新の歴史を語るべからず。著者の『西郷南洲外編』として本書を成せるもの、實に故なきにあらざるなり。取材の多岐多方面にして、叙筆の趣味津々たるは著者が獨得の壇場！一讀眉軒り、再讀眦を決して起たしむるの概あり。近時出色の痛快文字也！

●東亞堂書房創業第七週年紀念出版●

好評 參版

日南集

菊判洋裝優雅
全一冊六百廿頁
寫真版數葉挿入
正價貳圓
送費拾貳錢

當代の達人福本日南先生の
一大達觀錄

烈々として霹靂の如く、奔湃として天馬空を行くの概あるは日南先生の文と想とにあらざるや。本書、孟子論あり、人道觀あり、無政府主義論あり、大學教育觀あり、橋本左内、西郷南洲、乃木希典、市川團十郎、淺井忠、原敬、クロバトキン、カアネギ、コツボ、エミユールゾラ等の人物月旦あり。英雄の典型を談じ、英雄崇拜論を鼓吹し、英雄の一章に我が武士道の眞髓を説き及しては一讀儒夫を駭起せしめ、九州史の研究、古史の三事實、上世の面影等を縱横博議しては骨董的史學者輩をして後へに瞭若たらしむ。所論警拔、奇趣横溢、眞に空前の熱烈文字也。

福日本南先著

●見よ六寸の掌上に秀吉、家康の二傑を戯弄せし
大怪雄が活殺自在の快手腕を！

大好評
忽三版

黒田如水

黒田侯爵肖像 及 甲冑
家什物 箱入
コロタイプ 寫眞版 挿入
書判 綴り 箱入 極美本
正價 壹圓 五拾錢
送費 十 二 錢

昔者、豊太閤嘆じて曰く、我れ大事に臨み、大體に會し、往々智謀き、謀屈し氣息閉塞の時に當り、計を如水に問へば、坐決立斷、未だ曾て滯せしむ非ず。而て其計たるや、匪我謀謀慮せしもの、愈表に出づ。且つ人となり、而も今や日南先生、其の愚厚の史眼を放ち、豪爽、奔泉の如き快筆を揮て、遺蹟大閤の「豐臣」なりし我が將軍の極めて敬慕に當める一言一行を活寫す、獨り有益新奇なる史上の諸事眞を發見せしむるのみならず、又以て人物、鐵線と絶好の香横たり、こゝに愛賞を賜へ。

大好評
忽六版

直江山城守

菊列全一冊 綴り 箱入
コロタイプ 繪 二葉 挿入
美術版 口繪 二葉 挿入
正價 壹圓 貳拾錢
送費 八 錢

（國民新聞） 關ヶ原一戰の黒幕として豊臣兩時代變轉の機を其掌上に弄したる直江城守の面目は日南氏の筆無碍なる才筆と、精透なる批評眼とによつて殆んど遺憾なく描盡せらる。擒縱自在、史壇近來の快著也。
（萬朝報） 直江城守の一生は飽くまでも清く高し、日南これを日本男兒の典型として天下に紹介す、行文烈々、字々火を噴く、痛切の書なる也。
（やまと新聞） 眼卓抜、筆鋒鋭、其真面目を活寫し來りて更に秀吉、家康、三成、政宗、氏郷等一代の雄傑に對する交遊、運命の軌跡を採り、痛切に徹せんとす。
（大阪毎日） 茶椀を知らんとする者、豊臣徳川時代の人文形勢を知らんとする者の必ず讀むべきもの。
（大阪朝日新聞） 當時第一等の人物なる直江山城守兼續の事蹟は此書に依つて十二分に傳へられたり、愚厚の筆致と燦爛の觀察とは、頭腦に於ける快文字なり。

●著者本書の巻頭に叫んで曰く「自ら視てコンマ以上と爲し及コンマ以上たらんと欲する者は男兒中の眞男兒兼續其人の行實に察せよ」と

●天下一品の才人の手に成れる

天下一品の才人傳！

伊藤 先生新
痴遊 先生著

陸奥宗光

陸奥伯 傳
大判 美裝 三百七
正價 九十五錢
送費 八 錢

一代の名物男、制刀大臣陸奥宗光伯が光彩陸離たる奇生涯と、奇骨稜々の偉人格とを活寫し、配する所、坂本龍馬あり、後藤象次郎あり、木戸、岩倉、勝、星、伊藤、井上の諸傑あれば、血に泣くの佳人あり、忽にして奇峰亂立、忽にして大河汪洋、忽にして怒濤澎湃、忽にして天地晦冥、一たび本書を緝く者、誰か骨鳴り、肉躍るを禁せむや。眞に是れ小説よりも奇なる大立志傳。

伊藤 先生新
痴遊 先生著

陸奥宗光 續編

近刊印刷中

誰れが讀みても面白く—誰れが讀みても有益なる—

「著者が得意の名士逸話！」

伊藤 先生著
痴遊

快傑傳

ポケット入洋装
箱入美本全一冊装
正價 壹圓
送費 八錢

乞ふ見
よ本書
内容の
如何に
趣味津
々たる
かを！

- (1) 怪頭 山 満
- (2) 桂 小五郎(木戸孝允の壯年時代)
- (3) 板垣死すとも自由は死せず
- (4) 多野 大 江 卓
- (5) 巨人 星 亨(星亨と自由黨)
- (6) 巨人 星 亨(新編入獄事情)
- (7) 政談 荒川 高俊
- (8) 公開の始 荒川 高俊
- (9) 人 兆 民 先生
- (10) 中井 櫻洲と中大久保利通

- (11) 木戸孝允と板垣退助
- (12) 赤坂岩倉公の遭難
- (13) 近藤重蔵と大鹽平八郎
- (14) 池の端 福地源一郎
- (15) 不遇 赤井 景韶
- (16) 奇士 坂本龍馬 附 女丈夫龍子
- (17) 陸奥宗光と小村壽太郎
- (18) 濤澤榮次郎(昔の濤澤榮一)
- (19) 秀吉 中國引返し

伊藤痴遊先生新著

新刊

第二 **快傑傳**

袖珍箱入美装
全一冊約七百頁
正價 金壹圓
送費 八錢

生氣潑刺痛
烈悲壯なる
痴遊君得意
中の最得意
の二十四短
篇逸話集！

- (1) 西園寺侯と中江兆民
- (2) 佐久間象山と吉田松陰
- (3) 江藤新平と福島中將
- (4) 江藤新平の最後
- (5) 勝海舟と宮島談判
- (6) 西郷南洲三た 流罪の事情
- (7) 人 大久保利通
- (8) 憲法發布當日の悲劇
- (9) 志 來島恒喜
- (10) 大山彌助どん
- (11) 宗光丸の由來
- (12) 昔の山本權兵衛
- (13) 學人 福澤諭吉
- (14) 任 野手一郎
- (15) 軍 山縣小太郎
- (16) 客 國定忠次
- (17) 女 野村翠東尼
- (18) 伊藤公と井上侯の血氣時代
- (19) 井上侯の長所短所
- (20) 西園寺侯の長所短所
- (21) 陸奥宗光と伊藤公の情誼
- (22) 寛政の名奉行
- (23) 白木屋呉服店創業の苦心
- (24) 山内一豊の夫人

山路愛山先生著

象山肖像、象山櫻賦 添附

新刊

佐久間象山

大判美本約
貳百九十頁
正價九十五錢
送費八錢

著者卷頭に序して曰く、「人は自ら變化する能はず、水は自ら波を爲す能はず。唯天下の大勢に乗じ、天下の大機に參するものにして始めて竹帛の名を爲すべきなり。後の英才たるもの深く自ら鑑むる所なかるべからず。象山の頭腦は何處までも科學的なり。總ての事を斷するに精細なる計度を以てするの一事に至りては蓋し天下第一人なり。公武合體論を主張し、彥根遷都を主張し、終に奇禍を買ひしもの、亦事實を崇び空想を卑みしに因らすんばあらず」と。之れある哉、當時海内最第一の新智識として、吉田松陰、勝海舟等諸傑の長師と仰がれ、維新志士中の高嶽として、他の群山衆峯を威服せるの感ありしことや。本書則ち——この幕末に於ける科學的文明の卒先の輸入者。鎖國攘夷に反抗せる開國論の大頭目。砲銃、戰艦、諸機械等文明利器の創始的研究者。横濱開港の事實的主唱者。自己の血を以て泰西文明を購へる日本國民の大恩人——たる象山先生の卓拔高邁の偉人格と、堅實精博の大思想とを活寫し、配するに狂瀾澎湃たる維新活劇の一大背景を以てせる快著にして、行文烈々、字々聲あり。輕佻浮華の人心を革清すべき一大壯絶史傳也。

◎出でたり!

山路先生得意の海舟傳!!!

山路先生新著

勝海舟

海舟先生肖像添附
大判全一冊洋裝酒酒
正價九拾錢
送費八錢

本書は英傑西郷南洲翁をして「勝氏へ初めて面會仕候處實に驚入候人物にて、最初打叩く積りにて差越え候處、頓と頭を下げ申候、どれ程智略之れ有るやら知れぬ鹽梅に見受申候、先づ英雄肌合の人にて佐久間(象山)より事の出來候儀は一層も越え候はん」と嘆せしめたる、海舟先生を傳するに、著者が獨特の史眼と、平明の快筆とを以てせるもの、所論警拔、趣味横溢且つ卷尾に「勝先生年譜」十數頁を添附し。縦横に曠世の大偉人が、修養、人格、機略、進退等の迹を解剖精叙し、坐乍ら勝先生に親炙して、以て其の波瀾重疊の經歷譚を聴くの思ひあらしむ近世立志傳の最上乘にして、又明治維新史の屈竟なる側面觀たり。

文學士 佐藤玉川先生著

近刊

快義經

(全一冊) 印刷中

世に涙多きは判官義經の生涯にあらずや。幼にして父を喪ひ、母を敵手に掠められて、轉軻不遇の間に人と爲り、骨肉辛かに相會するを得て、俱に宿敵を討滅したる歎びを分つ暇も無く長を凌ぐの大功は、恩賞を得ずして却つて奇禍を招き、身は羅朝の忌む所となつて、芳野の風雪、衣川の水、禍の手は遙かにみちのくの末に迄及び、英雄の末路歸する所なく、佳人「静」をして泣いて「しづやしづ、しづのをだまきくりかへし、昔を今になすよしもがな」の悲歌を謳はしむ。嗚呼、義經は遂に高館の露と消えたるか、史家は断じて、源九郎身を以て免れたるの證左なしと云ひ、世人は蝦夷及び滿洲蒙古の地を旅行して、義經に關する遺物の頗る多きを怪しむ、夫れ死せりと傲すものは、免れたりと稱するもの非か、みちのくの天は語らず、衣川の水は黙々として流る。只之れを本書讀者の判断に任せむ而已。

機會は眼前に在り

「風雲に乗じて功業を樹てんと欲せば來て英雄に學ばずや？」

福本 先生新著

英雄論

▲大判全一冊 頗美本
▲豊太閣愛扇の圖外
挿畫數葉挿入
正價 壹圓
送費 八錢

豈色を好むのみを以て英雄となさん。豈人を欺くのみを以て英雄の本事となさん。史學文章の泰斗カール・ライル曰く「英雄の傳記は是れ、全世界史の精髓也」と。世に興味深く、價値多きは夫れ英雄の言行に非ずや、文壇の巨擘福本日南先生常に思ひを成敗興亡の理に潜めらるゝの傍ら、其の炬の如き批評眼に、上下數千載の英雄の襟度、英雄の人心、英雄の性僻、英雄の資格、文學的の諸項に分ち、自任に質、英雄の襟度、英雄の人心、英雄の性僻、英雄の資格、文學的の諸項に分ち、自任に古今東西の偉人英雄を拉し來つて、史實を考覈し、逸話を旁證し、滔々數萬言、宛ら天より落ち來る電火の如き豪爽の文を以て、得意の縦横博識を試みられたる大快著にして、卓厲風發、光焰萬丈、一讀人をして手に唾きして起たしむるの概あり。嗚呼！王侯將相寧ろ種あらん乎。人は何人と雖も英雄たるの資格を有す。苟くも當代に處して、コンマ以上の人物たらんと欲するの士は、疾く本書を繰いて、英雄教の福音を傳へよ。

伯爵大隈重信閣下題詞
 兒玉陸軍大將閣下遺墨
 乃木陸軍大將閣下題詠
 大迫陸軍大將閣下題字
 石本陸軍大臣閣下題字
 齋藤陸軍中將閣下題字
 牛島陸軍少將閣下題文
 竹迫陸軍少佐殿序文

身に七彈を被り

萬死の中に一生

を得たる血汗を絞て成

著者が血汗を絞て成

るせ日露實戰譚

(版拾評好)

本書の著者、安川中尉は早稻田大學法科の出身にして、中隊長代理として征露の軍に從ひ二〇三高地の突撃四方臺の會戰等、大小幾十戰を経て、備前に楠風沐雨の苦難を嘗め、死の中に不可思議の生命を拾ひ得て、茲に當時の軍中日記を基礎とし、雄麗絢爛の才筆を驅て、其の再生の紀念たる「血煙」を成せるものにして、句々熱涙、字々赤誠、同胞の才筆を、肉と砲火とを以て彩られし、猛烈凄慘なる龍虎鬪の壯觀を精寫して、紙表鬼哭の血を、其の聲を聞く。彼の徒らに戦争の慘禍を説きて、此種の著書に眼を掩ふ者は、決して驚心駭目すべき血煙彈雨の大活劇を親睹するの愉快を滿喫するに止まらざるの實益を享けん、近來の快著也。

血煙

(圖挿)

正價壹圓

奉天に於ける著者の負傷一コロタイの二〇三高地に漲る(寫真版)忠魂碑中佐銅像軍外數葉旅順攻圍軍外數葉美本約三百六十頁

陸軍歩兵中尉 安川隆治君著

清國 日本 吳汝綸氏遺墨 柳坡 小川運平先生著 附 清國革命論

新刊 支那 及 支那人

附錄(支那革命の真相)

人を離れて、事なく、地を離れて、人なし。支那を知らんと欲するものは、單に其の山川の形勢、物資の集散、交通機關の過不及等を知るのみに満足せず、進んで支那人を理解せざるべからず。是れ從來の地理書、紀行記等に未だ之れなくして、獨り本書のみ之れを詳記せる所なり。本書の著者は嘗て清國に遊ぶこと再三、數回も管本を有せる、親しく彼れに於ける上下各階級の諸人士と交り、此の我國と最も親密の關係を有せる、唇齒輔車の同文國を理解すること極めて深く、政治の内情、外交の機變、人情、風俗、歴史等の見地より支那に於ける各人種の關係等に就き、微を聞き、細を拆き、支那及支那人に就きて縱横精密の觀察を下し、以て本書を成せるもの、眞に是れ地理書以上の最近支那實情記と稱すべし。苟くも東洋の開發に志を有する者、及び對岸の寶庫に志を有する士は速に來つて本書を編け、附録支那革命の真相」は卷頭福本日南先生の「清國革命論」と相俟つて俱に經世の一大活文字!

支那現勢地圖 外口繪數葉添附

大判貳百廿頁 洋裝美本全一冊 正價八拾錢 送費八錢

大 阪 朝 日 新 聞 連 載
爆 發 的 大 好 評
綠 園 生 著

◎ **立身出世**の活例を「**新太閤記**」
 指示せる

見よ！草履つかみは愈々頭角を現し來れり！

豊臣秀吉

● 菊判美本各巻三百數十頁
 ● 口繪各原色美術版挿入
正價冊壹圓

送費一冊八錢

▲ 日吉丸の巻	▲ 藤吉郎の巻	▲ 藤吉郎(續編)	▲ 筑前守の巻	▲ 太閤の巻
成既	成既	刊近	刊續	刊續

過去の日本が産出せし英雄中の大英雄として、以て世界に誇るべき我豊太閤が波瀾萬丈の活生涯と、人材雲の如く、俊傑林の如き、我國史の華とも稱すべき戦國時代の龍驤り、虎嘯く壯絶快絶の大偉觀等を綠園先生が興味溢るゝ計りの史筆を揮て、縦横に精叙せられたるもの、匂々熱血、字々火を噴く、今や藤吉郎の巻成りて、談は益々佳境に進めり。一讀人をして發奮せしむべき空前の英雄立身傳也

新 古 講 談 の 粹 を 萃 め ため る

袖 珍 講 談 叢 書

◎ 汽車中、電車中に於ける
唯一無二の好伴侶

◎ 飛び立つ程面白く、読む度び毎に士氣を養ふ
理想的の優等講談本

第一篇 小金井 蘆洲述	第二篇 一龍齋 貞山述	第三篇 錦城齋 典山述	第四篇 西尾隣 慶口述	第五篇 故松林 伯圓述
堀部安兵衛	寛曾我物語	荒木又右衛門 後日の仇討	大川友右衛門	河内山宗俊
一冊讀切 製本既成	一冊讀切 製本既成	一冊讀切 製本既成	一冊讀切 製本既成	一冊讀切 製本既成

正 價 冊 壹 圓 一 均 錢 卅 價 正
 送 費 一 冊 八 錢 送 費 各 冊 四 錢
 約 二 百 五 十 頁 表 紙 一 冊 均 錢 卅 價 正

文學博士 幸田露伴先生 訂校題

日本文藝叢書

(全貳百卷)

この叢書を持たぬのは

校訂 嚴正

誰れが讀みても趣味深き
珍本名著の國民的大寶庫

振付

既成目錄

- (1) 椿説弓張月(上)
- (2) 新通俗三國志(一)
- (3) 椿説弓張月(中)
- (4) 道中膝栗毛(前)
- (5) 新訂太平記(一)
- (6) 新通俗三國志(二)
- (7) 近松浄瑠璃 心中天の飛鳥 冥途の女 博多小波 國性合戦 曾我合戦 山
- (8) 椿説弓張月(下) 附「普賢屋敷」
- (9) 新訂太平記(二)
- (10) 道中膝栗毛(後) 附「金比羅詣腰栗毛」
- (11) 新通俗三國志(三)
- (12) 西鶴佳作集 日本永代藏 世間胸算川 西鶴説土産
- (13) 新訂太平記(三)
- (14) 奇俠客傳(上)
- (15) 其作集 商人軍配圖 世間子心氣貫 其積諸國物語
- (16) 新通俗三國志(四)
- (17) 新訂太平記(四)
- (18) 一休諸國物語(全)
- (19) 奇俠客傳(中)
- (20) 浮世風呂(全)
- (21) 新通俗三國志(五)

堅五寸横三寸携帶至便
(上等船來紙三百頁内外)

文學博士 幸田露伴先生 訂校題

藝叢書

(每月刊行)
數冊

讀書家の一大耻辱

裝幀 優雅

既成目錄

- (22) 奇俠客傳(下)
- (23) 浮世床(全)
- (24) 新訂太平記(五)
- (25) 新通俗三國志(六)
- (26) 大同政談 村井長庵一件 煙草屋喜八一件 小間物屋彦兵衛一件
- (27) 新通俗三國志(七)
- (28) 續大同政談 天一坊一件 雲仁左衛門一件 白木屋お熊一件
- (29) 邯鄲諸國物語(前)
- (30) 邯鄲諸國物語(後)
- (31) 花八笑人(全)
- (32) 新通俗三國志(八)
- (33) 馬佳作集 世間夜月 靈妙同夜月
- (34) 正史いろは文庫(前)
- (35) 正史いろは文庫(後)
- (36) 近松浄瑠璃集(三)
- (37) 平家物語(前)
- (38) 平家物語(後)
- (39) 新水滸傳(一)
- (40) 西鶴佳作集(二)
- (41) 枕草紙(合卷)
- (42) 徒然草(合卷)
- (43) 新水滸傳(二)

每册正價貳拾錢◎特製美裝卅錢
(送費一册四錢) (五册迄八錢)

印刷 鮮明

全卷幸田露伴博士の精鑿を経たる
日本文藝の代表的傑作全集

東亞堂發行傳記書類

熊田 華城先生著 報知新聞記者	堀内 新泉先生著	楓村 居士先生著	福本 日南先生著	破 庵 禪居士著	德高 蘇峰先生序 鹽見 戈山先生編	足立 栗園先生著	山路 愛山先生著
○天少年武士道 第二	○立志全力の人	○傳奇俠雄錄	○英雄論	○偉人修養史	○修養偉人の風化	○古英雄の生活觀	○武家時代史論
冊二全 入箱口	冊二全 入箱口	入箱口 冊一全	冊一全 中別印	冊一全 裝洋美	冊一全 裝洋美	冊一全 裝洋美	冊一全 裝洋美
送正費價 各四拾錢	送後前編 各六十五錢	送正費價 八拾錢	送正費價 未定	送正費價 八拾錢	送正費價 五拾錢	送正費價 四拾錢	送正費價 六拾錢

諸大名家校註

車上叢書

(全十二卷)

(每月刊行)

○紙華訂裝二外内頁百三紙洋來箱二分八寸三廣寸五堅○

校註
周密

既刊目錄

裝釘
堅牢

和漢名著の
最新註譯叢書

第一卷 四田 靜 言志錄講話
第二卷 野田 靜 沈窓漫筆
第三卷 大田 立 沈窓漫筆
第四卷 野田 立 沈窓漫筆
第五卷 足利 立 沈窓漫筆
第六卷 足利 立 沈窓漫筆
第七卷 小加 立 沈窓漫筆
第八卷 足利 立 沈窓漫筆
第九卷 足利 立 沈窓漫筆
第十卷 東亞 立 沈窓漫筆

古今珍本の
一大ライブラリー

送各冊
金八錢

(行刊々下以卷一十第)

正似各冊
金六拾錢
均一

東亞堂發行傳記書類

伊藤痴遊先生著	韓田長江先生編	白田石楠先生編	文學士 白河鯉洋先生著	沼波文學士校閱 宮垣四海庵先生著	青尼薩台巖師校閱 青山霞村先生著	文學士 幸田成友先生著	文學博士 幸田露伴先生著
○吉田松陰	○福澤翁言行錄	○西鄉南洲言行錄	○孔子	○俳味禪味 <small>(俳聖芭蕉傳)</small>	○深草の元政	○大鹽平八郎	○賴朝
册一全 中刷印	册一全 裝洋美	册一全 裝洋美	册一全 裝洋美	册一全 裝洋美	册一全 裝洋美	册一全 木美極	册一全 雅優類
送正 費價 未未	送正 費價 四册 五	送正 費價 八六 拾	送正 費價 八壹 圓貳拾	送正 費價 四四 拾	送正 費價 八七 拾	送正 費價 拾壹 圓貳拾	送正 費價 八壹 圓拾
定定	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢	錢錢

335
3501

終